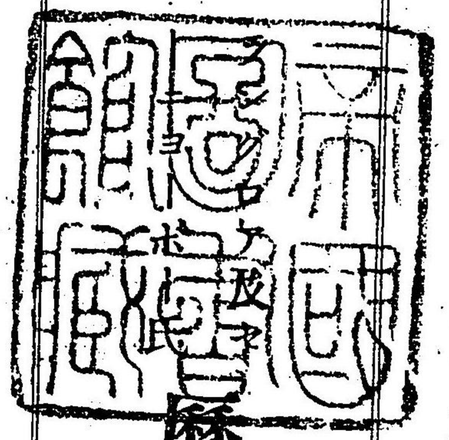
文學士 村川堅固
文學士 石澤發身 解說



歷史研究法綱要

東京專門學校出版部藏版

ラングロア及セーニョーボー氏

歴史研究法綱要目次

序言……一
原著緒言……四
第一編　準備的研究
第一章　文書蒐集(Heuristique)……一三
第二章　補助學科……一六
第二編　解析的作業(Opération Analgtiques)
第一章　史的智識の一般條件……三九
第一部　外的批判
第二章　本文批判……四五
第三章　著者に就ての批判的研究……五四
第四章　史料の批判的類別……六三
第五章　外的批判と外的批判家……六九
第二部　内的批判

第六章　解釋的批判(Herméneutique)……八九
第七章　著者の信用及ひ精密に關する消極的内的批判……一〇〇
第八章　特別の事實の決定……一三二
第三編　綜合的作業
第一章　歴史組成の一般條件……一五三
第二章　事實の類聚……一六一
第三章　組成的推理……一六八
第四章　一般公式の構成……一七三
第五章　表彰……一八四
結　論……一九二

以上

ランクロア及セニョーボー氏歴史研究法綱要目次

序　言……一
原著緒言……四
第一編　準備的研究
第一章　文書蒐集(Heuristique)……一三
第二章　補助學科……一六
第二編　解析的作業(Opération Analgtiques)……三九
第一部　外的批判
第二章　本文批判……四五
第三章　著者に就ての批判的研究……五四
第四章　史料の批判的類別……六三
第五章　外的批判と外的批判家……六九
第二部　内的批判

第六章　解釋的批判(Herméneutique)……八九
第七章　著者の信用及ひ精密に關する消極的內的批判……一〇〇
第八章　特別の事實の決定……一三二

第三編　綜合的作業
第一章　歷史組成の一般條件……一五三
第二章　事實の類聚……一六一
第三章　組成的推理……一六八
第四章　一般公式の構成……一七三
第五章　表彰……一八四
結　論……一九二

以上

ラングロア、セーニョーボー　歷史研究法綱要

序　言

昨年名著綱要の發刊に際し、予はベルンハイム氏史學研究法解說の需に應じ畫きたり。然るに今之に代ゆるにラングロア、セーニョーボー二氏の共著に係る歷史研究法を以てしたるに就ては、一言之を辯し置くの要あり。

ベルンハイム氏の書はルナン。フュステル、ド、クーランジュ。フリーマン。ドロイゼン。ローレンツ。スタッブス等諸史學家の歷史研究に關する意見の其の著述中又は雜誌就職演說等に散見せるものを蒐集し、之を自家の組織に收めたるものにして、其書の性質頗る精到せるものなるも、其六百頁の間に論述せる所を短縮して、之を名著綱要の許す紙數の內に收むるは、本書の性質上頗る困難なるのみならず、强て之を爲す時は記事抽象に過き、讀者の理解に適せずして、徒に勞多く功少きの恐あり。且ベルンハイムの書は主として歷史研究の理論を說き、其の實用的方面に於て稍々備らざる所あるはラングロア、セーニョーボー二氏の其の著の緖言に述ふる

所の如くなるか故に、予は史學專門家に非さる多數讀者の爲めにはベルンハイム氏の書を選擇するの適當に非るを感じたり。之に反してラングロア。セーニボー二氏の書は、普通讀者及始めて歴史研究の途に上らんと欲するものゝ爲に、勉めて簡潔に、勉めて明瞭に實用を主として、歴史研究法の大要を說けるを以て、名著綱要中の書として、極めて適當なるべきを思ひ、乃ち本誌出版部に諮りて、之に變更することゝせり。

ラングロア氏 (Langlois) は『歴史書史』(Manuel de Bibliographie Historique) の著者として、セーニボー氏 (Seignobos) は『最近世歐洲政治史』(Histoire Politique de L'Europe Contemporaine) の著者として、共に現今佛國の史學會に錚々の聞えある人あり。茲に解說せんとする歴史研究法の原名は Introduction aux Études Historiques と稱し、千八百九十七年巴里に出版せられたり。翌年英國のベリー氏 (Berry) 其好著なるを見、之を英譯して、英語讀書界に廣めたり。

予は本書の解說に着手せんとするに當り、少しく病ありしを以て、掲載の約に背かんことを恐れ、學友石澤敬身君に請ふに、其一半を擔當せられんことを以てし、其承諾を得たり。故に主として君の筆を執られたる部分と、主として予の之に當りたる部分と相交れりと雖も、解說の體裁、譯語等に就いては常に相談議したるを以て、前後柄鑒することなきは予の期する所なり

村川堅固識

ラングロア、セーニョーボー

歴史研究法綱要

文學士 村川堅固
文學士 石澤發身 解說

原著緒言

本書の標題は卷題に掲ぐる所に依りて一目瞭然たるべし。然も既に Introduction aux Études Historiques なる名稱の下に發行せられたる書籍にして、往々本著と全く其の性質を異にする著書あるを以て、一應余輩の目的は何れの邊に存するかを略言する必要あり。余輩の目的はボイス氏の如く、初學者及ひ平生讀書の閑なき讀者の爲めに本書を以て萬國歴史の綱要を敘せんと欲する趣意に非らず。されはとて富饒なる文學の中に加ふるに、普通所謂歴史哲學と稱する一新學科を以てせんとする趣意にも非らず。世に多くは專門史家に非る思想家あり。歴史を以て其の默想の題目と爲し、其の比論及ひ法則を求索し、甚だしきは之れより總

て人性の發達を支配する大法則を發見したりと想像し、斯くの如くして歴史を以て實驗的科學の列に高めんと欲す。斯くの如き漠然たる抽象的推定の只一般の公衆に止まらずして有識の士までも、遂に之を唱ふるに至りしは、畢竟既に打克つ能はざる先天的誤謬に鼓吹せられたるに因る。近世に於ける史傳家の曰ふ處に據れは、フェステル、ド、クーランジは大に歴史哲學を酷評し、恰も實驗哲學者か形而上學に對するが如く、頗る之れを蔑視せり。事の正邪は別問題として、兎に角此の歴史哲學なるものは爾來久しく學者の研磨開拓を經ざりしを以て今日に於ては殆んど消滅に歸しぬ。

余輩は歴史的知識の性質並ひに限界を示すべき條件及ひ方法を審査せんと欲するものなり。即ち余輩は如何にして過去に關して其の何れの部分か事實在り得べきとなるか。何れの部分か之を知得すべき要あるか。文書とは何ぞや。歴史的研究には如何に文書を使用すべきか。歴史的事實とは何ぞや。歴史を編む爲めには如何に之を類聚すべきか等の問題是れなり。苟くも身を以て歴史の研究に當るものは何人と雖も多少不知不識の間に批判組立解析綜合の運用を爲すも

のなり。然れども初心者及び曾て歴史研究法の原則を窺ひたることなきものゝ多數までが、此等の運用を爲す所以の者は、全く其無意識的(アンスタンクチフ)方法を用ふるに因るものなり。此等の方法たるや通常合理的方法に非るを以て其結果科學的眞實に到達せざるを常とす。故に眞に合理的方法の理論を闡らしめ、又論理的に之を辯明するは有益なりとす。其の理論は或部分に於ては既に確定せりと雖も、最も重要なる諸點に於て尚ほ不完全なるを免れざるなり。

要之本書の目的とする處は確定事實の梗概を論ずるに非らず。將た一般歴史の概括的系統を紹介するにもあらず。唯た殊に史學研究の方法手段に關して論述せるものなり。余輩は先づ斯くの如き著書の出るを便利なりとする理由を説明し併せて本著編纂の精神に及ばんと欲す。

一　抑々史學の研究法を論ぜし書籍は坊間極めて其の例に乏しきと仝時に、歴史哲學ほど世間の愛顧を受けず。歴史專門家は之を蔑視し、世間普遍の輿論は或學者に對して與へし批評即ち『汝は言語に關する書籍を著はさんと欲するとか。併かし汝は寧ろ巧妙なる言語を以て一書を製作するに如かず。若し人あり余に言語學の定義如何と問はゞ余は答へん、凡そ余の呼せし文章即ち是れなりと』と謂ふにて其の一般を知るべし。又或批評家は『ドロイセンの史學研究法に關し頗る陳套なる説を唱へて曰く『斯くの如き種類の論文は概ね曖昧にして且つ不必要なり。即ち其の論ずる題目の極めて漠然たると之より甚だしきものあらざるが故に、曖昧なりと謂ふなり。假令彼等の所謂研究方法なるものを窺はずと雖も、尚優に良史家となり得るの途あるが故に、不必要なりと謂ふなり』と。蓋し這般の史學研究法無視論は外觀上極めて強きが如し。要するに彼等は曰く、曾て毫も研究法の原則を窺はざるものにして、明かに適當なる方法に準じ、而かも第一流の學者若しくは歴史家として指を屈せらるゝ人多きに反して、論理的方面より堂々として史學研究法を論ぜし者が却て學者若しくは史家として卓絶せる伎倆を示さゞるものあり。否却て其の伎倆の劣等凡庸に屬するものなきにしも非ず。彼等は一として余輩の注目を惹くに足るべき傑著を製作せざるなり。今若し化學數學の如き科學の研究方法を學ばざる迄は、此等科學の研究を猶豫すべしと曰はゞ、何人も其の迂愚を笑ふべし。史的批判亦然り。之を學ぶの最良法は幾度となく之を

試驗するに在り。數々之を應用練習する時は漸々其の缺處を補ひ、益々完成の域に達すべし。更に一歩を進めて現行の歴史研究法に關する書籍例へばドロイセン、ブリーマン、タルヂフ、シユベリヱ等の著書を閲覽するも、極めて平凡陳腐なる眞理以外に何ものをも發見せざるべしと。

余輩窃かに惟へらく、右の如き非難は全然不當には非らずと。蓋し史學研究法及ひ修史法(英獨にて之をHistoricと稱す)に關する從來の書籍は概して淺薄無味、乾澁讀み難く、時としては一笑に附すべきものあり。先づ前世紀に溯りてドーメーが其の著史學研究法講義(Cours d'études historiques)に於て與へたる解析は殆んど修辭法に關する論文とも見るべきものにして、極めて陳腐に屬し、且つ其の論題の奇怪なる想像以外に在り。降て十九世紀に到りドロイゼンの修史法原理(Grundriss der Historik)も乾燥無味獨斷的議論に富み、意想外に論旨錯雜せり。其の他フリーマン、タルヂフ、シユベリヱの著書に至ては唯初學者の教科書として作られたるものなるが故に、平々凡々採るに足らず。然り而して以上諸大家の系統を引ける者は殆常に筆端をそろへて、歴史は科學なりや。技術なりや。歴史學の職責如何。史學の應用如何と云ふが如き極めて空漠なる問題を捉ちへて論ずるのみ。然かも其の角、現今の專門史家は既に數度の練習の功に因り、若くは昔の信用ある大家の方法に倣ひたるものゝ外は、殆んど此の研究方法の知識を自得する能はずと云ふ事は、毫も爭ふ可らざる事實なりと信ず。

然り而して研究方法の原則に關する著作は凡て探るに足るものの尠く、且つ有名なる專門家にして毫も史學研究法の門を窺はざるにも拘はらず、優に無結果を來さゝるか故に、專門歴史家殊に未來の歴史家は斷じて史學研究の手續を知るの必要なしと極論するは、明に甚しき謬見たるを免れず。凡そ研究法なるものは全く其の價値なきものに非らず。史家か昔より今に至るまで漸々實驗に實驗を累ねたる結果、巧妙なる觀察法及ひ正確なる規則の包塊を構成し、單に一般人か常識を以てするも到底窺ひ知る能はざるものをも含むに至れり。又或は理論を學ばずして生れながら常に能く道理を解するものゝ存在を許すとしても、斯くの如きは寧ろ例外の部類に屬することを忘るべからず。現に論理法の不識、不合理的方法の運用、又は史的解析及ひ綜合の要件を知らざるが爲に、專門史家の著作か全然其の價

値を失墜せし例、枚擧に遑あらざるを觀ても思ひ半はに過ぎむ。

抑々學問の分科中特に史學は明かに其の研究方法に熟達すると其の學生に取て大に必要なり。何となれは史學に於て所謂無意識的(アンベヴスステー)方法は則ち不合理的方法なり。從て最初の感激に反抗する爲めに或準備を要すればなり。加之史的智識を得るの合理的方法は凡て他の科學の研究法と異る所あり。既に整頓せられたる他の科學の研究法を推して直ちに史學に應用する能はず。是れ即ち數理學者若しくは化學者か歴史家に比して研究法なるものを無視する所以なり。斯くの如く史學研究法に對する世の駁論は毫も肯綮に當らざるか故に、爰に故らに史學研究法の利益を喋々するの必要を見ずと雖も、只本著編述の理由を一通り辯明せんとす。過去五十年の間に於て瞥見あり、公平なる眼光を有するものは、概ね史學の研究法を默想し、從て吾人は之を論せし多くの歴史家大學教授專門論理學者小説家を見たり。フユステル、ド、クーランジは巴里大學に於て、研究法の規則を極めて精細なる公式に縮め、如何にせば史的眞實を得るかの方法を學生に教授せり。其の他ルナン、フリヒマン、ドロイゼン、ローレンツ、スタッブス、ド、スメット、ブオン、ブルハ

ハルツン等を始め、幾多の史家其の意見を發表せるもの或は小冊子として現はれ、或は雜誌中に、或は就職演説に、或は教室の講義等に散見せり。而して非常の勞力を吝まず、之を綜合し、自己の案出せる組織に收めたるもの本書以前既に獨逸グライフスワルド大學教授エルンスト、ベルンハイムの歴史研究法 (Lehrbuch der historischen Methode) あり。余輩は既に斯くの如き好著あるにも拘はらず、更に此事業を再び繰返さんと欲せし理由は即ち之を約言すれば(一)ベルンハイムの著は主として哲學的(フイロゾフイック)問題を論じて、歴史研究の實際的方面に於て重要なる問題の遺漏せるものあり(二)ベルンハイムの著は正確なれとも、活氣と創見とを缺けり(三)ベルンハイムの著は廣く公衆を相手とせず。其の用語及ひ其の組成の樣式は佛國讀書家の多數をして之を解せしむる能はざるの三點に在り。

二　余輩は本書を以て Lehrbuch der historischen Methode の如き、研究法の詳細なる論文とする趣意にあらず。只輪廓に亘る梗概を叙するを以て滿足せり。本書の稿を起せしは千八百九十六年より七年に亘れる學年の始にして、新に歴史研究に着手するものゝ多數は、歴史研究の性質に就て唯漠然たる思想を有し、或は之を容

勿なりと思ひ過ぎ、或は自己の性質かゝに適するや否やを顧みず、漫然之に着手するを以て、此等に對して歴史研究の如何なるものなるかを知らしむるに在り。故に本書の目的はベルンハイムの專ら現在及ひ未來の歴史專門家の爲めに作れるものと異り、併せて歴史に興味を有する一般公衆の爲にせるものなり。故に記事は勉めて簡潔に勉めて明瞭に用語は勉めて之を平易にせり。

而して兩著者の分擔に就いてラングロアは第一篇及ひ第二篇の六章までと第二附錄及ひ序文を作り、セーニョーボーは第三篇及ひ第一附錄を作り、第一篇の第一章及ひ第三篇第五章は兩人の共述に係る。

千八百九十七年　八月　巴里

第一篇　準備的研究

第一章　文書蒐集 (Heuristique)

凡そ歴史家は文書を使用し其の目的を完ふするものなりとす。文書とは前時代に於ける人間の思想及ひ活動に依りて後世に遺されたる遺物なり。ユーリヤル門氏の所謂人類活動の遺物にして、歴史的事業の知得及ひ證明を根本的に決定し、若しくは其の存在期限及ひ其の他の者に密接の關係を有するものなり。然かも右の思想及ひ活動の遺跡は概ね其の能にて現存するものなく、假令少しくありとするも、幾多の星霜を費やす中に不慮の事變に因りて消滅せられ易きものなるが故に往々過去に於ける人生の歴史は長へに黯雲黑霧の裡に包まるゝを見る。要するに文書以外文書に代はるべきものなきが故に、文書なきは即ち歴史なきなり。此の事實の遺物と認むべき文書よりして正當なる推斷を下すには、後にも述ふる如く、種々の細密なる注意を要す。併かし文書の批判及ひ解釋を論ずるに前だち

て先づ第一に苟くも文書ありや否や。若しありとせば如何に多くの文書ありや。又其の文書は何處に在りやの問題を論究するとを要す。凡そ我輩が歴史の或問題目を研究せんとするに當り、劈頭第一其の事實に關する文書の何處に在るかを知らざるべからず。於是文書の搜索及び蒐集は史家の伎倆中最も緊要なる事業に屬するとを知らん。獨逸に於ては特に之をホイリスチック(Heuristik)と稱す。蓋し史料蒐集の必要は曰はずして明かなれど、史學が若し史料の蒐集を怠り、不完全なる文書を以て大膽にも史的結論を推斷せんとするは、頗る無責任の甚たしきものにして、現に昔は有益にして信憑するに足るべき大家の作が後世新史料の發見せられたる爲に、名著化して駄作となりしもの頻々として枚擧に遑あらず。今日の史家は過去二三世紀前の先輩に比し、比較的富饒なる史料に圍まるゝを以て、從てホイリスチックも漸々容易に傾きしは事實なり。併かし過去に於て前人が開拓したる史料蒐集の進歩著るしかりしにも拘はらず、尚今日に於て侮るべからざる困難の其の裡に伏在するは何故なりや、又此困難を匡救する策如何に就て左に述ぶる所あらんとす。

一　初め史料より歴史を編まんと欲するに際し、其の研究せんと欲する事件は最近のものに係り、其の事實を識りし故老の現存するあれば、之に就て詳細に其の眞事實を取調ふることと敢て難しとせず。スーシャット、プロアサール等の史家は此手段に據れり。カリフォルニアのベンクロフト氏(太平洋沿岸國史の著者)は、當時仍ほ生殘せる其の事件の關係人より種々の材料を蒐集し、一々彼等の直話を筆記せしめんが爲め一の報告隊を組織しぬ。併し既に事の舊きに失し、從て之を目睹耳聞せし故老の存せざる場合には、此事に關する舊文書を參照するより外に途なきなり。偖て當時は圖書館極めて稀に、修史局は專ら秘密を旨とし、多くの文書は大概散逸せるを以て、彼は其の財力を利用し、諸處の市場より印行若しくは筆寫にかゝるあらゆる文書を買收し、貧民と相協議して其の珍書を買ひ、又は殊に人を諸方に派して之を寫さしめ、斯くの如くして得たる總ての書籍を一館内に貯藏して、秩序正しく之れを類別せり。此の方法たるや理論上毫も間然すべき點なしと雖も、巨萬の富を費やし、畢生の勤勉勞力を加ふるに非ずんば、到底不可能の事にして、ベンクロフト氏人の如き境遇に於て初めて其用を爲せしなり。普通一般の史學

生は到底斯くの如き史料蒐集の手段を採用する能はず。

ルネサンスの時代に於ては古代及び近世歴史の文書は無數の私設圖書館及び修史局に散在し、假令此の内に屏息して終生を費やすと雖も、其の參考文書を捜索するは人間の能力以外に在りき。此の自然の結果(一)最時の歴史家は其の研究題目に就き總ての文書を捜索する能はざるを以て、已むなく自己の手に届く丈けの史料を基として之を編述せり。併かし此の方法に就ては前にも述べし如く、反證を示すべき新史料の發見と共に、名作化して駄作となるの缺點あり。(二)故に第一流の學者及び史家は其の職業(圖書館員修史局員僧侶官吏)を利用して、豐富なる文書を貯藏せる倉庫を自邸に構へ、單獨にて之を專用せり。

右の時代を經て史料蒐集者なる社會の一階級起れり。彼等は少しく科學的研究に就て嗜味を有するものなるが、其蒐集の範圍に就てはベンクロフト氏と其趣きを異にせり。ベンクロフト氏は只特別の史料即ち太平洋沿岸國の歴史に關する文書を集むるとを以て其唯一の目的とせしも、當時の史料蒐集者はあらゆる方面に關する文書を集めんとするものなりき。彼等は其所藏文書の破毀紛失せらるる

〻危險を恐れ、故舊知人の外は一切他の借覽を許さず、深く書庫の内に藏せしを以て、專門史家と雖も容易に之を參考すると克はざりき。蓋し此時代に於てホイッスチックを眞に容易ならしめんと欲せば、須らく第一の急務として這般の文書を公開するに在り。ルネサンス時代に於て最多く完全に文書を貯藏せるものは即ち王立の圖書館及博物館なりき。他の私人の有に歸する文書は其創立者の死亡と共に諸方に飛散して其跡を止めざるに反して、是れは益々發達增加し、他の私設文書館の建設と共に之を吸收し、益々膨大擴張するの勢あり。例之佛王の創立に係り十八世紀の終尾に於て公開せられたるLe cabinet des manuscrits de France(佛蘭西文書館)の如きは大概坊間の史料を吸收せり、斯の如きことは他國に於ても多く此例を有せり。斯くの如き大なる公開機關の中に史料の集中する現象は兎に角最も幸福なる自然の發展と謂ふべし。

爰に革命の專制的手段は計らずも史的蒐集の改良進歩の上に一大影響を與へたり。佛國に於ける千七百八十九年の革命は、從來皇室の管轄に帰せし修史局圖書館博物館及寺院の内に藏せし諸文書を總て國庫に沒收したり。斯くの如くして

其翌年佛國の憲法議會は其以前に散逸し、且つ公衆の閲覧を許さゞりし文書を總て共和政府に收容し、之を四個の異れる國立機關に區分しぬ。又同一の現象は獨逸西班牙及伊太利に於て見る所なり。

革命時代に於て文書を沒收し、又其の前時代に於て個人の手に文書を蒐集するに際し、實際其局に當るものは毫も文書の性質價値を知らざる野蠻人にして、或は文書を切斷して四分五裂の零片となし、或は其要部を採り其他は淘汰したりと稱し貴重なる文書に對し無鐵砲なる處分を行ひしを以て、史學上の研究に非常なる損害を與へしと少なからず。併かし假令此の損害が事實に十倍せりと假定するも、左の如き二大利益を以て十分に之を補塡するとを得。即ち(一)文書の集中 (二)文書館の公開是れなり。斯くの如く不慮の事變及野蠻行爲の難關を通過し來りし史料は、今や終に公共財産として、一館の内に藏せられ、類別せられ、洽く衆人の觀覧に供せらるゝとなれり。

爰に吾人の希望すべきは、文書館(修史局圖書館及ひ博物館)の數餘り多きに失せざるとなり。吾人は幸にして之を百年以前に比すれば、益々其數の減じ行きしを認む。今日に於ては、文書蒐集の問題は最早其必要なく、學者は其現在せる市府の圖書館に在りて坐ながら、聖土彼得堡(ペツセルス)、プロランスに於ける圖書館内の文書を參考することを得。夫の巴里の Les Archives nationales (國立修史局)倫敦の Le Musée britannique (英國博物館)等の如く其内容の借覧を絶對的に嚴禁するは寧ろ異數の例に屬す。

二、前述の如く史料の多數が公共機關(修史局圖書館及博物館)内に集中保存せられたりとするも仍ホイリスチツクは完全とならざるなり。即ち現存せる文書に付て適當なる解題目錄の存在するや。此等の目錄はインデツキスを具うるや。一般の索引(レペルトアール)(イロハ順、系統順)なるものの作らるゝや。總て此等の目錄及インデツキスを完全に集めたりと見做すべき個所ありや。悲ひ哉斯くの如き條件は現今と雖も十分に完全せざるを以て、ホイリスチツクの完了を告くる未た夙しと曰はざるを得ざるなり。

世の文書館(修史局圖書館及ひ博物館)にして、全然其内容の目錄を具へざるあり。故に何人も其内に何物を包藏するかを知る能はず。又吾人の所謂完全なる解題

目錄を有する文書館は極めて稀にして、單に其の一部分のみの目錄を具へ、其他は曖昧模糊たる裡に伏在するものあり。現行の書籍目錄中に如何なる類別ありや。或は近世の文書類別法に憑らざるが故に、解題なければ用ゆる能はざる目錄あり。或は舊式に據り、或は新式に據り、或ものは詳密に過き、或ものは簡單に失し、或ものは印行せられ、或ものは筆寫せらるゝあり。故に假令全生涯を通じて斯くの如く錯雜せる目錄を渉獵するも、到底自家の目的を達する能はざるべし。要するに現今大圖書館の多數は只不完全なる目錄を具へ、學者を導くべき指南車となるべきもの一もなしと云ふ有樣なり。

夫れ然り實に目錄なき文書館の内に含まれたる文書は、實際身自ら其の内容の全體を渉獵するの暇なき搜索者に取て、恰も文書なきに異らず。余輩の前に述べし如く文書なきは即ち歷史なきなり。即ち歷史の進歩は文書館目錄の善惡に依て偉大なる影響を受く。故に夫のベール、ベルナール、ド、モンフォーン(pére Bernard de Montfaucon)氏は其著Bibliotheca Bibliothecarum manuscriptorum nova(書籍目錄の類聚)を以て彼の全生涯に於て成效を告げたる最も必要にして最も嗜味ある著作事業なりと考へたり。千八百四十八年ルナンは一書に敍して曰く、科學の現狀に於て、最必要なるは圖書館所藏文書の批判的目錄より切なるはなし。(外觀は何等益なき仕事の如く思はるれども)而して仍ほ學者の研究が其の目錄不完全なるが爲めに妨げらるゝと幾何なるやを知らずと。又マイヤー氏は曰く若しデリールの先輩が、(巴里に於る國民的書史の當事者としての彼の伎倆を以て)彼と同等の熱心と勤勉とを以て、藏書の目錄を調製せしならば、或は我文學の上に仍ほ一層好傑作を貢獻せしならんと。斯る理由あるにも拘はらず佛國及其他の國の文部卿にして、此眞理を悟りしものは頗る稀に、從て此の方針に依り働かんと決心せしものなきが如し。蓋し目錄を調製する最良方法の嚴然一定するに至りしは、極めて近世の事にして、目錄調製員養成の方法も漸を追ふて改良の方向に進めり。蓋し目錄製作の途に横はる妨害は財力及人物の缺乏に基けとも、他の種類の原因も之に影響せさるにあらず。抑々文書館に屬する吏員は常に熱心に精確なる目錄を調製するに盡力せざるなり。尤も目錄の調製は勞力多くして快樂及報酬之に伴はざる事業なり。故に彼等自身の搜索に便利なる排列の方法のみを工夫するに傾し、一般公

業に對して十分便利に其の目錄利用の餘地を存せしめざるの弊あり。

盡し解題目錄の不完全は吾人の注意すべき結果を生ず。即ち一方に於ては吾人は汎て知識の材料を渉獵したるや否やを確むる能はず。目錄なき文書の集合中に於て、何を以てか如何なる內容を保藏するかを知るを得んや。又一方に於て知識の最大量を得る爲めには、全くホイリスチックの手段を以て、時の大半を準備的搜索に費やさゞるべからず。歷史の一題目を論せんが爲め、事實の點に就て文書を蒐集せんと欲する者は、先づインデッキス及目錄を參照するならん。初學者此の緊要なる作業に從ふや、極めて遲く、熟練を欠き、非常の勞力を費やし、之れを先輩の眼より看れは嘲笑すべき個所頗る多からん。斯くの如く初學者が目錄の迷宮中に彷徨して、最も貴重なる材料を觀過し、毫も必要なき材料を深く窮尋しつゝある有樣を憫笑する先輩も、必すや最初は斯くの如く同じ經驗を經來りしに相違なし。此先輩が自己の經驗に鑑みて自得せし文書搜索法の秘訣を初學者に對して發表する時は、其の後進學生を裨益すると果して幾何そや。是れホイリスチックなる學問の起りし所以なり。

若し夫れ公共圖書館に於ける史料の搜索か考古學の如く其のものゝ性質上絕對的に勞多き事業なりと定まらば、何人も皆其不便に從はざる可からずと雖も、現今に於けるホイリスチック機關の不完全は全く療治の見込なしと云ふにあらず。ホイリスチックの機關は、我曹の觀る處に據れは、二個の方法に依て漸々其の缺陷を補塡するとを得べし。即ち一方に於て、歲を追ふて、益々修史局圖書館及博物館の目錄を增加し、他の一方に於て、有力なる學會が卒先して或特種の題目に關したるあらゆる文書を研覈する爲めに、其專門家を甲の文書館より乙の文書館に馳せて該文書の目錄を調製すべし。例之ボランヂスト協會か使を八方に派して聖書に關する文書の總目錄を調製したるが如き、又維也納の帝國學士會院か前同樣の方法を以てパトリスチック文學に關する文書目錄を完成せしが如し。夫の獨逸に於ける Monumenta Germaniar historica (グルマニヤ史料)の協會は久しき間廣漠たる同種類の搜索蒐集を行ひつゝあり。而して Corpus Insoriptum Latinarum (拉典金石萃編)の全部が近頃完成せしは則ち前と同樣の手續に因り洽ねく全歐洲の博物館圖書館を渉獵せし結果に外ならざるなり。晩近各國政府は、人を八方に派し、自國の歷史

に關係ある文書を目錄に調製する方針を執れり、例之英吉利和蘭瑞西米國等の諸國は競ふて有給の吏員を歐洲各國の文書館に派遣し、各々自國に關係ある文書を目錄に調製せり。斯くの如き事業が如何程の速力を以て、如何なる完全の域に至るまで達するかを知らんと欲せば、先つ佛國に於ける公共圖書館の文書總目錄の發達歷史に徵して正に著るしく判然するを得ん。此絕好なる解題目錄は千八百八十五年に著手し、千八百九十七年を以て殆んと五十卷に達し、何れ近々の內には完成せらるべし。夫の Corpus Inscriptum Latinarum(拉典金石萃編)と雖も、僅々五十年の星霜を費さずして出來せり。故に資金の缺乏なき限りは、史料を完全に蒐集し、其目錄を秩序的に調製し、從て學問の上に偉大なる效驗を附與すると期して俟つべきなり。又世人一般の信する如く、圖書館吏の養成はさほどの困難なく、中には局外の有志者にして、斯道の爲め奮て目錄調製の任に膺るものも少しとせず。

凡そ學者及ひ史家は往々解題目錄のみにては供給せられざる知識を要するとあり。例へは云々の文書は世間の知る所ありや否や。其文書は既に論究傍批又は利用せられしや否やを知らんと欲するに當り、此知識は只以前の學者及史家の著書に參照して發見するとを得るなり。而して斯くの如き著書を知らんと欲せば、各々異れる方面より編纂せし既刊の書史索引に依らざるへからす。故にポイリスチックに必要缺くべからざる機關として、原文書の目錄と共に、書史索引を包含するの必要ありと謂ふべし。

凡そ前述の如く、學者の誤解及ひ時間の消費を防ぐ爲めに、況て此等の目錄を分類調製する學問あり。ベルンハイム氏は嘗て此點に付て論じ、余輩は少しく之を敷衍せしとありき。

三　前述の如く目錄の知識は極めて必要なると仝時に、文書の準備的搜索は極めて勞力多き事業なり。永く開拓せられざりし歷史の或部分も、今や文書の蒐集類別漸々緒に着きつゝある故に、机上の研究のみは今日十分に之を爲すとを得。凡そ學者に取り極めて必要なるは、其の研究題目の撰擇なり。苟くも之を爲すには、最深き熟慮を要し、假りにも一時偶然の思ひ附きに因り之を決定するの迂を學ぶ勿れ。抑々搜索機關の現狀にては、徒らに非常の財力勞力及時間を消費するに非ずんば、到底其研究の效果を完うする能はざるの題目あり。而かも斯くの如き

題目は必ずしも他に比して有益なりと定まらず。其後少しの日月を經過すれば、或は其の搜索機關發達し、容易に之を研究し、得るの機會來らん。夫れ故に史的研究題目の撰擇は文書目錄及書史目錄の存否如何に依て決し、十分熟考吟味を遂くると必要なり。苟くも準備的搜索の性質及範圍を確知せずして、漫然研究題目を撰擇するとは大に危險なり。幾多の星霜を費やし、勞して効なき搜索に着手するよりは、却て他の問題に就きて研究するの寧ろ必要且つ容易なる例多し。故に初歩の學生は研究題目の撰擇に就て、一應十分愼重なる審査を爲さゝる可からず。

第二章　補助學科

前章に於いて論ぜし搜索的準備が秩序正しく成功を告げ、與へられたる題目を維持するに足る文書の大部分が發見せられ利用せられたりと假定せよ。次に來る處の問題は此等の文書は既に從來精密に批判し盡されしものなるや。將た該文書は尙毫も開拓せられざる狀態に在るや孰れか必ず一ならざる可からず。此點は即ち史書の搜索の如何に因て初めて確定せらるゝものなり。第一の場合、即ち

該文書が十分精密なる批判の手續を經たる場合に於ては其批判の精確を證明する位地に立つと必要なり。第二の場合即ち文書が未だ開拓を享けざる場合には、學生身自から批判を爲さゝるべからず。以上の兩場合共に正確なる論理を引き出すべき習慣を助成する爲に最も欠くべからざるものは即ち補助的知識(Vorund Hülfskenntnisse)なり。何となれば若し批判の進行中、其論理にして當を得ざれば、其結論も從て正しきを得ざるべく、全く之を識らずして爲すも同じ結果を生ずるは必然なれはなり。加之學者及史家の職責は此點に付て總て他の職業と均しく、學問的總念の外裝なくしては、十分其職責を全ふする能はず。如何に自然の能力卓絶するも、如何に研究方法に熟達するも、此の缺陷を補塡する能はず。果して然らば學者及史家の學問的修養は何に存するか。換言すれは目錄學以外に所謂補助學科とは何ぞや。

佛國のドロイゼン氏は其著の Cours d'etudes historiques(史學研究法講義)に於て同樣の問題に就て論ぜり。彼以前マーブリー氏は其著 Traité de l'étude de l'histoire(史學研究論)に於て、歴史家に缺くべからざる準備的學科あるとを認めたり。併かし此の問

題に關して兩氏は今日の思想とは大に趣きを異にせる意見を有するを以て、參考の爲め彼我を比較研究せんとす。マーブリーは曰く先づ第一に萬有法公法道德學及政治學を學ぶべしと。又ドーノー氏の說く處に據れば、歷史家の修養を文學的、哲學的、及歷史的の三部門に區別したり。第一文學の研究に就て氏は委曲に之を論じて曰く、凡そ歷史家たる者は十分の注意を以て古今の大傑作を熟讀玩味せざるべからずと。いま氏の精神を窺ふに、此所謂傑作とは史詩の傑作を指すものにして、其理由とする處は、話術を創めしものは即ち詩人なり。故に其術に通曉せざるものは未た歷史を述ぶるの資格なしと云ふに在り。彼は又近世の小說を讀むべしと勸め、這般の小說は人物及事件の風彩躰度を寫實する術と、詳細の記事を巧に配分し、談緒を結び、或は之を中斷し、或は奮に恢復し、以て讀者の注意を惹き、其好奇心を刺激せしむる技術とを敎ゆべしと曰へり。なほ終りに臨み歷史的著書の模範となるべきものを紹介して曰はく希臘にてはヘロドタス、スーシジード、ゼノフオン、ポリビウス、及プルターク、拉典にては、セザール、サルスト、リビー及タシタス近世にてはマキアベリー、ギシヤルダン、マアンノース、ユーム、ロベルトソン、ギツボ

ン、カーライル、ド、レツツ、ベルトー、ボルティル、レイナル及ルリエール等の書籍を讀むべし。固より余は以上列記以外の書籍を汎て排擠せんとする意に非ずと雖も、能く此等の書を熟讀すれば、歷史に適當する文躰を自得するに十分欠くるとなし。云々と。次に哲學的修養に就ては、心學（イデオロジー）、道德、及政治學の大躰を會得することを望めり。曰はく此種類の知識を得る著作に關しダーゲツソー氏はアリストートル、シセロ、グロチユースを推薦せしも余輩は之に加ふるに最有名なる古今の道德家前世紀の中葉以來發行せられし經濟論、一般に政治學の論文及其詳細應用に關するマキアベリー、ボーダン、ロツケ、モンテスキユール、ルツソー、マーブリー又其門人註釋家の著はせし書籍を以てせんと欲すと。第三に歷史を編述する前に歷史を識るの必要あることは曰はずして明かなり。未來の史家は既に最良の歷史的著作を採り、文躰の雛形も之に倣ふことを得。此等の書籍を再び讀むは利益ありと雖も、殊に其包含する事實を理會し、常に其記憶中に存するほどに深き印象を其心に與へしむると極めて必要なり。尙以上の外に今日を距る八十年以前より一般史家に缺くべからざる積極的總念あり。同時に特別なる題目に就て明確なる知識を得る

爲めには尙此外に必要なる學科あり。ドーノー氏は曰く、史家は折々或精細微妙なる事件に會し、能く之を處理するには、極めて範圍廣く種々の方面に亘る知識を要す。外國語も必要なるとあり。時としては物理學又數學の概念も必要なるとあり。併かし要するに斯くの如き題目に關しては、總て文士に普及すべきものと認められたる普通敎育あれはそれにて十分なりと。

其の他ドーノーと全しく歷史家の準備的知識に就て述べし議論は滔々として皆陳腐に屬し、其極は皈する所あらゆる學問の修養を勸むるの結論を生せり。例へばフリーマンの說に從へは、凡そ歷史家たるものは總ての學問—哲學法律學財政學人種學地理學人類學自然科學—に通曉せざる可からざるが如し。氏は公言して曰く、凡そ史家は時に臨んでは如何なる問題と雖も之を論究すべきものにして、知識の分科に洽く通達すればするほど、其事業に就て能く準備したるものと謂つべしと。洵に然り、併かし人性の知識の分科は汎て平等に必要なりと云ふに非らず。或知識の如きは之を史學研究に應用すると極めて稀なり。又フリーマンは滔々たる史家一も化學者なきことを冷笑すと雖も、化學より一層史學研究に必要缺くべからざる學科他にあることを考へざるべからず。例之地質學及之に關係する學科の如きは史學の研究に極めて直接の關係を有し、且つ十分の研究を要すべきものなり。私見に依れは、歷史編纂法の補助學科如何に對しては單に常識を打算せる注意を加へて滿足せんとす。而して其常識の修養は從來久しく忘れられし史學研究法に存することを斷言して憚らざるなり。

加之余輩の所謂歷史家はドーノー及其學派の所謂文學的史家勸善懲惡的史家若しくは筆耕的史家の亞流を指すものにあらず。實際に歷史の科學的研究を行はんが爲めに、文書を使用して研鑽論究する學者及歷史家を謂ふなり。於是學問的修養の方法に關して斬新なる方針を採らざるを得ず。

今吾人の前に文書ありと假定せよ。若し吾人か之れを讀む能はざるものなる時は何の用をなすか。フランソア、シアンポリオンの時代に至るまで埃及の文書は比喩の外全く死文なりき。古代アッシリアの歷史を研究するには、キュネイフォルム文字の譯讀を知ると必要なり。同理により古代及中世史に就て其材料より一の創作を爲さんと欲する者は碑銘及古文書寫本の譯讀を知らざるべからず。於

是希臘及拉典の碑銘學及中世の古文學が歴史殊に古代及中世史の補助學科として、研究する必要ある理由を知らむ。中世の拉典古文學か中世研究家に取て必要缺くべからざる學科なるとは、恰もヒエログリッフ語の古文字が埃及學者に於ける關係の如し。然るに埃及古文字を知らずして埃及學を研究するもの全くなしと雖も之れに反して、中世時代の地方文書を適當に譯解し得る能力なくして、中世史を研究するもの少なからず。蓋し中世の文書は幾分か近世の文書に類似したる處あるを以て、機轉と經驗とにより其大躰の意義を了解するに難からずと自信するに在るも、斯くの如き迷想は頗る危險なり。正則に古文學の薫陶を享けざる學者が自個の推斷により昔時の文書を誤譯したるが爲め、其批判及解釋の全躰を全く價値なきものと爲せし例頻々として枚擧に遑あらず。

一の文書が正に直譯せられ得たりと想像せよ。次に其の意味を了解するに非ずんば何ぞ之を公衆に發表するとを得んや。エトラスカン人種の碑銘及カンブリアの古語は讀まれたれとも、其意味を何人も了解する能はず。要するに此儘にては史學上何の必要なきなり。新進の學生は古代史を以て單に希臘語拉典語を外面上彩色したるのみと攻擊し、嘗て中世の佛語及拉典語を研究せざりしものは拉典の古文學及近世の佛語を了解するが故に推して之を知り得べしと想ひ、原文の解釋を試むるものありと雖も、古語文典言語學及文章の奥妙なる意義を知らざるが故に全く虚構不正確なる解釋を爲し、史的誤謬に陷るもの頗る多し。故に其參考文書に使用せる言語か近世語に非ず、又容易に了解する能はざるものなれは史的搜索を爲すに前ち、能く其言語學の蘊奥を極むるとを急務とすべし。

文書の意義か全く了解せられたりとせよ。若し既に其眞僞の判然せるものにあらざる時は、先づ其眞正を證明せずして之を採用するは正當なる處置にあらず。

凡そ文書の眞僞を窮め、其根源を確むるには、須らく理性の力と知識との二者を要件とす。換言すれは前に蒐集せし正確なる材料より眞僞未だ確定せざるものを探究し、而して後之が識別を爲さざる可らず。蓋し昔時に於ける虚實相混合する特許狀免許狀協商等の文書より其眞相を發揮するは最も熟練なる論理家と雖も不可能の事にして、斯くの如き古文書公文書公書輸判決文特許狀等殊に古文書の譯讀及其眞僞日附署名等に關係する學問を總稱して古文書學と稱す。故に余輩

は史的研究の補助學科として碑銘學(エピグラフィー)、(金石學)古文學(パレオグラフィー)、及言語學(フィロロジイ)の外に此の古文書學を擧げざるべからず。尤も碑銘學、古文學、言語學、古文書學(サフラジスチック)、紀年學(クロノロジー)、及印章學(コンフラジスチック)のみが只史的研究を補助する學問なりと曰ふにあらず。其他、文學史も必要なり。考古學(アーキオロジー)及其分科なる貨錢學(ニュミスマティック)、紋章學(ヘラルドリー)も必要なるべし。

余輩はこれより補助學科(Sciences auxiliaires)或はSciences ancillaires又はSciences satellitesと稱せらるゝ者の性質如何を論ぜんと欲す。(一)補助學科は皆科學なりとは限らず。例之古文書學及文學史は唯批判に依て得られたる事實を系統的に蒐集したるものにして、從來手を觸れざりし文章に對する批判的方法の適用を便利ならしむるに過ぎず。故に科學とは稱する能はず。之に反して言語學は獨立しかる科學にして、夫れ自身の法則を有す。(二)吾人は補助智識の分科中其局に當る著者が當然會得せざるを得ざる學科と、或特殊の事件に限て初めて臨時に之を取調ぶるの必要を見る學科とを區別せざるべからず。例へは中世史研究家は中世の文書を讀みて能く其意を了解するとを必要とすれども、さりとて文學史及古文書學に關する特殊事實の一團を其記憶中に入るゝ必要なし。(三)一般に、詳言すれは、學徒の研究題目如何に拘はらず總て概括的に、史學研究上の補助學科なきとを注意せざるべからず。凡そ補助的智識なるものは其研究題目の性質如何に因て定まるものなり。又希臘語の智識は均しく佛國の中世史を論ずるに當ては毫も其用を爲さなり。例之古文學の智識は佛國革命史研究の目的に向ては全く不必要ず。要之歴史上の創作を出さんと欲するものの準備的行動は(ドーノーの所謂普通教育即ち一般的修養に加ふるに)、文書の發見會得及批判の援助となり得べき智識に皈着す。斯くの如き智識の本質は學者の撰擇する歴史上の研究題目如何に因て種々に變化するものなり。蓋し中世若しくは近世の歴史を考究せんとするものは、其學問的修養に比較的短日月を費やし、且つ容易なれども古代及中世史の研究は永き星霜と非常なる勞力とを加へざるべからず。

以上述ぶるが如く史家の學問的修養に關する改良即ち文學及哲學上の傑作の研究に添ゆるに、眞に史學上の研究を幇助する積極的智識を以てせしとは極めて晩近の事に屬す。佛國の史學々生は現世紀の大半を通して全くドーノー氏の模範に甘んじ、文學的修養の外何ものをも享けざりき。殆んど總て彼等は此準備に滿

足し、これ以外に一歩も向けざりき。故に史學家の大多數は滔々として只科學的研究の能力なき一個の文人に異らず。今を距る五十年以前より l'École des chartes（文書派）は漸々勃興し、他の佛國及外國の高等教育機關に普及して非常なる勢力を得、世に史學上の新智識を流布せし學者は概ね此間に養成せられたるものなり。今日中世史の研究家が最も完全なる方法を以て其學問的修養を全ふするの機會を得しは、全く l'École des chartes が三學年の間ローマンス語學（拉典語と野蠻人の語と混合せしもの）、古文學、考古學、修史學（ヒストリオグラフィー）及中世法律の講義を續けつゝあるに是れ因るものなり。然とも補助學科は今や多少何處の學校にも教授せられ之を講座中に入れし大學も多く、又過去廿五年以來學生の碑銘學古文學古文書學等の參考書も非常に增加したり。蓋し廿五年以前は學校に於ける講義筆記の缺乏を補ふに足るべき參考書類なかりしと雖も、其後大學教授の講義錄出でゝ教授の實際講義せし筆記の缺を補ひぬ。要するに學生が大學等に於て正則的練習の利益を得しや否やは暫らく別問題として、兎に角從來の學生は史學研究の門に入る前に必ず知らざるべからざるものを忘れたる誹りは免るべからず。今日に於ては諸科學の講義錄の出版日を追うて多々益々熾なるを以て、十分以上の缺陷を補ふに足るものあらむ。

偖爰に準備的智識に通ずる未來の歷史家あり。假りに彼は文書の文章言語に就て不完全なる智識を有する爲め及舊著及外的批判に因りて得たる結果を知らざりし爲に生したる無數の錯誤を免れたりと想像するも、彼は尙ほ非難するに忍びざる他人の所有に歸せる Cognitio Cognitii et cognoscendi（學者獨得の智識（現在自得せし知識にして他に與し能はざる者）又學びて得せし）なる者に遭遇すべし。又余輩惟へらく補助學科の正則的研究を終了し、深く書史古文學言語學等の著書を閲覽し、而かも再三實驗して自得せし智識ありと雖も、未だ以て彼に誤解の恐れなしと保證すると能はず。(一)永年間或種類又は或時代の文書を研究せしものは這般の文書に就て他に傳ふる能はざる一種奥妙の智識を有し、此專門的博識は牢乎として其人の專有に帰し、何ものと雖も之を動かす能はず。是れ斯道專門家が經營慘憺たる苦心の結果なり。故に新進史家は該專門家が研究の結果たる著作を一覽して十分會得するも、其專門的知識まで享有する能はず。(二)專門家自身が時々誤謬を爲すとあり。古文學者は往

を古文書を誤譯し、言語學者は其意義の推定を誤り、學者は時として既刊の文書を未刊の文書として發表し、又之を知るの義務ある文書を忘却したる例少なからず。然りと雖も以上の困難は毫も我輩の設題を動かすものにあらず。前にも述べし如く絶對的に補助的知識の研究を完結する迄は暫らく文書の研究を中止すべしと云ふ論の實際上無用なるとは言はずして明かなり。

以上を以て史學研究法の第一篇準備的研究法を終はれり。これより文書使用の方法として第二篇解析的作業に移らんとす。

第二篇　解析的作業(Opération Analgtiques)

第一章　史的知識の一般條件

我輩は前篇に於て、既に歷史は文書より研窮を始め、其文書は過去事件の遺蹟なることを既明せり。本篇は此説明及定義の結果を論ぜんと欲す。

凡そ事件は實驗上二個の方法即ち(一)該事件の進行中直接の觀察により(二)該事件の後世に殘したる遺跡の研究即ち間接の觀察により、之を知ることを得。例へば地震の例を採り之を區別せんに實際其現象の起りし時史家が現存せしならばそれに付き直接に觀察するを得れども、若し然らずして、或は其物理的結果(裂口、破壞)を觀察し、或は該事件の過ぎ去りし後何十百千年を經て當時身自から其現象又は結果を實見せし人の書きたる記錄を讀むは、これ即ち間接の智識を得しなり。抑々所謂歷史事實なるものゝ特質は只間接に其遺蹟の助けをかりて知り得る點に在り。換言すれは歷史的知識は實質上間接なる知識なるが故に、從て史學研究法は夫の直接の觀察を基礎とする科學(地質學は除く)の研究法とは全く其の趣を異に

するの必要あるを悟らん。要するに史學は觀察の學問にあらず。

蓋し過去の事實は唯今日まで保存せられ來りたる遺蹟に據り初めて知るを得るのみ。此等の遺蹟は往々直接に歴史家の觀察を受くるとありと雖も、これ以上に觀察を及ぼすと能はず。故に後に殘るは唯理性の働きにして、これによりて、できるだけ正確に其遺蹟より事實を推斷するとを努む。即ち文書は史家の出發點にして、事實は彼の目標點なり。此出發點と目標點との間には、推論の順序相錯綜し、相複雜し、從て誤謬を惹起し得べき無數の機會其の裏に伏在し、而かも極細の誤謬は何れも延ひて悉く其結論を崩壞するに足るものなり。此點に付て史學研究法即ち間接の研究法は明かに直接觀察の研究法に劣ると雖も、されば、とて史家は其研究法即ち過去の事實に到達するの方法を他に採擇する能はず。

夫れ文書の批判より事實の知識に導く處の細微なる理性的解析は史學研究法の主として論ずる所なり。其部分は即ち批判の範圍に屬し、本篇に於ける次の七章に於て十分論述せらるべし。余輩は本章に於て特に此問題の大要及分類を略言せんと欲す。

一、凡そ文書には二種の分類あり。即ち(一)過去の事件か殘せし具體的遺蹟(碑銘建築物の如き)(二)心理的符號の遺蹟(記錄の如き)是れなり。抑々或物理的現象と之を生せし原因との間には常に一定の關係ありて、物理的原則に照らして吾人は此の關係を能く知り得るを以て、第一種は第二種に比すれば比較的簡單なり。之に反して心理的遺蹟は純粹に符號的なり。事實そのものにあらず。將た其の事實の爲め實際見聞者の心上に働きたる印象其のものにもあらず。單に其印象の便宜的符號に過ぎず。例へば記錄は具體的文書として價値あるにあらず。心理的作用の符號として其の價値を生ずるなり。而して史家にとりて論理の出發點となるべき文書は殆んど心理作用の遺蹟以外に求むべからず。

夫れ然り。一の記錄より其遠因なる事實の結論に到達せんと欲せば、即ち換言せは文書と事實とを結合する關係を確かめんと欲せば、其の文書を生ずるに至りし直接の原因を探究するとを要す。是れ批判的解析の目的及ひ手續なり。

劈頭第一文書を觀察するに當り、其の文書は現在今其の作られし時と全く狀態に在りや。其の文書は從來缺陷變更せられし點ありとせば、如何にして其原作に依

復し、其の原物を識むるを得るかを知らんと欲すべし。抑々文書の文章、言語、形式、語源に關する準備的研究は外的批判の範圍に屬し、之れに對して殆んど一般心理學より藉り來れる比論（シミラリティード）の助けをかりて文書記者の心狀を探究する方法は正に內的批判の論究する範圍なり。先づ文書記者の意を了し(一)彼はこれに如何なる意味を含ませしや。(二)彼は自身の日ひしとを信じ居るや(三)斯く彼の信用するは正當なる判斷に基くやの問を發すべし。此最後の質問に就ては只客觀的科學の研究法を以て探究するの手段あるのみ。

二、前述の說明より二個の結論を生ず。即ち(一)史的批判の頗る複雜なる事、(二)史的批判の絕對的必要なると是れなり。

歷史家は他の學者に比すれは甚だ不愉快なる地位に在り。其の所以は單に化學者の如く直接に其の事實を觀察するを得ざると云ふに止まらず。凡そ彼の使用書文きすべか十分正確なる觀察を直寫しあるは極めて稀有の事にして、寧ろ彼は恰も試驗室の召使の報告を聞きて單に其實驗の順序を知るべき化學者の地位に在り。歷史家は他の科學者か到底滿足するを得ざる極めて散慢疎雜なる材料を、

採り、其の不用なる部分は之れを捨て、更に其の殘存せる正當の觀察を探究するを以て最も重要なる職務とす。

蓋し人心の自然的弱點として、萬事注意を缺き、最も愼重なる熟考を要する場合に於ても輕々に之を看過するの弊あり。道理上批判の必要を爭はざる人と雖も實際上此の原則を厲行するもの極めて尠きは何ぞや。抑々歐洲の文明諸國に於て史學上批判の必要を認めしは極めて晩近の事に屬し、現今の東洋人又は中世の學者は此の批判に就て一定の概念を有せず。假令今日にても堂々たる史學の大家か修史上の文書使用に關して最も普通なる注意を忘れ、不知不識虛構の結論に陷るとあり。況んや年少初學の史家に於てをや。蓋し批判は自然の心的傾向に反抗するものにして人間の自然的傾向は既に肯定せられたる事實又は議論（其の眞僞を精密に吟味せざる）に不知不識に盲從し、明かに自個の觀察の結果を之れと區別せざるを例とす。例へは今日の新聞か昨日の歷史を揭載するに際し其の記事に架空なる事實、非常の矛盾なき以上は、讀者は必ずや其の全躰を呑み込み、之を信用し、之を公言し、甚たしきは之を根本として研究するに至らん。要するに公平冷

靜なる人は夙に人間の弱點を洞察し Ignavia critica (批判忘却)を排擯するには非常なる奮發を要すること此の奮發は必ず屢々反復するの必要あると、又往々之が爲めに眞の苦痛を感ずるとあるを許さん。

凡そ人間は其の天性、水中に於て靜止せは其の體必ず溺るべしと雖も、游泳術の習得は自然的運動を抑制し、己れの身躰を水上に浮ばしむるの習慣を養成す。之れと仝理に因り批判は自然的習慣に非ず。自然の狀態に人工的研鑽を加へ、屢々之を實行し初めて固定せしものなり。果して然らば史的事業は極めて批判的にして其の天性の弱點に對する防護なくして慢然其の門に入れは確かに溺死の厄を免れざるべし。故に此の危險を避けんと欲せは、須らく己の意識を審査し Ignavia (不注意)の原因を解析すると仝時に、史學研究法の原則を知り、其の理論を解析せざるべからず。蓋し史學は他の科學の如く重もに不注意より生ずる事實の誤解を招き其の結果は反て、他の科學に比して不完全なる解析及ひ虛僞の論理を生ずること多し。凡そ史家たるものは確據なき肯定を前提とすることを慎めば慎むほど、虛僞の原則を惹き出すと尠く、從て誤れる結論に達するの弊を省くものなり。

第一部　外的批判

第二章　本文批判

現今の著述家、一書を著はし、其の原稿を印刷者に送り、自ら手を下して校正を爲し、校了の字を附して、之を印刷者に返付すとせよ。此の如くにして成りたる書を史家が史料として用ふるとせば、是れ甚だ結構なる事情なるも、猶ほ此の書は著者の書きたる本文の可なり精密に再現せられたるものに過ぎず。何となれば著者の校正粗漏なりしか、又は印刷者が著者の校正に十分注意せざりしとせば右の場合に於ても、著者の原稿と頗る相違せるものの生ずべし。

時としては、故人の遺著を出版せんとして、其の自筆本を印刷者に渡し難きことあり。此の場合に於ては、先づ本文を謄寫し、次に之を整理者に付して組み立てしむ。是れ再び轉寫すると仝じ。次に之に由りて植字し、第一の寫しによりて(更に此より善きは、原本によりて)校正すべし。此の場合に於ては、先きの著者自ら校正する

場合よりも、精密を期し難し。即ち原本と刊行本との間には、一個の中間物あり。又原本の文字中、著者に非れば讀み難きもあるべし。

今轉じて古代の史書が、如何にして傳はりしやを見るに概して、原本は既に佚び、唯た寫本のみ傳はれり。此等の寫本は、直接に原本より寫しゝものなるかといふに、多くは然らずして、寫本の寫本に過ぎず。而して其の謄寫を爲したる者は決して悉く、堪能にして、用意周到なる者にあらず。中には、己の寫す原本を一向に了解せざるものもあるべく、又之を誤解せるものもあるべし。而して謄寫の後には之を原本に對照校正せるものは尠し。

現今の著書の、著者と、印刷者と、交々校正をなせるものすら、猶ほ不完全を免れずとせば、古代の史料の轉寫又轉寫せられたるものが、如何に不精密なるべきかは、言を俟たざるべし。故に史籍を用ふるに方りては、其の本文は果して正確なるか。即ち著者の原稿と可及的合致したるものなるかを觀、而して若し其の轉化せるものなるを見は、之を改めざるべからず。轉寫の誤謬ある本文を用ふるときは、寫字者の誤謬を以て、著者に歸するの恐あり。故に史家は須く正確なる校本を用ひざるべからずと雖も、從來有名の史家も之に注意せず。本の善惡を問はず、得るに隨うて之を用ひたり。古本の出版を以て專門の業とせる學者すら、其の本文を校正することを怠り、得るに隨ひ、濫りに之を蒐集出版せり。批判的出版の始まりしは、凡そ三十年のことゝす。故に史料にして、未だ史家の信頼すべき形に於て出版せられざるもの猶ほ多し。然れども歴史研究の方法中、本文批判は、最も善く發達せるものにして、既に確固たる基礎を有せり。茲に其の原則及ひ其の結果の一斑を述ぶべし

一、史料が未だ批判の規則に從つて出版せられずとすれば、之を可及的善良なる本文に改正するの方法如何。是に三個の場合あり。

(イ) 最も簡單なるは、著者の自筆本の存在せる場合にして、此の場合には、其の原本に飽くまで信頼し、之によりて謄寫すれば可なり。理論上はかくの如く極めて容易なれども、適當なる謄寫人の得難きは實際上の困難なり。

(ロ) 第二の場合は、原本は既に佚びて傳はらず。唯だ寫本一部を存する場合なり。固より此の寫本には誤謬あるの恐あるを以て、注意を要す。元來本文の轉化する

には、一定の規則あるを以て、原本と寫本との差異を來す原因、及ひ其の普通の形を發見し、之を類別するは、從來學者の頗る苦心せる所にして、其の結果原本佚ひて、唯た寫本一部を存する場合に於て、其の本文中誤謬たること明なる部分を、推定復舊するに用ふべき規則を定め得たり。

寫本の原本と變化を來すは、畢竟故意と過失との二者孰れかに歸す。或る一知半解の寫字生は、自己の了解せざる部分は、之を削除し、又は之を變更するを以て、己れの義務と思ひたるものあり。或は謄寫の際、誤讀をなし、又は口授の際誤聞をなし、斯くして遂に誤寫をなすことあり。

故意より起る變更と、判斷の誤謬より起る誤寫とは、之を改正すること難し。又之を發見することすら難きことあり。又偶然の誤寫も、數行脱落せるときの如きは、一部の寫本に於ては、之を復舊することと難し。然れども誤謬の普通の形を見慣れたる者には、偶然の誤謬は概ね發見せらるゝものなり。誤謬の普通の形とは、即ち意味、文字、若くは詞の混亂、或は文字の重複、脱落等の類をいふ。此等種々の誤謬は國の東西と、時の古今を問はず、又其の原本の筆跡又は其の用語の如何に拘はらず、到る處に見るなり。然れども原本の用字の種類に從ひ、一種類の原本には、或る種類の混亂多く、他の種類の原本には、亦他の種類の混亂多きを見る。意味及ひ詞の混亂に至りては、單語及ひ發音の類似より起るもの多く、國語の種類に從ひ又時代に從ひ、變化一ならず。推定によりて改訂する一般の理論は、畢竟かくの如きに過ぎず。故に如何なる種類の本文にても改訂復舊するに適すべき法則とてはあらず。本文を推定改訂せんには、通常本文が變化を來す道行きに就いての概念を有する外、先づ(一)特種の言語、(二)特種の筆蹟及ひ(三)其の種類の筆蹟にて書きたる其の種類の國語の本文を寫しゝ人が、通常誤り勝なりし意味、文字及ひ詞の混亂を熟知せんことを要す。

本文改訂の巧妙に成就したる例は尠からず。其の最も滿足なるは、改訂の正當なることが書學上より證明せらるゝ場合とす。例へばマドヴィグ(Madvig)がセネカ(Seneca)の書翰を改訂したる場合の如き是なり。(著者は是よりセネカの書翰の一節を抄して、之を說明し、次にマドヴィグが近代に於ける改訂家の巨擘なることを述べ、改訂に於ては、近代の學者は、到底十六世紀及ひ十七世紀の人道派(ニヒスト)學者に及ばざ

ることを既けり。

文字錯亂せる古書の寫本唯た一部ある場合に於ては、批判家も其の改訂に苦み、本文の原形を失せるを確言し、意味上當に此の如くならざるべからずとは言ふも、其れ以上の說を立つること能はざること屢々之あり。推定批判を專門とせる學者は、熱心の餘、往々危險なる假說を出すものなきにあらずと雖も、其の本文を刊行するに方りては、原文と、自己の讀み直しとは、全然區別して、混同せざらしむるを常とす。

(ハ) 第三の場合は、一の史料ありて、原本は既に佚び、唯た其の寫本のみ存し、而して其の寫本に種々の異本ある場合なり。此の場合に於ては、昔日の學者は、或は其の寫本の性質如何を論ぜず。先づ己の手に得たるものを用ひ、或は種々の年代の寫本ある場合には其の中の最も古きものに從ひ、或は種々の異本を對照して、其の多數なるものを取れり。年代の古きもの必ずしも、正確に非るは理論上明にして實際上にも、其の正確ならざる場合頗る多し。又多數に從つて決するが如きは、凡ての異本は盡く同等の價値を有すると見做すに等しく、其の不合理なるや明なり。

此の場合に於ける正當の方法は唯た別本相互の關係如何を決定するに在り。之が爲には先づ次の爭ふべからざる公理を發足點とすべし。即ち二部の別本ありて、同一の場處に同一の誤謬あらば、其の一は他を寫したるものなるか、然らざれば二書共に第三の書を寫したるものにして、其の第三の書に右の誤謬ありしものなることを推すべきこと是なり。若し茲に誤謬なき種本ありて、數人の寫字者が別々に之を寫したりとすれば、精密に同一の誤謬に陷るべき理あらざるなり。即ち誤謬の符合は其の種本の同一なることを示すものなり。故に別本を對照して、其の中の數者が共に、或る同一の種本によりたるものなるを發見し、而して其の種本が現存せる場合に於ては、其等の別本は盡く之を棄却して可なり。蓋し其の別本が、種本よりも價値を有すべき理なければなり。若し種本と異る點あらば、是れ新に誤謬をなしたるものなるべし。故に此等の寫本を對照して其の差異を求むるが如きは、是れ無益に時を費す所以なり。此の方法によりて、盡く末本を刪除せば殘る所は、別々に、直接に原本を寫したる寫本か、又は直接に原本より寫しゝ寫本の寫本のみとなるべし。此の第二流の寫本を更に類別するには、再び誤謬比較の方

法に由るべし。此の如くするときは、甚しく力を勞することなくして、現存せる別本の系圖を完全に作るを得べく、之に由て、各本の比較的價値を定むるを得べし。別本の系圖既に成らば、次には種々の別本を對照して、其の原本の本文に復舊することを勉むべし。若し別本の本文か符合するときは、何等の困難もなしと雖も若し符合せざるときは、其の何れかに決定せざるべからず。若し偶然に別本が共に同一の誤謬をなせるときは、推定改訂の法によるの外なし。此の場合は唯た一部の寫本のみ傳はれる場合と同じきなり。

理論上より見れば、原本既びたるとき、種々の別本の存せるは、復舊の爲に便なるに似たりと雖も、實際は別本の類別不完全なるときは、其の多くの別本は、補助を與へずして、却て混雜を來すものなり。諸別本の原本に對する關係を考定せずして、澄りに本文の改訂を爲したるものほど不滿足なるものはなし。さればとて本式の方法を應用するときは、往々非常の時間と勞力とを要することあり。時としては、數年間潛心刻苦して、改訂せるものにも、左程の効果を見ざることあり。校訂本には、校訂者が用ひたる別本の系統を附し、其の脚註には、各異本の差異を掲ぐへきなり。此の如くするときは、假令其の校訂本の校訂の最も巧ならざる所あるも、學力ある讀者は其の差異を見て、自ら復舊を試むべきなり。

二　本文批判は刪除改正の一種にして、其の結果は眞に消極的のものなり。推定法を用ひ、又は推定法と比較法とを併せ用ひて、滅びたる原本の形に可及的復舊するを得べしと雖も、此の如くにして生ずる結果は、唯た誤謬を來すの恐ある轉說若くは附加物を刪除し、疑はしき部分は、疑はしとして之を闕るに止れり。非常なる勞力を用ひて復舊せる本文も、其の價値到底原本に及ばざるなり。

三　然れども史家が、各種史料の精確なる本文を有せざる限りは、本文批判の必要甚だ多し。史學現今の狀態に於ては、新本文を發表し、若くは既に知られたる本文を改善するは、最も有益の事業なり。各國に於て幾多の學會は之れか爲に、其の資力及ひ勞力の大部分を費せり。然れども批判を要する本文の夥多なると、綿密なる注意の批判に必要なるが爲に、新史料の出版及ひ本文の批判は、其の進行頗る遲々たるを免れず。中世史及ひ近世史に有益なる凡ての史料が刊行せらるゝまでには、近來の進行が一層急速を加へたりと假定するも、實に長歲月を要すること

ならん。

第三章　著者に就ての批判的研究

或る事實に關して、何事をも知らず、又知るを得ざる人よりして、其の事實に關する智識を得んことは到底能はざるべし。故に一の史籍を得たらば、史家は先づ其の出處の如何、其の記者の如何、其の時代の如何を問はざるべからず。出處、記者、及ひ年代の全く不明なる史籍は、畢竟何の用をも爲さゝるなり。此の事たる自明に似たりと雖も、其の十分に認められたるは蓋し近代の事とす。

近來の書籍は、多くは記者を明記す。書籍のみならず、新聞の論說も、官の公文も、私の書籍も、多くは月日と姓名とを附記すと雖も、古昔の書類の多くは、姓名なく、日附なく、又其の出處をも記せず、甚だ曖昧なるものなり。

是より著者は、人心の自然の傾向たる、記者の名の表はされたる場合には、輕々しく之を信ずるものなるを說き、例を歐洲の名著又は名畫に取りて之を證し、さて曰く畢竟するに、唯た著者の名の明記せられたるのみを以て、十分なりとなすべからず。此の如きは、唯た多少推定に資するのみ。近世の著書に於ては、其の著者の名は頗る信賴の價多きも、古代の書に於ては、其の効力甚だ薄弱なること屢々なり。時としては、價値なき製作物に附するに名家の名を以てして、之を貴からしめんとし、時としては、或る特別の人の名を高うせんが爲に、若くは後世を欺かんが爲に、或る名作を藉りて、之に其の名を加ふるあり。其の動機に至りては固より千差萬別なるべし。又文書に在りては、徹頭徹尾僞作のものあり。而して之を僞作するものは、明に之に姓名を附するを以て、眞僞の鑑査必要なりとす。記者の姓名の疑はしきとき史家の用ふる鑑査の法は、其の姓名の全く缺けたるとき、可及的之を確定するに用ふる方法と同一なり。其の順序は双方共に同一なるを以て、之を區別するの要なし。

一　著者に就ての研究に用ふる主要なる方法は、研究すべき史籍の內的分析なり。其の目的は記者及ひ彼の生活せし時代及ひ場處を明にするに足るべき性質を、其の文書中より發見するに在り。

之が爲に先づ其の文書の筆跡を檢すべし。例へば、サン、ボナヴェンチュラ Saint Bonave

Ptuzaは千二百二十一年に生れたり。若し彼の詩と稱せらるゝものが、第十一世紀に作りし寫本中に存せば稱して彼の作と云ふの誤れることを知るべし。蓋し第十二世紀中に作りし寫本ある文書の原本が、第十二世紀以後の作たるべき理はわらざるなり。次に其の用語を檢すべし。時と處とに從ひ、各々一定の形式の語の用ゐられたるは、史家の知る所なり。而して僞作者は概ね此等の事實を知らざるを以て、其の僞文書中に、後世の語を挿入し、之に由て、其の僞作たることを發見せらるべし。嘗て南亞米利加に於て、發見せられたるフィニシア語の碑銘が、其のフィニシア語の成句法によりて、或る獨逸學者の之に關して說く所よりも古きものなることを明白になりしことあり。官府の文書に在りては其の書式を檢すべし例へばメロヴィンク朝の文書と稱するものが、他の眞のメロヴィンク朝の文書の書式と違へるものならば、是れ其の僞作たるを知るべし。最後に其の文書中に記し、又は間接に記し、及ぼせる事項を檢すべし。其の記する所の事項にして、若し其の文書が僞作者の手に成れりとせば、彼が用ふるを得べからざりし他の材料よりして、其の眞實なるを知り得べき事項ならば、其の文書の眞物なること確定す。而して、其の文書製作の時日に至りては、記者が記する所の最後の事件と、其の後の事件にして、記者之を記せず、若し之を知りたらんには當然記入すべき事件との間に定むるを得べし。又或る事實を記するに賛讃の意を以てし、或は之に就て或る特別の意見を吐くときは、史家は之に基きて、記者の身分、境遇及ひ其の性格を論ずるに便なることもあるべし。

文書に就て注意して內的分析を爲すときは、其の著者の如何に就ては、略、精確なる考案を得るものなり。從來記者の分明せる文書にして、之を種々の原素に分析し、比較研究を爲したる結果、其の僞作たることを發見せし例尠しとせず。而して如何なる事情に於て正確なる史籍の製作せるゝやも、之と共に大に明瞭となれり。內的分析の結果を補ひ、且つ之を正確にするものは、今研究せんとする文書と同時代、又は此より後の書類中に散見する事項にして、右の文書と關係ある外部の證據材料是なり。即ち研究せんとする文書より引用せる文句の如き、又は其の文書の記者の傳記の如き是なり。時としては此等の證據材料の著しく闕如せることあり。例へばメロヴィンク朝の文書と稱するものが、第十七世紀に至るまで、一回も引

用せられたることなく、第十七世紀に至りて、始めて之を引用せる者あるも、其の者にして偽作を以て知られたるものならんには、其の文書は後世の偽作たる疑なき能はざるなり。

二　以上論ずる所は、研究せんとする史籍が、唯た一人の手に成りたる、最も簡單なる場合なり時としては史籍が時代を經るに從ひ、漸次後人の爲に附加せらるゝことあり。此の附加の部分と原本の本文とを區別することと必要なり。即ち原本の記者甲に師するに、後の乙丙の作を以てせざる樣注意せざるべからず。附加の種類二あり。攙入及ひ書き續ぎ是なり。攙入は原本の間に書き加へたるものにして、通常偶然に起るものとす。即ち寫字者の不注意より、行間の注解又は欄外の見出し等を本文に混入するより起るものなり。然れども時としては、原本を完全にし、又は之を修飾し、又は其の語氣を强うせんが爲に、故意に本文を增補し、又は之を改刪する場合少からず、若し始めに故意に添削したる寫本が現存せるときは、史家は之に由て、直に原文に復するを得べしと雖も、通常原初の添削本は佚滅して傳はらず、唯た之より轉寫せし寫本のみ存して、其の添削の痕跡復た見るべからず。

書き續ぎに至りては、復た細說を要せず。中世の諸年代記が、數多の人々に渡りて、代々書き續がれたるは、何人も知る所にして、其の人々は已の何處より書き始めて何處まで書きたるやを記せざるなり。

若し同一書の寫本數部ありて、其の中の數部が攙入及ひ書き續き以前の書本なるときは、其の攙入及ひ書き續ぎの部は之を見出すこと容易なれとも、此等の寫本が、凡て攙入及ひ書き續きを經たる後の寫本に基きて寫しゝものなるときは、再び內的分析を爲さゝるべからず。即ち文體は徹頭徹尾一體なるか。又同一の精神が首尾一貫せるか。又書中思想の矛盾はなきか、其の連續に於て、缺陷はなきか如何等を檢すべし。若し攙入者又は書き續き者にして、其の性格判明にして、其の意見截然たるときは原文と附加の部分とを區別すること容易なりと雖も、若し全然平凡にして、淡泊なる文體なるときは、之を分つこと頗る難し。斯る場合には、澄に假說を立てんより寧ろ其の區別し難きを自白するに如かず。

三　著者に就ての批判的研究は、著者と其の場處及ひ時代とに就て、得らるゝ丈の智識を集むるを以て終るものに非ず。次には著者の智識の出處を知らんこと

を要す。是れ即ち其の書の價値を定むる所以なり。何年何月何人が何地にて記したりとのみにては、其の人は他人の書を全く剽窃して、知らざる爲をなしゝやも知れず。剽窃は今日は既に稀にして、法律之を禁し、人之を賤むと雖も、往昔に在りては普通の事にして、人之を咎めず、法律之を罰せざりしなり。第九世紀の年代記者エギンハルド(Eginhard)の年代記中にはスエトニウス(Suetonius)の文を剽窃せる箇所尠しとせず。故に一事件に就て、假令三個の史籍の記する所符合するも、此の三者が共に同一の材料より剽窃せるものならんには、其の事たる、粋かに信ずべからず。故に著者が用ひたる根本材料を可及的發見する、是れ亦著者に關する研究の一部なり。

此の研究は彼の本文批判と頗る相類するものあり。彼に在りては、同一の場處に同一の誤謬あれば、二書共に同一の種本に據りたることを推定するが如く、此に在りては同一事件に關する數人の記述が、全然符合することなかるべきを思はしむ。歴史事實の複雜なる、觀察の方法、記述の躰裁十人十種なるべき筈なり。二人の關係なき觀察者が、同樣に之を觀而して又同樣に之を記することあるべけんや。先に本文批判に於て、別本を類別したる如く、著者の研究に在りては、同一事件に關する史籍を類別して、其の系譜を作るべし。此の如くするときは他書を剽窃して作りかゝる書は、之を發見すること難からず。此の如きは、往々試驗委員が狡猾なる受驗生に於て實驗する所と同一なり。

一種類に屬する三個の史籍あるに方りては、其の相互の關係を確定すること稍々難きことあり。例へは甲乙丙の三者ありて、乙丙は甲に據りて作れりとすれば、乙と丙とは各別々に甲より寫したることもあるべく、又乙は丙の媒介によりて、甲を知りたることもあるべく、又丙が乙の媒介によりて、甲を知りたることもあるべし。若し乙丙共に甲を抄略せりとするも、其の抄略の方法異るときは、乙と丙との關係なきを知るべし。又乙が丙に據るか、又は其の反對なるときは、其の關係最も簡單にして前に述ぶるが如し。然れども若し丙が甲と乙とを併せ用ひ、而して乙は既に甲を用ひたる場合には、其の系統始めて複雜になるべし。若し一種類の史籍四個、五個若くは其れ以上とならば、其の關係は忽ち非常の複雜を來すべし。然れども中間の連鎖にして、甚しく亡佚せざる限りは、屢々比較研究を施して盡ちざれば

其の關係を解析して批判の効を收むるを得べし。

著者に關する批判的研究の結果二あり。一は亡佚せる史籍を再構するを得べし。例へばB及Cなる二記者が、共にXなる原書によりて記述しXが今既に滅びたりとせばBCの書の内に散見せる斷片を結合して、滅びたる甲の零々如何なるものなりしやを推するを得べし。二には、批判は從來正確として、何人も疑はざりし史籍が實は他の書に頼りて、作りたるものにして其價値の如何は、種本の如何に由ることを示し、其の價値を下すこと多し。英國及ひ獨逸に於ては、他より剽竊したる文句は、小字を用ひ、其根原の知られざる本文は、大字を用ひて、史籍を刊行する方法あり。此の如くすれば、一目にして有名なる年代記も、一の編纂物に過ぎざることを見るを得べし。

四　著者に關する批判的研究は、史家をして大なる失錯を免れしむべく其の結果は甚た大なるものあり。即ち疑はしき史籍を排斥し、著者を誤れるものあるを發見し、又史籍製作の事情の、時を經るに從ひ、不明に歸したるものあるを決定し、之を其の引用書と連絡せしむるの效あり。故に今日若し史家にして、著者に關する

傳說を輕信するか、又は材料の善惡を問はず、濫りに之を採用するものは、批判に於て缺くる所ありとの評を免れざるべし。

然れとも著者に關する批判的研究は之を濫用すべからず。極端なる懷疑の有害なるは、猶ほ極端なる輕信の有害なるが如し。ペール、アルヂーアン (Père Hardouin) が、ヴーヂル及ひホラシーの作を以て、中世の僧侶の僞作なりと爲しゝが如き、其の一例なり。著者に關する批判的研究は本文批判と等しく、畢竟準備的事業にして其の結果は消極的なり。其の究竟の目的と、其の最大の成功とは信憑するに足らざる俗書の史家を惑はすものあるを發見し、之を排斥するに過きず。即ち吾人に教ふる所は不良なる材料を用ふる勿れといふに止まり、善良なる材料を如何に使用すべきかを教へず。故に著者に關する研究は畢竟史的批判の一部分に過きざることと猶ほ建築に於ける一個の石の如しと謂ふ可し。

第四章　史料の批判的類別

以上述ふる所の方法により、或る種類に屬する、若くは或る問題に關する一切の史

料既に發見せられ、其の所在明に其の本文既に復書せられ、其の著者に關する研究既に了し、其の出處既に確められたらむには、史家は高等批判即ち內的批判に進む前、更に爲すべき一事あり。即ち此等の史料を類別することなり。此の事たる史學研究者に取りて、稍々卑近の事に似たりと雖も其の實、甚だ重要のことにして其の方法を知らずんば則ち其の蒐集せる材料の整理の爲に、無益に時間と勞力とを費すに至るべし。

一　史料の類別に就ても、亦人間自然の傾向を制せざるべからず。多數者の爲す所は、其の所要の本文を見當りたる順序に、拔萃して、手帳に記入するものなり。然れども此の方法は不可なり。集めたる材料は早晩一たび之を類別せざるべからず。若し之を類別せざるときは、或る抜書の入用なる度毎に、手帳を始めより繰廻さゝるべからず。故に發見の順に記し置く法は、一見時間を節して可なるが如きも、其の後日の結果は、搜索の勞を、大にし、又材料を結合するに、大なる困難を來すべし。

又系統的類別の利あるを知りて、先つ手帳の各頁に題目を記入し置き、材料を發見する毎に、其の種類により、適當の題下に記入するものあり。此の如くするときは同種類の記事が、一處に蒐集せらるゝ便あれども、其缺點といふべきは、何時にても增補すること能はざる場合あること是れなり。其の他一旦定めたる分類は容易に動かし難き不便あるか如きも又其の缺點の一たり。此の他、更に野蠻的方法ともいふべきは、一切拔萃を作らず、史料を記憶に托するの方法是なり。記憶力强くして、無性なる史家は、往々之を爲せども、其の結果多くは、引照又は引用文を不精密ならしむることあり。

今日最も便とせる方法は一枚々々分離せる紙片に材料を集むる方法にして、各種の史料を別々の紙片に拔書して、之に可及的精細に其出處を記入し置くにあり。此の方法の便利なる所以は、紙片は個々分離せるを以て、如何樣にも任意に之を組合すことを得べく、又必要あれば、其の組み合せの位置をも變ずることをも爲し得べく、又何時にても增補すべき便あるの點に存す。又種々の方面に關係ある材料は幾通にても之を作りて、幾個處にも之を挿入することを得。加之分量多き史料を蒐集し、之を類別し、利用する方法としては唯た此の分離紙片の方法あるのみ。

然れども此の紙片の方法も亦其の短所なきに非ず。即ち先づ各紙片に一々出處を記するの煩勞あり。若し同一の史籍が五十の紙片に分記せらるゝとすれば、全一の引照を五十回繰返さざるべからず。故に筆書の分量少しく增加すべし。此の多少の煩勞を厭うて、或る史家は頑固に劣等なる手帳の方法を墨守せり。又紙片は個々分離せるを以て紛失の恐あり。紛失して之を知らざることもあるべく、又之を知れば從來爲したる事を始より繰返さゝるべからず。然れども紛失は始めより簡單なる注意に依りて、之を防ぐことを得べし。先づ同じ大さにして、厚質の紙片を用ひ機會あらば、直に之を紙挿又は抽斗其の他の物に入れて整理し置くべし。此等の事は各自の習慣に從ひ任意なりと雖も、其の習慣の實際上便利にして合理なると、然らざるとは、科學的事業の成績上に大關係あるものなることを忘るべからず。

既に紙片に拔萃せば次には之を類別せざるべからず。其の類別の方案及ひ順序は、場合により一ならざるを以て、凡ての場合に適すべき精密の公式を提供せんこと難しと雖も、茲に二三普通の注意を與ふべし。

二　檢定を經たる史料を類別する史家に二樣あり。一は之に依て史的著述を爲さんとするもの、他は之に依りてレゲスタ及ひコルプス(Corpus)は共に史的文書を研究法に從て類別蒐集したるものにしてコルプスは文書の全文を載せ、レゲスタは、之を分析記述せるものなり。此等編輯物の目的は、搜索者に與ふるに、文書を蒐集するの便を以てするに在り。文書を分類するには、或は其の日附の順に從ひ、或は其の出處に從ひ、或は其の內容に從ひ、或は其の形式に從ひ、之を分類するを得べし。其の何れに從ふとするも、文書には日附あるものとなきものとあり。若し日附あるときは、各紙片の頭に、近世の曆法に改めたる日附をなし、凡ての史料を編年躰に排列すること極めて容易にして、而して此の法に據るを規則とす。然れども實際大抵の場合には、文書中の數者は、偶然其の日附を失ひ居るを常とす。此等の日附は編纂者之を復舊するか少くとも之を復舊せんことを勉めざるべからす。則ち之が爲に長き搜索を要するなり。

若し文書に日附なきときは、字母順か、地理別か、又は系統的順序かに從ひて、分類せ

ざるべからず。羅典金石文集編纂の歴史は以て、其の選擇の困難なるを證せり。羅典金石文蒐集の事始まりてより二世紀の間、其の分類の方針區々にして一定せず。地理的分類を便とするの論盛んなるに及び、之に從ふことゝなれり。字母順は編年時及ひ地理別の、共に不可なる場合には甚た便利なり。例へば中世に於ける既發讃美歌の如き、其地方及日附、共に精密ならざるものに於ては、其の頭字に從ひ、之を排列するか如き是れなり。

系統的分類即ち事項の種類に從つて排列するは、コルプス及びレゲスタの場合に於ては、好ましからず。蓋し其の結果常に分類を任意にし、同一物を反覆し、又混亂を來すを免れざればなり。年月日、地理又は字母の順に從ひ排列せるものは、之に附するに、完備せる順次を以てすれば、事項別の用を爲すべし。コルプス及ひレゲスタを作るの術は、十九世紀後半に於て、非常の進歩を爲したるか、其術たる、分類法の如何に拘らず、使用に便なるを主とす。即ち之に種々の表を附し、完全なる索引を附するの類是なり。

コルプス及ひレゲスタを作る者は、一般史家の便利を目的とするが故に、自己の興味を有せざる材料までも廣く之を網羅せんことを勉む。普通の史家は唯た自己の研究に資すべきものゝみを、採擇蒐集するを以て、兩者の蒐集法に自ら差異あり。例へば一般の蒐集に於ては、事項別は不便なれども或る特別の研究事項に於ては、之を便とすることあるの類是なり。然れども一般の編輯を專門とせる者が、多年の經驗によりて、便なりとせる器械的慣用法は普通の史家に於ても、之に倣ふを可とす。例へば各紙片の頭に年月日を附し、又は之に見出しを附け、引照索引等を增加し、又は既に使用せし史料は、別の紙片に之を記し置きて、他日同書を繰返すの要なからしむるか如き其の科學的の研究を容易にし、且之を精確ならしむるの效大なるものあり。

第五章　外的批判と外的批判家

以上述ふる所の事、即ち本文の復書、著者に關する研究、檢定を經たる文書の蒐集類別は、是れ外的批判に屬する廣大なる領分にして、世間一般の公衆は、其の卑俗にして淺薄なる標準よりして、此の事を輕々に看過す。此の如きは強て之を咎むるに

も及ばず。之に反して外的批判を專門とせるものは、動もすれば、唯た其の必要を唱ふるに止まらず、不知不識、其の價値を過大に誇張し、或は、史學をして、科學の位地に上らしめたるは、外的批判の精確なる研究方法に外ならずとなし、或は、著者に就ての批判的研究は、一切の他の研究よりも、史家をして、過去の眞相を洞察せしむるの力ありとなし、或は外的批判を以て、史的批判の全部となし、史料の改訂、刪定、類別等の外、復た爲すべき事なきが如く思惟せるものあり。是れ專門家中に有り勝の事にして、其論の淺薄なるは、細說を要せず。實際過去の眞相を深く洞察するには心理的批判に依りて史料の解釋を爲し、著者の信用すべきや否、其の精密なるや否を見ざるべからず。決して外的批判によりて洞察し得らるべきにあらず。若し自己の研究問題に關する凡ての史料が、既に訂正せられ、類別せられ、其の著者に就ての批判も亦既に了したるものなるときは、史家は自ら此等の準備的事業を爲したると等しく、直に此等の史料を使用するを得べし。史家は必らず、原史料の座を掃ふに非れば、史的官能を十分に有すると能はざる理はなきなり。ルナン(Renan)が『史家は常に原史料を取扱ふ習慣を有するに非れば、歷史、其の界限、及ひ史的研究の種々の事項に畫かるべき信用の分量に就て明瞭の觀念を得ること、何人も難かるべし』と言へるの意は之を其の文字に拘泥して解すべきにあらず。唯た常に原史料によりて、一定の問題を研究するの習慣を養はんことを奬むるにあるのみ。古代史の材料の如きは將來盡く校訂を經て出版せらるゝの日あるべく、此の時に至れば、此の部分の研究に向つては、既に外的批判の餘地を存せざるべきなり。外的批判は全く準備的のものにして、一の方便に過ぎず其の目的には非るなり。然れば史的綜合を專門とするものに在りては、其の使用する所の材料に向つて、自ら準備的事業を爲すの必要なし。歷史の事業も、亦分業をなし、外的批判は其の專門家の事業となし、高等批判、綜合、構成を專門とせる史家は、外的批判の煩を免るゝものとゝすべし。マトク、ペッチソン(Mark Pattison)が『歷史は手書によりて書かるゝものに非ず』と言へるは、其の意蓋し、歷史を書かんとするものが、材料の訂正まで、一々自らするは、到底行るゝことに非ずと云ふにあり。

古は批判學者と歷史家とは別にして、歷史家は當時歷史と稱したる書籍を研究して、批判の業に指を染めず。批判學者は文書の蒐集、訂正、類別を其の務として、歷史

其の物には趣味を有せず、史的智識も、世間一般と擇ぶ所なかりき。此の如き判然たる分離は今日到底行はるべきに非ず。批判は史家の使用を目的とする外、其の存在の必要なきを以て、兩者の間密接の關係なかるべからず。故に史學家にして批判學者を兼ぬる、固より妨なしと雖も、理論上に於ては、之を分つに若かず、又實際上往々之を分つの必要あり。

實際史料の情態に三個の場合あり。第一、史料が既に校訂類別を經たる場合。第二、其の一部校訂類別を了したるか又は未だ全く之に着手せざるも之を爲すこと容易なる場合。第三、材料甚だ紊亂して、之を使用するに適せしむるには、非常の勞力を要する場合是なり。(因に云ふ。研究問題の大小と、之に要する準備の大小とは、決して比例するものにあらず。例へば基督教の起源及ひ其の初期の發達の如き問題は其の準備的研究に數代を費して後、始めて研究の本部に入るを得しも、佛國大革命の如き、等しく重大なる問題の材料は、準備の勞遙かに之より小なりき。中世史の問題は、比較的に重大ならざるものも、外的批判に要する勞は、甚大なるものあらんか如し。)

第一と第二の場合に於ては、分業の必要なし。第三の場合即ち研究問題の材料散亂し、錯誤せると甚しきに方りては、史家の之に處するの道二あり。若し之を整理するに要する器械的の業に全力を注ぐを厭はゞ其の研究問題を放棄すべし。然らずんば全力を之に注き其の整理せる材料を、自ら使用する歳月を有せざるときは、後代の史家をして、之を使用せしむべく、己れは一生批判家を以て終るも、悔ひなきの決心を爲すに在り。固より歴史を著述するの目的を以て、大に材料を蒐集し、之を校訂出版するは妨けなし。一人にして外的批判の準備的事業と、歴史構成の高尚なる事業とを成したる史家なきに非ず。即ちヴィッツ(Waitz)、モムセン(Mommsen)、オーレオー(Hauréau)の如き是なり。然れども此の如きは甚た稀なり。蓋し其の稀なるの理由は固より種々あり。第一人生の短きこと是なり。第二、外的批判の準備的事業に興味を起し、始めは高等の研究に歩武を進めんと期したるものも、時を經ると共に、漸く外的批判を以て滿足するに至り、遂に終生之に止まるに至る者多きこと是なり。

外的批判を以て、專門の事業とする學者の存在は固より可なり。歴史の研究に於

でも、分業の結果は、工業に於けると等しく良好にして、産物を豊富ならしめ、之を成功せしめ、又之を整頓せしむべし。久しく本文の復審に從事せるものは、之を復審するに於て、巧妙にして精確なること、他の企て及ぶ所にあらず。又專ら著者の研究に從事したる者は他の之に慣れざる者の、到底及ばざる所の直覺を有す。又目錄の調製、及レゲスタの編纂に一生を送るものは、其の調製編纂の良好なる、亦他の及ぶ所にあらず。故に所謂歴史家なるものが必らず同時に外的批判の業に從はざるべからざるの理なし。又外的批判も之を種々の細目に分つを得べし。例へば解題又は索引の調製を專門とする者(記錄局員、圖書館員等)又是よりも更に批判を主とする者(刪定者、復審者等)又たはレゲスタの編纂に從事するもの等に分つの類なり。分業は決して細小に過ぐるを要へず。各分科の範圍狹小に赴くに從ひ史學は益、進歩すべし。近代に至るまで、史家が一人にて、各種の事業を行ふを得たるは、社會の未だ進歩せざりしに因れり。今日史書を批判するものは細微の點に論及して、絶對的完全を期せざるべからざるが故に、批判には專門的技倆を要するに至れり。

蓋し歴史的事業を分つて、外的批判家と、純粋の歴史家とに分擔せしめ外的批判を更に數部に分つの利あるは、學者中其の天性の外的批評に適せる者と、全く之に適せざるものとの別あればなり。蓋し、外的批判の準備事業に從事せる者に二種あり。一は之を嗜好するが故に、之に從事せるもの、他は之を好まざるも、必要上已むを得ず之を爲せるもの是なり。其の目的より言へば、後者は前者に勝れりと雖も、前者は義務として之を爲すに非るを以て、愉快に之に從事し、全力を注ぐを得、其の結果は却て後者よりも善良なるものなり。

今外的批判に適せる天性と到底之に適せざらしむる缺點とを擧げ次に外的批判の之を專門事業とせるものゝ性格上に及ぼせる結果に就て少しく述ぶる所あらん。

一　外的批判に於て、成功する第一の要件は、之を嗜好するに在り。詩人又は思索家の如き創作力に富めるものは、準備的批判の煩に堪えざるものなり。固より彼等は批判を卑むものにあらず否、事理に明なるものは、これを尊重すと雖も、所謂剃刀を以て石を切るの恐あるより進んで之を爲すの勇なきなり。ベナーヴュ曾て

ライプニッツに勸むるに、國際法の歴史に關する文書の、未だ刊行せられざるものを蒐集せんことを以てしたるに、ライプニッツは、其の轉寫人となるの意なきを答へて之を拒み又ルナンは高等批判の準備の爲めに費されたる無量の勞力に就いて記しゞ曰く、『若し(此等の準備的批判を爲したる人より)一層活潑なる智的要求を有する人にして能く彼れが如き準備的事業を遂行するものあらば、是れ一の英傑なり』と。ライプニッツ、ルナンの如きは外的批判に指を染めたりと雖も幸にして之が爲めに其の一層高倘なる能力を犧牲に供するに至らざりき。

天才若くは自ら天才を以て許す人の外、普通の人が時を經るに從ひ、批判の些細なる點を以て滿足を得るに至る所以は、蓋し批判は二個の普通なる嗜好を滿足せしむるに因る。一には蒐集の嗜好、二には紛雜を解くの嗜好是れなり。蒐集は唯、見童の之を喜ぶのみならず、大人も亦之を好む。郵便印紙を蒐むるも、異本を集むるも、其の樂や一なり。又讀み難き文字を讀み分け、文句の些々たる問題を解くが如きは、隨分技倆ある人にも興味あるものなり。凡そ發見は愉快を與へ而して批判には發見多し。有名なる批判家は頗る蒐集癖と紛雜を解くの癖とに富めり。此等の嗜好は蓋し批判の必要條件と謂ふべし。之なきものは以て外的批判の社會に立つこと能はず。然れども解釋、構成及ひ表彰の如き高等批判の業は天才を要するも、のなるか故に、漫然史界に身を投じ其の心理的技倆の高等批判に適せざるを見、何等か史界の爲めに貢獻せんと欲するものは、外的批判の準備的事業に從事するが故に、外的批判家たらんと希望するものは常に其の數多しとす。

然れども批判家として成功するの要件は、唯た之を嗜好するのみを以て足れりとせず。「熱心を以て補ふこと能はざる」資格を要す。青年學者中先天的に批判的事業を厭ふにあらず却て之を嗜好せるものにして、實際之を爲すに全然適せざるものあり。若し其の人にして一般の教育足らざるか、又は批判の業に就て修養なきときは其の之を爲す能はざるも當然なれども、教育も十分に之れ有り智力も十分發達しながら之に適せざるものあり。其の作る所の目錄若くはレゲスタ、其の出版する所の校本一として缺點斑々たらざるはなく何れも信憑するに足らざるなり。此等は慢性的不精密病に罹れるものにして英國の史家フラウド(Froude)の如き其の顯著なる一例とす。フラウドは固より十分批判の必要なるを認め、英國に

て始めて古文書に基きて歴史を研究したる者の一人なり。然れども其の心理構造は全然批判に適せず、其の古文書を取扱ふや、不知不識之を殺丁せり。而して其の記する所は一として多少の誤謬なきはなかりき。色盲者が鐵道の雇人となるを得ざるが如く、慢性不精密病即ちフラウド病は素と外的批判の專門とは兩立せざるものと思はざるべからず。フラウド病は其の性質常人が不注意より誤謬を爲すと同じからず。誤謬を避けて精密ならんことに全力を注げるときも、常に多くの誤謬を爲すものなり。其の原因は蓋し注意力の薄弱なると、無意識的空想に富むとによる。即ち此の病に罹れるものは、其の意思力弱くして爲めに智力作用を侵害する所の空想を防ぐ能はず。記憶の足らざる所は推測を以て之を補ひ、事實と想像とを混同するに由るならむ。

フラウド病の外、更に注意すべき一事あり。他なし、其の心は健全にして、權衡を得たるものと雖も、批判的の業に對しては必要なる時間を與へざれば、其の最も簡單なるものも尚ほ之を誤るの恐あることは是れなり。忍耐は學者の第一の德と謂へるは誠に當れり。神經質にして激動し易き人は、常に事の終局を見んと急ぎ、常に事業の變化を求め常に世を驚かさんと希ふ。是等の人は他の事業に於ては成功すべしと雖も、批判の業に於ては失敗すべし。眞の批判家は冷靜なり、遠慮なり、用意周到なり。人生の渦中に投じて決して急がず。然る所以のものは其の爲す所の研究の堅固確實にして、千古に滅びざらんことを希へばなり。

批判家は批判の何れの部分を專門とするを問はず、天稟細心にして、强き注意力と意思とを有し、又推測力に富み、完全なる無慾を有し、又餘りに活動を好まざるを要す。何となれば其の爲す所のことは、遠き未來の結果を豫期するものにして、其の結果を得ること確實ならず、多くの場合に於ては、他人の利益の爲めに働く者なればなり。本文批判及ひ引用書研究に對しては、紛雜を解くの天性、即ち敏捷明察にして、假說に富み、事物の關係を捕促し或は之を推測すること速なるの性を要す。目錄、レゲスタ、及ひコルプスの調製の爲めには、絶對的に蒐集癖を要す。之に加ふるに、勉强、忍耐の性、並に秩序を好むの性を以てせざるべからず。此等の適當性を缺ける者には外的批判は極めて無趣味のものにして、其の結果は費したる時間に比して甚だ小なり。故に天性此の業に適せざるものが專門の業を定むるに方り

て適當の助言なかりし爲め此の途に迷ひ入るか如きは畢に氣の毒の次第なり。

二 外的批判は多く獨逸人の氣質に適し、現世紀に於て獨逸の校訂業は甚だ盛なりき。從て外的批判を行ふ間に、其の心を不具となすの例も亦獨逸に最も多し。獨逸學生の大學に入るや、未だ一年をも經ざるに、既に批判の害を受けたりとの歎聲を聞くに至る。千八百九十年ギーセン大學總長フィリッピイ君は、學生の研究の其の根本を離れて、枝葉に亘るを歎じ『智力的結果よりも研究材料の方、重きを置かる』と言ひ同年又ベール大學のブルーグ、ハルツング君は『歴史の最高部分は忽諸に付せられて不必要なる末事の顯微鏡的觀察及ひ絶對的精密のみ獨り重ぜらる。本文及ひ引用書の批判は一種の遊戯の如く、競技の規則を少しにても破るを以て、許すべからざることゝし、之を守るものは、其の結果の固有價格の如何を問はず、鑑定家の賞贊を博せり。學者互に疾視し且つ互に不遜なり。彼等は嚴垤を築きて山となすものなり』と言へり。之を要するに批判學者の陷る所の弊なるもの凡そ三あり。即ち漫學の弊(Dilettantism)穿鑿の弊(Hypercriticism)及ひ活動力消耗の弊是なり。

活動力消耗の弊＝批判的解剖の習慣は人心の或る作用を緩弛し之を麻痺せしむるものなり。天性小心なるものゝ批判に從事するや如何に注意の周到ならんことを勉むるも、其の校訂分類せる文書の猶ほ多少の誤謬を免れざるを見ては、其の批判的教育の結果として大に之を恐怖す。其の署名せる著書に誤謬あるを見て、之を改めんとするも、既に晩きときの如き、頗る痛苦を覺ゆ。此の如きの結果は不完全を恐るゝの極、惴々として遂に何事をも爲す能はざるに至る。

穿鑿の弊＝批判の過度なるは、猶ほ最も疎慢なる無識の如く誤謬を來すものなり。是れ批判の原則を其の範圍外まで適用するより起る。即ち十分明白なる本文を捕へて、強て之を精論して却て疑はしきものとなし、正確なる文書にも故らに僞作の痕迹を發見す。即ち絶えず輕信の天性に打勝たんと勉めたる結果、百事百物皆之を疑ふに至れるなり。本文及び引用書の批判、積極的の進歩を爲すに從ひ、穿鑿に過ぐるの危險は增加するを見るべし。一切の史料が既に適當に批判せられたる後は、(古代の史料に就ては既に遠からず其の域に達すべし)健全なる思想を有するものは之を終止と看做すべしと雖も、批判學者は猶ほ其の上にも之を精練せん

として、遂に穿鑿の弊に陷るべし。ルナンは曰く『歴史學及ひ其の補助的言語諸學科研究の特質は比較的完全の點に到達するや、則ち忽ち自己を破壞し始むるに在り』と。其の原因は蓋し亦穿鑿の弊にあり。

漫學の弊＝專門の批判家は批判を視ること、恰も熟練を要する一藝技の如く、其の規則の複雜なるによりて興味を感ずること、將棋に於けるが如し。批判家中或は大問題―歴史其物―には無頓着にして、批判の爲めに批判を爲し、穿鑿の方法の精微なるを尊んで結果の如何を問はざるものあり。此の如き古物家は其の勞力を或る一般の思想に聯絡することを勉めず、或る問題を系統的に解せんが爲めに、之に關する一切の文書を批判すると莫く、苟も相應に轉訛せる材料あれば無差別に之を批判す。即ち其の批判の技能を武器として、歴史の全體に渉獵し、困難の點に逢へば、則ち留りて之を批判し、一問を解き或は論ずれば、忽ち他に移る。其の結果たる一も纒れる成績を後に遺すことなく唯た雜駁なる論文集を遺さんのみ。是れカーライルの所謂骨董店又は小鳥の群の如きものなり。

漫學に就ては辯護說も亦種々あり。或は曰く『凡そ何物と雖も苟も重要ならざるものあること莫し。歴史に於ても價値なき文書とてはあるとなし。科學的研究に無效なるものあることなし。一として眞實に科學の用を爲さゞるものあることなし。故に歴史に於ても鎖細なる題目として斥くべきものなし。研究の價値を減ずるものは題目にあらずして方法にあり。歴史に於て重ずる所のものは思想の集積にあらずして科學的精神にあり。歴史の材料中には重要の差こそあれ或る文書を以て先天的に無用なりといふを得ず。畢竟何を以て有用無用の標準とすべきか。久しく放棄せられたる文書が觀察の方面の變化より、又は新材料の發見の爲めに、俄かに重視せらるゝに至れる例多きに非ずや。其の物自身に價値なきものも猶ほ方便として必要なるものあるべし。將來科學が完全の域に達せば、平凡なる文書及び事實は、之を棄て去るも妨なきに至る日あるべしと雖も、今日に於ては未だ必要なるものと、無用なるものとを甄別すべき域に達せず。恐くは將來とても此の區別を爲すこと難からむ。是れ枝葉の穿鑿の一見甚だ無用なる如きものも、猶ほ多くの必要ある所以なり。而して其の結果最も不良なりとするも勞力の一部を無用に費すこと亦何の妨あらむ。廣濶なる範圍内に無用なる

ものをも包括して研究するは一般人事界の努力、否自然界の作用なるが如く、亦科學に於ける法則なり』と。

ルナンの此の事に關する論斷に曰く『或る種類の研究は、之に要する時間より考ふれば、無用と謂て可なり。其の時間は之より更に重大なる問題に使用するを可とす。……技術家は其の從事する業に就て、よしや完全なる智識を有せずとも或る專門の勞力に一身を捧ぐるものも、一般の事に就ての概念は之を有するを可なりとす。是れ其の研究をして價値あらしむる所以なり。近世科學の進歩を來したる人々が其の從事せし業に於て、哲學的見解を有したらんには、貴重なる時間を節し得たること幾何ぞ……人事界に於て指導者なく又遂行すべき目的を明確に自覺せざるよりして無用に時間を費すこと多きは惜むべきことなり』と。

漫學の弊に陷れるものは精神の或る高度、と道德的完全の或る程度に到達すること、と雖しと雖も敢て專門的熟練と兩立せざるものにはあらず。最も上達せる批判家中往々にして其の技能を職業と爲し、未た嘗て之を方便として到達すべき目的を思はざるものあり。然れども科學が漫學の弊より受くる所、の害は恐るべきものあり。想像若くは好奇心に驅られ、其の問題の固有の價値を思はず、唯、其の解くに難きを喜びて研究する批判家は、史家に供給するに最も渴望する所の材料を以てせずして、不急の材料を以てす。若し外的批判專門家の活動が專ら決解を要する問題に就てのみ試みられ、而して之を整理し又之を指導したらんには、其の結果頗る見るべきものあらん。

勞力の合理的組織によりて漫學の弊を防がんとの說は既に古へより之あり。五十年前に在ては監視の說又は散亂せる勢力集中の說盛に行はれ近世工業の組織に倣ひ、『一大工場』を起し、科學の爲めに外的批判の準備的勞働を爲んとの夢想を起し、各國政府、學士會院又は學會等に於て批判の專門家を集め勞力を合して一大事業を成さんとせしも、適當なる人の爲めに、其の監視の下に專門家を隊伍せんことは、器械的の一大困難を呈す。科學的勞力組織の問題は猶ほ今後に於て講せらるべきものなり。

三　批判家は往々傲慢にして同學者の勞力に對して過酷の批評を下すの誹を免れず。此の酷評を受けたるものは此の過失を以て餘りに細事に拘泥するに歸

すと雖も強ち其れのみにもあらず。一には其の批判家の性格の如何にもよるものにして謙遜にして、親切なる批判家亦尠しとせず。例へばドゥカンジ(Du Cange)の如き是なり。氏は自己の勞力に就いては曰く『此等の事又は此れ以上の事をなすには目と手とあれば他を要せず』と。氏は決して他を責めざるを以て主義とし、曰く『予の研究するは研究の愉快の爲めにするものなり。自己に與ふるより大なる苦痛を他に與へんが爲めにはあらず』と。然れども多數の批判家の他の誤謬を暴露して恥るなきは事實にして、其の厲酷なる往々暴慢の言を發するに至る。史學に一身を委ねんとする青年中往々商賣氣質又は凡俗的野心の科學を愛好する心よりも強きものあり。此等の輩は謂へらく『歴史の業は若し研究法の規則に從て之を爲せば、無量の勞力と注意とを要す。然れども歴史の著述中、現に此規則を破れる者あるに非ずや。著者は之が爲めに其の名を損ぜるや。最高の名譽を得るもの何ぞ必ずしも最も注意せる記者ならんや。機智は能く智識の闕を補ひ得ざらんや』と。若し機智を以て智識の代用をなし得べくんば、彼等の眼中には、唯一の成功あるのみなるを以て、其の成功を得ん限りは、研究の善惡は措いて問ふを要せずと斷ずるに至らむ。人生に於て最も榮達する者は必ずしも最善の人に非ず。歴史の業に於ても亦然らざらんや。青年史家をして往々彼が如き推測を爲すに至らしむるもの其の罪批判家の過酷なるにあり。

佛國第二帝國の終りに方り、歴史に關する所說一も見るべきなく史料の出版せらるゝもの杜撰にして而も其の編者は不當の賞贊を博せり。Revue Critique d' Histoire et de Literature『歴史及ひ文學の批判的評論』は、此の狀態を憂ひ、其心と研究方法とを缺ける批判家を懲戒して永久批判の業を廢せしむるの目的を以て起れり。其の一般公衆に對する影響は甚た大ならざりしと雖も、其の警察的の作業は關係者をして眞摯にして研究方法を重んずるの必要を悟らしむるに於て大效ありき。其の與へたる刺戟は其の後二十五年の間に於て意外に普及せり。

今日に及んでは、批判に關係ある事物を以て、批判社會を瞞着し、若くは暫く之を欺罔し置かんことは、非常に困難なり。歴史に於ても亦他の科學の如く新に誤謬を確立し、又は既に確立せる眞理を打破せんこと甚だ難し。不精確なる研究は早晩發見排斥せらるべく、而して甚だ早きを常とす。今日外的批判の理論は既に確立

し、各國專門家到る處に之れあるを以て、文書解題訂校本レクスタモノロジカ等を出すや直に之を精査し之を解剖して判斷を下すべきを以て、今後非難を避くべき凡ての方法を悉くさずして、校本を出すが如きは無職の極なるべし。之れを知らざるが、爲めに不用意に批判家の列に入り後悔する者常に之あり。職者は批判の業の勞多くして名大ならず、而して機敏なる專門家は其の領地を守りて他の侵入を懼ばざることを知れるを以てかゝる危險を冒さゞるなり。

拙劣なる史家は批判家の嚴密なる批判を避け一般公衆を相手とする爲め、歷史の述作に從事す。此の方面に於ては、研究方法の規則他に比して明瞭ならず。否寧ろ善く人に知られず。本文原本の批判は既に科學的基礎を有するも歷史的綜合は猶ほ運任せに實行せらる。外的批判に於ては心の混亂、無職、怠慢等直に認めらるべき缺點なりと雖も、歷史の著述に於ては、文飾によりて或る點迄は之を隱蔽すると難からず。而して一般公衆は此の點に關して未だ十分の智識なきを以て之を責めず。即ち此の方面に於ては猶ほ無罪放免の機會存するなり。然れども此の機會は漸次減少し行くを以て、今日批判の準備的事業に於て不注意にして拙劣なるものが專門家に排斥せらるゝが如く、不精密なる綜合をなす淺薄なる記者が、學者の輕侮を受くるの日久しからずして來るべし。オーギュスタン、チーリー(Augustin Thierry)ランケ(Ranke)フュステル、ド、クーランジ(Fustel de Coulange)ティン(Taine)等の如き、第十九世紀に於ける大史家の著と雖も既に批判家の爲めに攻擊せられたり。其の研究方法上の缺點は既に認識せられ決定せられたり。

されば拙劣なる著述も世の批難を受けざりし時代は既に過去に屬し、又は將に過ぎ去らんとしつゝあることを熟考し史的事業に從事するものは、須く正直に之を爲さゝるべからず。

第二部　內的批判

第六章　解釋的批判 (Herméneutique)

一　動物學者が筋の形狀及ひ位置を敘述し又は生理學者が運動の弧線を說く や、吾人は躊躇なく其の說を承認す、是れ此の結果は如何なる方法に由り如何なる

器械を用ひ如何なる配載式によりて得られたるものなるかを知ればなり。然れどもタキツス(Tacitus)がゲルマニア人に就きて、Arva per annos mutant と云へるは果して正當の方法によりて之を知り得しや、又 arva 及ひ mutant とゝへる語は如何なる意味に之を用ひしやを知らず。之を確むる爲めには準備的作業を要す。此の作業即ち內的批判なり。

內的批判の目的は史籍中より眞實として採用するに足るべきものを發見するに在り。今夫れ史籍は幾多の作業を經て成れる最後の成績にして、其の作業の詳細に至りては著者記する所なし。即ち著者は事實を觀察し、之を蒐集し之を綴り、語を書き下さゝるべからず而して此等の作業たるや個々別々の作業にして決して一樣に精密に爲されたるものにあらざるべし。此の故に著者の勞力の結果を解剖して何れの作業が不正に爲されしやを見、其の不正當なる作業の結果は、之を排斥せざるべからず。故に批判には解剖を要す。凡ての批判は解剖を以て始めとす。

論理的に完全を求むれば、解剖は著者の爲したる一切の作業を反覆して、一々之を點檢し、果して正當に爲されしや否やを見ざるべからず。即ち著者が或る事實を目擊したる當時より手を動かして文字を記したる時までの行爲を一々辿らざるべからず。又は之を逆にして反對の方向に進み手を動かしたる時より遡りて、事實を觀察せる時に至らざるべからず。然れどもかくの如き研究方法は甚だ迂遠にして、之を適用すべき時間若くは忍耐力を有するものあらざるべし。

內的批判は外的批判の如く、之を娛樂の爲めに用ゆべき一の器械にあらず。內的批判は截然或る問題を決解するものにあらずして、直接の滿足を與ふるものに非ればなり。史家の之を爲すは不得已に出づるものにして、其の適用は可及的之を節減するものなり。故に最も嚴密なる史家と雖も、凡ての作業を二種に分つの便法を以て滿足せり。即ち(一)史籍の內容の批判及ひ積極的解釋的批判即ち著者の言はんと欲せし所のものを確定するに必要なる作業(二)史籍の製作せられたる事情の解剖及ひ其の消極的批判即ち著者の陳述の檢定に必要なる作業是なり。是の如く內的批判を二種に分つは唯た少數史家の爲す所にして、研究方法によりて研究する史家と雖も自然の傾向は、先づ精密に著者の眞意を確むることを爲さず

して、本文中より直接に智識を得んと欲して之を讀むものなり。此の方法も第十九世紀に成りたる史籍に對しては不可なし。是れ其の用語及ひ思潮の吾人と相類似し其の解釋の如きも唯た一樣あるのみなるを以てなり。然れども著者の用語及ひ思想が、之を讀む史家のそれと相違し本文の意味明瞭ならざる場合に於ては、此の方法は危險なるものなり。本文の眞意を解するに全力を注がざれば、本文中自己の先天的に有する意見と符合せる一二の文字若くは文句を取りて、自己の想像本文を作出し著者の眞意を誤るに至るべし。

二　此の弊を防ぐの道は他の場合と等しく先づ始めに起る感念を制壓するに在り。即ち文書は之を書きたる人の思想をのみ包含するものなることを飽くまで覺悟して、先づ文書其物を理解するを第一とし其の文書を歷史の爲めに如何に利用すべきかの問題は之を後にせざるべからず。即ち文書の研究は記者の眞意を決定する唯一の目的を以て其の內容を解剖するを第一の任務となすと云ふを原則とすべし。

此の解剖は全然獨立せる一の準備的作業にして外的批判の場合と等しく、分離せる紙片の法を用ふべし。即ち文書を解剖し、其の各部分を別々の紙片に記すべし。各部分には本文の大意を記し又可及的記者の目的及ひ意見を記し置くべし。又記者の思想の特徵を見るに足るべき文句は、之を原文の儘に寫し置くべし。時としては本文を唯た心中に解剖し置くのみにて、一々其の內容の全體を記するの必要なきこともあるべし。此の如き場合には唯た史家が利用せんと欲する點をのみ寫すべし。然れども自己の思想を以て本文を誤るの憂を防ぐ爲めに、縱令紙上には之を筆記せざるも、先づ心中には其の文書全體を解剖し、而して後其の文書中の文は解剖せる部分より拔萃をなすべし。

文書を解剖するとは、即ち著者の言ひ表したる凡ての思想を分解するの謂にして畢竟解釋的批判に外ならず。解釋的批判に二個の階級あり、即ち(一)其の文字の意義の解釋(二)實際の意義の解釋是れなり。

三　文書の文字上の意義の決定は、言語學的作業にして、狹義の言語學が歷史の補助學科たるは亦之が爲めなり。本文を理會するには、先づ其の言語を知らざる可らず。唯た其の言語の一般智識を有するのみにては不可なり。例へばグロオ

アル、ド、グレーヌ(Grégoire de Tours)の文を解するには、唯た普通に羅典語に通ずると云ふを以て足れりとせず、又グレゴアルの用ひたる特種の羅典語をも專門に研究せざるべからず。

用處の如何を問はず同一の語は之を同一の義に解するは人の常に爲す所にして言語は一定不動の記號なるが如く思ふものあり。固より科學上の記號例へば代數の記號又は化學の術語の如きは、一定不動にして用處の如何又は前後の關係如何を問はず其の意義確定すれども、文書に用ひらるゝ普通の言語は、其の意義變動するものにして同一の語も、種々のものを表はすに用ひられ、同一の記者も前後の關係によりて種々の義に用ひ、同一の語も記者によりて其の意味を異にし、又同一語も時を經るに從ひ、其の意義を變ず。例へば古代の羅典語にてVelは『或は』又は『さへも』の義のみを有すれども、中世の或る時代には『及び』の義を有するが如し。故に史家は凡ての本文を、古代又は近代の意味にて解釋せんとする傾向に打勝つを要す。言語の一般規則に基ける文法上の解釋を補ふに特種の場合の研究に基ける歴史的解釋を以てせざるべからず。其の方法は文書にある語の特別の意義を決定するに在りて、其の原則は簡易なる數條に過ぎず。

イ) 言語は不斷の變化をなし、各時代には特有の言語あるもの故、其の時代の言語は、他と獨立せる符號の系統として、取扱はざるべからず。即ち文書を理會するには、其時代の言語を知るを要す。即ち本文を記したる當時に用ひられたる語の意義及ひ文句の形を解せざるべからず。語の意味を決定するには、之を用ひたる種々の場處を對照すべし。其の內には前後の文章より、して、意義明瞭疑なきに至らしむるものあり。史的字書には各語の下に歴代に用ひられたる例を擧げ、其の記者を示せるを以て其の時代を確定し易し。例へばThesaurus Linguae Latinae又はデュ、カンジュの語彙の如き是なり。

(ロ) 言語の用法は地方により異るを以て史家は文書の書かれたる地方の言語に通ぜざるべからず、即ち其の地に通用せる特別の意味を知らざるべからず。

(ハ) 各著者には特有の文脉あるが故に、史家は著者の言語を研究せざるべからず。即ち著者が用ひたる言語の特別の意義を研究せざるべからず。之が爲めには或る著者の書を研究する爲めに作りたる辭書を用ふべし。例へばモイゼル(E

ausol)のシーザー辭書(Lexicon Caesarianum)の如き是なり。

(二)、同一の文句も現はるゝ場處に從て、意味を異にす。故に各語及ひ文章の意味は之を孤立せるものとして解せず、前後の關係に着眼して解せざるべからず。是れ解釋の根本規則たる前後文勢の規則にして一の本文中より一句を抄出せんと欲せば、先つ本文の全體を讀まざるべからず。近代の著書に引用文を以て充塡し、其の引用文は前後の文勢を顧みず、諸處より抄出せる所の斷片なるか如きは、此の規則の禁ずる所なり。

此等の規則を嚴密に適用せば是れ殆と誤謬の憂なき解釋の方法なるべきも、此の如きは時を費すこと大なり。然れども亦善良なる翻譯には闕ぐべからざる勞力とす。但し歷史文書の場合に於ては幾分か之を省略するを常とす。蓋し凡ての語が盡く意義を變するものにあらず。多數は各著者を通じ、各時代を通じて、大抵同一の意味を有するものなるを以て、性質上より特に變化し易き文字を限りて之を研究するを以て足れりとす。即ち第一は慣用の文句にして、一語々々の義は變ずるも全句の義は變せざるもの。第二には性質上變化し易きもの、例へば人の團體、制度、慣例、感情、普通の物品等を表はす語にして、此れ等の種類の語は決して一定不動の意味に解釋すべからず、今解釋せんとする文書に用ひたる特別の意味を確むること絕對的に必要なり。フュステル、デ、クーランジュ曰く「語の此の種の研究は歷史科學に於て甚た重要なるものにして、語の解釋を誤らば、是れ重大なる誤謬の源とならん」と。現に氏は百個許の語に、正當なる解釋的批判を加へ、遂に之か爲めにメロヴィング朝の歷史に革命を來せり。

四　既に文書を解剖して、其の文句の文字上の意義を確定するも未だ必ずしも、記者の眞の思想に到達せるものにあらず。是れ記者は異りたる意義に於て言語を用ひたるやも知れざればなり。是れ屢々あることにして、譬喩、諧謔、諷言、含蓄等の場合に於ては史家が不精密なる文字の下に隱蔽されたる眞意を看破せざるべからず。

論理上此の問題は甚た複雜にして何れの場合にも其の異りたる意義を摘發するに用ふべき外的標準を示さんこと甚だ難し。然れども實際に於ては著者が讀者をして理解せしむるを第一の目的とせる場合には、著者は故らに異りたる意義を

用ふることなしと見て可なり。例へば官文書、特許狀、歴史譚の如き是なり。然れども記者にして讀者の理會以外に目的を有するか又は其寓意を看破し得べき公衆に向つて著述したる場合又は讀者が宗教上又は文學上同社の者にして記者の暗號譬喩を解する場合には記者は動もすれば此の異りたる意義を用ふる恐あり。是れ宗教上の本文、私の書翰、及ひ文學的著作に於て多く見る所なり。故に本文中より隱れたる意味を發見確定する術が、エルメニューチック（希臘語解釋的批判の義）の理論と書典解釋の大部分とを占めたり。

變義（通常の場合と異りたる意義）を文字中に含蓄する樣式は頗る區々にして之を發見するの術を一定の規則となして表すこと難し。唯た一般の原則といふべきは、文字通りの意義が不合理なるか、連絡なきか、又は不明なるか、又は記者の思想若くは其の知れる事實と矛盾する場合に於ては、是れ變義を用ひたるものと推定すべきこと是なり。

其の變義を決定するの法は記者の用語を研究すると全じく、先づ變義の疑ある文句の現れ居る諸節を對照し、前後の關係よりして其の意義を明にすべきものなきかを見るべし。然れども此の問題を解くには一も確定せる方法なきを以て或る本文の中に含蓄せる意義を盡く發見せりとか、又は凡ての寓意を捉へ得たりとはいふべからず、又縱令或る意義を捉へ得たりと思ふとも、此の意義より更に憶測を逞うすること勿れ。

以上の注意をなすと共に、又餘り過度に寓意變義を求めさることを要す。例へばテオ、プラトー學派のプラトーの著書に於ける、スチーアンボルグ派の聖書に於けるが如くなるべからず。此の種類の研究は常に推測に過ぎざるを以て、其の結果は史家の用を爲すよりも寧ろ解釋者の自負心を滿足せしむるに過ぎず。

五　既に著者の眞正の意義に逢着し得れば、積極的批判の作業は則ち茲に終結せるものなり。史家は之に由りて、記者の概念と其心中に有したる映像幷に世界觀を知ることを得べし。此の智識は甚だ重要なるものにして、或る種類の歴史的科學は之に由りて組み立てらる。即ち美術史、文學史、科學史、哲學説及ひ倫理説の歴史神話教義史、通俗的傳説、口碑、意見及ひ俗傳中に包含せる概念の如き是れなり。此等の研究は唯た外的批判と解釋的批判とを要するのみにて、之を客觀的事實に比

すれば、精練を要すること一段少きを以て、早く研究法の基礎の上に立つに至れり。

第七章　著者の信用及ひ精密に關する消極的内的批判

一　解剖と積極的批判とは、著者の心の内的作用に到達して其の思想を知るの助を爲すのみ。其の外的事實に就ては一も直接の智識を與ふるものにあらず。著者にして外的事實を觀察したりとするも、其の文書の本文は唯た彼が如何に之を描出せんと欲せしやを示すのみにして、實際彼が如何に之を見しやを敎へず。況んや其の事實が實際如何に起りたるやに於てをや。著者は虚言を吐くことあるべければ其の說く所は必ずしも其の信じたる所にあらず。又著者は誤謬を爲すことあるべければ、其の信じたる所は必ずしも實際起りたることにあらず。是れ明白のことなれども、人心自然の傾向は文書の記載する所を盡く信ぜんとす。是れ恰も著者は嘗て虚言を吐くことなく、又嘗て誤謬をなすことなしと確定すると全一なり。此の自然的輕信は其の力甚大にして、誤謬と虚妄の實例は日々の經驗に於て、無數に眼前に横れりと雖も、猶ほ其の勢力を失はず。

然れども史家が研究をなす間に文書の互に矛盾するものあれば之を疑ひ、之を檢察したる後、其の誤謬若くは虚妄なることを許さゝるべからざるに至る。故に消極的批判は明白に虚妄若くは誤謬なる記事を排斥する必要上より起りたるものなり。然れども輕信の天性の爲めに、專門の史家も内的批判は之を系統的に組織することと、外的批判に於けるが如くならず。普通史家は勿論、歷史の研究方法に關し、理論的著述をなすものすら、唯た普通の概念と漠然たる公式とを以て滿足し、外的批判に精密なる名稱あるとは著しき反對を示せり。即ち唯た著者は其の事件と略、同時代の人なりしや、又其の目擊者なりしや、又眞摯なりしや、又事情に通じたりしや又眞實を知り眞實を傳へんことを欲せしや等の問題を設け、甚しきは凡ての問題を一括して、著者は信用するに足る者なりしや等の問を設くるに過ぎず。此の淺薄なる批判も、全く批判を爲さゝるに勝れりと雖も、猶ほ科學的方法に至る中途にあるものなり。此の點に於ても先づ研究方法的疑問を出發點となし確明せられざることは疑はしきものと見做し、之を信すべき理由なければ、如何なる命

題も、之を採用すべからず。之を文書に適用すれば、即ち研究方法上の疑念となるものなり。

二　史家は先天的に凡ての記事を疑ふべし。是れ其の虚妄ならず、又誤謬ならざるを確知せざればなり。之を眞實なりと確定するは、之を科學的眞實なりと見做す所以にして、之には相當の理由なかるべからず。然れども人心自然の傾向は、不知不識の間に之を眞實となすが故に此の危險なる傾向を防ぐには、批判を以てせざるべからず。即ち史家は先づ疑を以て研究の始とすべし。或る著者の記事と科學的眞實との間には、間隔あるものにして、史家は著者の記事を採用するに就ては責任あることを須臾も忘るべからず。

此の事を覺悟して自然の傾向に勝たんとするも動もすれば著者の著述を概括して批判し、然らざるも或る文書の全體を批判して、明白に二種に分ち、一方をは善良なる著者又は正確なる文書の部となし、他方をば疑ふべき著者又は悪しき文書の部となし、其の善良なる部に入れたるものは一も二もなく之を採用せんとす。例へばスイダス(Suidas)又はアイモー(Aimo)の著は疑ふべきものとして排斥するもシューシディード(Thucydide)又はグレゴアル、ド、ツールの言としいへば、一も二もなく之を採用するが如し。

此の弊は出處精確と云へる裁判上の用語の轉用よりして、益々甚しきを致し、出處精確と云へば內容の如何を問はずして之を採用し其の記事を疑ふは臆斷に過ぐるの感をなし、非常に有力なる反證を得さる限りは之を疑ふべからざるものゝ如く思惟するに至れり。

此の弊を拯ふには研究方法に據らざるべからず。文書殊に文學的著述は、一篇より成らずして、個々獨立せる記事より成れるものなるを以て其の內の數者は、有意無意に與謬を爲せるも、他は正確なることあるべし。是れ各篇の記事は心的作用の結果にして、心的作用は或る者に對しては不正當に行はれ、他の者に對しては正當に行はれたることあるべければなり。故に史籍は之を全體より檢査するを以て足れりとすべからず。須く其の記事を一々分離して檢査せざるべからず。是れ批判は解剖なくしては行はれざる所以なり。

此の故に內的批判を二個の一般規則に歸するを得べし。

(イ) 科學的眞實は所謂口供によりして確立するものにあらず。一の命題を肯定するには、之を眞實なりと信ずべき特別の理由を要す。時としては一著者の記事が之を信ずべき理由となることあるべきも、是れ豫知し難きことなるを以て、規則としては、別々の記事を一々審査して果して之を信ずるに足るべき十分の理由を構造すべき性質のものなるや否やを見ざるべからず。

(ロ) 批判は一括して行はるべきものにあらず。故に規則として文書を其の原素に分解し其の各記事を一々審査せざるべからず。時としては一文章の内に種々の記事を含有することあり。此等は分解して一々審査せざるべからず。例へば賣買證の場合に於ては日附、場所、賣主、買主、品物、價格其他の各條件に分つが如し。實際に於ては批判と解剖とは同時に行はるゝものなり。而して困難なる言語に非る限りは解釋的解剖も解釋的批判も同時に行ふを得べし。即ち一の句を理會する毎に之を解剖し其の各要素を批判するなり。

此の如く論じ來れば論理上批判の業は數多の作業を包含するものにして之を實行すること難きを感ずべし。然れどもかくの如き感想は複雜なる作業を文字に

て説明するに方りては、徒に已むを得ざるものなり。然れども撃劍の方法を説明するに要する時間の長きに比し之を實行するに要する時間の短きが如く、又文典辭書の面倒なるに比して、實際の讀書の速なるが如く、批判も慣れざる間は之を行ふ前に、一々其の順序を考へ、徐々に之を行ふを要すれども、一たび之に慣るれば、其の作業は不知不識の間に容易に又迅速に行るべきなり。故に初學者其の方法の複雜なるに落膽せず、之を實行すれば後には實際上大に之を短縮するを得るに至らん。

三　批判の問題は次の如く陳ぶることを得。一の記事ありて史家は其の記者の心的作業に就て嘗て知る所あらず、而して其の記事の價値の如何は、一に心的作業の如何に依るに方りて此の作業の正しく爲し遂げられしや否を確定することは是なり。此の問題を一見しても、其の的確に決解し難きを見るべし。史家は之を解くに要する第一の論據即ち記者の心的作業に就て知る所なきを以て、批判は畢竟間接にして準備的決解以上に達するものにあらず最後の精線を要する所の論據を供給するに過ぎず。

人は天性として記事の價値を定むるに其の外形の如何を以てし、一見して記者の眞摯なるや否や記事の正確なるや否やを知らんと欲し、其の記事中より眞摯の口調と、眞實の印象とを求めんとすれども是れ一の迷ひにして著者の信頼すべきと、其の記事の正確なるとをトすべき外形上の標準とてはあらず。眞摯の口調と云ふも、畢竟するに記者が自ら信ずること厚き風を示せるものにして、演説家、俳優其の他虚言に慣れたるものは明白なる虚妄に眞摯の調を帶びしむることと、正直者の自ら眞實と認むる所のものに於けるよりも甚からむ。故に確言を以て記者自ら其の事を信ぜりと思ふべからず。又記事の詳密なるを以て其の事實の正確を保すべからず。是れ其の記者の眞摯なりし場合には、想像の豐富なるを示し、否らざるときは厚顔なるを示すに過ぎざるなり。詳密の記事を見るもの、往々「此の如きは到底架空の記事に非ず」と云ひて之を信ず。然り、架空には非るべきも、一人の事跡が他人に移り、一國の話柄が他國に移り、一時代の話柄が他時代に移る場合少からざるを以て眞覺外形を一見して、批判の煩を免れ得べき外形上の特徴はあらざるなり。

一記事の價値は全く記者が一定の心的作業を行ひたる當時の境遇の如何に依るものなるを以て、批判は此等の境遇を審査するの外に他の方法なし。然れども其の境遇を盡く復原するに及はず。記者は果して此等の作業を正當に行ひしや否を知れば足れり。此の問題は二個の方面より之を解くべし。

(イ) 著者に就ての批判的研究の結果として文書製作の一般の事情は、頗る明白になれり。此等の事情が記者の作業に影響したるやも知るべからざるを以て、史家は先づ其の記者及び文書製作に關して有する所の材料を研究し殊に著者の習慣、情操及び其の身分を探り又著者が記述したる時の境遇を尋ねて其の記事を不正當ならしめ又は正確ならしめたる理由を求めざるべからず。之が爲めには豫め不正當の原因となり得べき事項を列記して、一組の問題となし置き、之を其の文書製作の一般の事情に適用すべし。然れども此の如くにして得る結果は、假令其の文書製作の事情明白なる場合にも、猶ほ一般の指示に過ぎざるものにして、批判の目的には不十分なるを免れず。何となれば批判は常に個々の記事に對して爲さるべきものなればなり。

(ロ)個々の記事の批判には稍〻奇なるが如きも文書製作の普遍の事情を研究するの一方あるのみ。即ち著者の一般研究によりて知り難きことは人心の必然的徑路を研究して之を補ふの外なし。此の必然的徑路は普遍のものなるを以て亦特別の場合にも現るべきなり。即ち通常の人の習慣より推して其の記事を不正確にすべき事情の下に其の文書は製作せられたるや否を審査せざるべからず。故に批判は畢竟二種の問題を設けて之に答ふることに歸着す。即ち一は文書製作に關する一般の事情を明にすべきものにして、之に由りて其の文書の取捨に關する一般の理由を得べきもの他は各記事の特別の事情を明にして、之に由りて、其の記事の取捨に關する特別の理由を得べきものなり。

四、批判の順序に二あり。是れ文書製作の二の順序に相當するものなり。而して解釋的批判によりて著者の言はんと欲せし所の如何は、既に既明せらるべきを以て、剩す所は、(一)著者の信せし所果して如何(著者は必しも誠實ならざるべし)(二)其の眞に知りたる所果して如何(著者は誤解せることもあるべし)の二點に在り。故に史家は記者の誠實に關する批判的審査によりて其の記者は果して虚妄を記せしや否を決定し其の精確に關する批判的審査によりて其の果して誤解せる所なかりしや否を確定すべし。

然れども實際に於ては、著者の信ぜし所の如何は、其の性格を特別に研究する時の外、之を知るを要すると稀なり。史家は著者其の者に興味を有するに非ず、唯た之を媒介として、外的事實を知らんと欲するのみ。批判の目的は、記者が果して正當に報告せしや否を知るに在り。既に其の記事の不精確なるを知れば、故意に出ると、否、とは史家の問ふ所にあらず。之を穿鑿すれば、徒らに複雜を加へんのみ。故に著者の誠實如何の問題を別に設くることなく、著者に誤謬を傳ふるに至らしめし原因中に、之を含めて研究するを以て足れりとすれども、今明白を期する爲め、二部に分ちて之を論すべし。

第一部の問題は、記事の誠實を疑ふべき理由の有無を研究するものにして、先づ文書の一般の組立又は特別の記事に影響すべき事情の如何なるものなるやを知らざるべからず。是れ經驗上より知るべきものにして、大小を問はず、事實を曲ぐるは畢竟著者に於て、讀者に或る特別の感覺を與へんが爲めなり。故に今論ずる所

は通常著者をして、事實を曲ぐるに至らしむる動機を與記するに時者するものにして、最も重なる場合は次の如し。

(イ)、著者が自己の爲めに何等か實際上の利益を得んとすることあり。之が爲めに讀者をして或る行爲を信ぜしめ、又は之を信ぜざらしめんが爲めに、知りつゝ誤れる報告を與ふ。是れ多數の官文書に於て見る所なり。又實際上の目的を以て製作せざるも、利害關係ある文書には往々にして虚妄なるの弊あり。記事の疑ふべきものを決定せんには、先づ記者が全體の記事を作るの大目的は如何なりしやを見、次には其の書を組成せる各記事を作りし特別の目的は如何なりしやを見るべし。之に就て注意すべき二個の傾向あり。(一)記者に虚言を告げて如何なる利益を得しや、換言すれば己れ記者の位置に在らば、虚言を吐きて如何なる利を得べかりしやを問ふことと勿れ。之に代ふるに記者は虚妄に由りて如何なる利益を得べしと考へたりしやとの問を起し記者の嗜好と理想とによりて、其の答を得ざるべからず。(二)著者の個人的利益にのみ着眼することなく著者の屬したる或る團體の利害をも考究せざるべからず。著者は其の團體の利害によりて、事實を曲げたるやも知れず。是れ批判の困難なる所以の一なり。著者は一人にして、同時に種々の團體、例へば家族、州郡、宗派、黨派、社會の階級等の一員にして、此等團體の利害は往々にして衝突するものなり。故に史家は記者の最も親密の關係を有して、之が爲めに働きたる團體を發見せざるべからず。

(ロ)、記者が事實を枉げて記するの已むを得ざる場合あり。是れ其の規則、慣例に從て文書を製作するに方り常に起る所なり。實際は多少規則、慣例と相悖れる時も報告には即ち常の如しと記す。例へば常會の記事の如き時間、場處、出席者の數及ひ姓名の如き報告の實際と合せざるは常に見る所なり。此の如き差異は吾人の常に見る所なるも、過去の事實を論ずるに方りては則ち之を看過するを常とす。即ち文書の出處確實なりと云へば、直に之を眞摯の記事となす。出處精確なるものは、根本の事實に誤なきも、枝葉の點は則ち正確を保すべからず。例へば或る人が報告に調印したりと云へば、其の人の之に同意したるを見るべしと雖も、唯た其の人が現に調印の場にありたりとのみ文書に記すとも、之を保すべからざるが如し。

(六)　記者が人の團體(國民、徒黨、宗徒、州市、家族)若くは教理制度の集合(宗教、哲學の學派、政治論)に同情を有し、若くは之を憎惡するが爲めに、事實を枉げて我黨を褒揚し、反對黨を誹毀す。是れ著者の記事を動かす普通の偏頗心にして、古來より之を認め、史家が愛憎の念を去りて、公平を保つは、常に自ら稱する所なり。

(二)　記者は自己若くは團體の虛榮の爲めに動かされ、自己若くは自己の團體を發揚せんが爲めに事實を曲筆す。即ち讀者をして自己の尊敬すべきを思はしめんが爲めに便なりと思惟する記事を作るが故に、史家は須く記者が虛榮心に騙られたることなきやを研究せざるべからず。然れども史家は記者の虛榮心を以て自己若くは自己と同時代の者の虛榮心と全く同一なりと思ふべからず。人々各欲する所の虛榮を異にするを以て今研究する記者の特別の虛榮心は何なりしやを見ざるべからず。時としては今日吾人が不名譽となす所の行爲を自己若くは朋友に歸せんが爲めに事實を曲げしこともあるべし。佛國のシャール第九世が自らサン、ベルテレミーの虐殺を起せりと詐りて、之を誇りたるが如き其の一例なり。然れども最も普通なる一種の虛榮心は、己れを高位にありて勢力を振ふものゝ如

く示さんと欲するの心あるを以て、記者若くは其の團體か世間に高位置を占めたりとなす記事は、常に注意して之を用ひざるべからず。

(*)　記者は公衆を喜ばしめ若くは其の怒を避くることあり。即ち記者は公衆の道德流行を窺ひて、思想感情を表白し、之を當時の思想感情に適合せしむ。是れ儀式、官府の定例、作法に規定せる辭令、豫定せる演說等に於て常に見る所にして、此等の種類に屬する記事は甚だ疑ふべく從て、之より事實を得んこと難し。今日吾人は日常見る所の此の種の記事を信ずるに足らざるを熟知すと雖も、古代の材料に對しては、往々之を忘れて、信賴せんとす。殘存せる文書の稀少なる時代に屬するものに對して殊に然りとなす。今日書翰の末尾に附する敬語を以て眞に敬意を表するものと思ふものなしと雖も、中世の或る僧官が選擧の日其の不肖任に堪えざるを以て辭したるは、人道に厚きの證なりとは久しく人の思惟せし所なりき。焉んぞ知らん、此の辭退は當時の慣例たる一儀式に過ぎざりしなり。此等の慣例の語を見定むるには二樣の研究を要す。一には記者の研究にして、記者が相手としたる公衆は如何なるものなりしやを發見すべし。何となれば同一國にも種々

の公衆ありて各自特有の觀法あるを常とすればなり。二には公衆の研究にして、其の道德及ひ習慣を決定すべし。

（ヘ）記者は文學的修飾を以て公衆を喜ばしめんとすることあり。即ち自己の審美的觀念に從ひ、事實を修飾して、眞相を失はしむ。故に史家は記者若くは其の時代の理想の如何を探り、其の理想の爲めに眞相を失へる部分に由て誤られざらんことを要す。然れども特別の研究を爲さゝるも、文學的毀損の普通の種類は之を知るを得べし。即ち修辭の爲めに事實を毀損するは、人の態度、行爲、情操、殊に其の言語を高貴ならしむるより起る。是れ初めて作文を習ふ兒童に見る所の自然の傾向にして、宇開時代の記者にも亦之あり。殊に中世の年代記に多く見る所の缺點とす。敘事的の毀損は、其の記事を詳密にして面白からしめ、關係者の述べたる言語、又は人の員數其の姓名等を加へて、記事を裝飾するに在り。記事の精密なる者は、動もすれば、さも事實らしく思はしむるものなるを以て、殊に注意せざるべからず。劇的の毀損は、實際分離せる事實を、同一の時、同一の人、若くは同一の群に集中して、劇的興味を起さしむるに在り。此の種類の記事は所謂「眞實」よりも更に眞實」なるものにして、諸種の毀損中最も危險なるものなり。文飾の弊ある史家、エロドート、タシート、及ひ文運復活時代の伊太利史家の如き、此の方法を用ひたり。抒情的の毀損は、記者及ひ其の朋友の感情を過大に表彰するものにして、人の心理を研究するに方り最も注意せざるべからず。

人心自然の傾向は、文學的形式の整頓せるものを、容易に信ずるに在り。批判は此の傾向と戰ひ、文學的に觀察して面白ければ面白き程、之を疑へよと云へる一見奇なるが如き規則を適用せしむ。或る記事ありて、生氣躍々として甚た劇的に、人物に高貴の態度あり、强烈なる感情を示せるものあらば、史家は之を疑はざるべからず。

以上述ぶる所の第一種の諸問題を適用せば、虛妄の恐ある記事は之を見出すを得べし。

五、第二種の問題は記事の精確を疑ふべき理由ありや否を確定せんが爲めに用ふるものなり。即ち記者は果して人の通常誤謬をなすべき位置にありしや否を見んとす。之が爲めには、著者の誠實の研究の場合と等しく一般の文書に關す

る事情と、其の中にある各記事に關する事情とを併せて研究せんことを要す。各種の科學の實際示すが如く、事實を科學的に知得する方法は唯た觀察の一法あるのみ。故に各記事は直接若くは間接に、觀察に基かざるべからず。

觀察は正しく爲されざるべからず。

誤謬の疑あるものを發見せんが爲めに設くる問題は、畢竟經驗上最も人の誤謬に陷る場合を擧ぐるものなり。

(イ) 記者は事實を觀察すべき位置に在り、又自ら實際を觀察したりと思へるも、無意識の內部の勢力例へば精神錯亂、幻影、又は普通の偏見等の爲めに妨げられて、之を爲す能はざりし場合あり。實際此等の原因の何れが働きたるやを決定するは、無用にして又不可能の事に屬す。唯た記者が觀察を誤るべき傾向ありしや否を確むれば足れり。或る特別の記事の場合に於ては精神錯亂の結果なるや將た幻影の結果なるやを認定するは殆んと不可能にして、他の史料より得たる智識より若くは比較上より、記者が此の種類の誤謬に陷る一般の傾向あるを知るを得れば、是れ最上の結果なりとせさる可からす。

偏見に出づる記事は、之を判別すること稍容易なり。即ち著者の傳記又は其の著述によりて、其の人を支配したる偏見の痕迹を見、各記事は果して、著者が或る種類の人又は或る種類の事實に對する平素の觀念より出でたるものに非るかを究むべし。此の研究は虛言の動機の研究と合するものあり。即ち故意の虛僞の如く、利害心、虛榮心、愛憎等が事實を曲筆せしむるに至る。故に偏見の研究にも、亦著者の誠實如何の研究に用ひたると全一の問題を用ふべし。然れども其の他に尙ほ一問題あり。他なし、著者の陳述が質問に答へたるものなる爲め無意識に事實を曲ぐるに至りしことなきや是なり。凡そ應答は、故意に質問者を喜ばしめんとする場合ならざるも、其の質問の如何によりて變ずるものなり。少くも其の形式は然るべきが故に、質問に對する陳述には、特別の批判を適用し、其の質問は如何なりしや、其の質問に由りて、應答者の胸中に浮びたる理想は、如何なりしやを知るを要す。

(ロ) 著者は觀察に適せざる位置に在りしことあり。凡そ觀察者は、正しく見るを得べき位置に立ち、利害の關係を絕ち、特別の結果を得るを望まず、公平の觀察を

爲し、立地に其の觀察せし所を、精密なる記載式を以て筆錄し、又其の觀察の方法を精密に示さゝるべからず。此等の條件は他の科學に於ては、嚴重に守らるゝも、史書に於ては、尚て完全に行はれたることなし。

されば文書に不精確を來すべき機會ありしや否を問ふを要せず。其の機會は常に之あり。是れ文書と觀察の異る所以なり。唯た觀察の事情中、明なる誤謬の原因あるや否を見るべし。例へば一部下が長官の秘密會議の事を記する場合の如く、善く見若くは聞くこと能はざりしことなきや、又は戰場に於けるが如く匆忙の爲めに、注意を奪はれたることなきや、又は興味を有せざる事なるが故に不注意にはあらざりしや、又は事實を理會するに必要なる特別の經驗或は一般智識を闕きしことはなきや、又は已れの印象の解剖を誤り、若くは種々の事件を混同せしことはなきや等を研究するを要す。殊に記者が其の見聞せしことを書き下したるは何時なりやを問ふを要す。此れ甚だ重要の點にして、精密なる觀察といへば、其の爲されたる後直ちに筆錄したるものならざるべからず。是れ確立せる諸科學に於て常に爲す所にして、後日に至りて筆錄したる印象は他の想起と混同することと常に之あり。事件の起りしより數年の後に書きたる覺書の爲めに、歷史に無數の誤謬を來せり。故に覺書は、同時代の口供の形ありとも受け次ぎの史料として、特別の疑念を以て之を取扱ふを要す。

(八) 著者は事實を觀察するを得るも、自ら之を爲すの勞を吝むことあり。即ち忌慢より推測の記事を爲し甚しきは想像架空の記事をなし、其の結果虛妄に陷るもの甚だ多し。著者が上官の問に答へ又は儀式、公務等の記事を作る場合の如く、自から興味を有せざることを記し、又餘白を塡むる爲めに已むを得ず、事實を集めたる場合に於ては、最も注意を要す。實際出席せざる者の集會の記事を作るの例甚だ多し。中世の年代記の如き亦此の種類の例を見る。故に一定の形式に、餘りに善く適合せる記事は凡て之を疑ふを原則とすべし。

(二) 或る種類の事實は、性質上一人の觀察によりて知るべからざるものあり。例へば團體に屬する事又は廣大なる地域に涉り、或は長歲月に亘りたることにして、全軍共通の行動又は全民族全時代共通の習慣又は種々の項目を合して得べき統計若くは個人、團躰、習慣、事件の性質に關する概括的判斷等は綜合若くは推測よ

り得たる命題にして記者は唯た間接に之に到達せるものなり。即ち記者は觀察によりて得たる材料に基き、抽象、概括、推理、計算等の論理的方法によりて之を精練したるものなり。此の場合に於ては(一)著者は果して精練すべき十分の材料を有せしや。(二)著者は其の有したる材料を用ゆるに方りて精密なりしや否の二問題起るべし。

著者の細密なるや否は其の人の著述を檢覈して著者は果して抽象、推理、概括の力ありしや、著者の常に爲したる誤謬は如何なりしやを見て組ぼ察することを得。著者の用ゐたる材料の價値を決するには、各記事を別々に批判し、著者の觀察した る時の事情を想像し、著者は果して其の記事に必要なる材料を得たりしやを見ざるべからず。是れ統計の大合計又は一般人民の習慣を叙述せるもの等を研究するに於て關くべからざる注意とす。他方し、著者は推算によりて統計を與ふるともわるべく(軍勢の數又は死者の數等を暗するには常に有ることなり)、又は精確ならざる材料を合して統計せるもあるべく、又著者の知れる一小部分の事を全國、全民族又は全時代のことゝなすものもあるべければなり。

六　以上論ずる所の著者の信用及び精確に關する二種の問題は凡て著者が自ら事實を目擊せる場合に關するものなり。確立せる科學に於ては、一切此の種の材料のみを採用するも、史學に於ては、直接の觀察の缺乏甚しきを以て、已むを得ず他の科學に於ては排棄する材料をも用ゐざるべからず。試みに或る史書を取りて之を見よ。其史書が果して其記する事件と同時代の者なりとするも、著者の目擊せし事實は、書中記する所の事實中の一小部分に過ぎざらん。殆んど一切の史書に於て、記事の多數は他人の記事を再現せるものに過ぎず。例へば大將が自ら指揮せし戰爭の事を記するも、自己の觀察を記するものに非ずして、將校の報告等に據るを以て、其の記事の大部分は受け次ぎの史料たるを免れず。

受け次ぎの史料の批判には著者が作業せし時の事情を檢覈するを以て足れりとせず。此の場合に於ては、著者(甲)は一の傳達者に過ぎずして、眞の著者は、彼に智識を供給せし人(乙)なり。故に批判家は(乙)が果して正當に觀察し、報告したるやを見るべし。若し(乙)が更に(丙)の記事に遡りたるときは(丙)に遡りて之を究め、(普通はかゝる場合多し)、遂に最初に其の事を記したる記者に到達して其の果して精確なる

觀察者なりしやを究むべし。

論理上かゝる穿鑿は想像し難きにあらず。亞剌比亞の古傳を古るく集めたるものには一々其の保證者の名を記す。然れども實際出處を搜索して、事實觀察者に到達するは稀有にして、大抵觀察者は匿名なり。然れば匿名の記事を批判するの法は如何。又匿名ならざるも、出處の不明なる記事を批判するの法は如何。

批判は記者が記述せし當時の事情を知りて行はるべきものなるを以て、匿名の場合には殆んど手懸りなし。唯た其の文書の一般情態を檢覈するに止まる。若し文書中の一切の記事が盡く全一の偏見感情を有する人の手に成れるの嫌あらば是れ記者の憑據したる傳說に偏頗あるを疑するものとす。例へばエロドートの用ゐたる傳說がアテン流の偏見とデルフ風の偏見とを帶ぶるが如し。此の類の傳說に於ては、關係者の利害、感榮若くは偏見の爲めに事實を曲げしことなきやを究めざるべからず。或は全く記者を惑し措き、觀察の爲されたる時代に其の國に於て、正當の觀察を爲すに便利或は不便利なる事情ありしやを見るべし。例へばエロドート時代の希臘人が如何なる手段によりてスシーヂー人に關する智識を得しや、又之に對して如何なる偏見を抱きしやを見るが如し。

此の概括的研究は所謂口碑を傳達する上に於て甚た有用なり。受け次ぎの文書は其の原形を保存するを必要とす。批判家は直接の觀察が人より人に傳はる間に其の眞相を失ひしことなきや否を見るを要す。特に其の口碑は筆傳なりしや、口傳なりしやを知らんことを要す。一たび筆傳となれば口碑は確定して忠實に傳達するも、口傳の間は聽者心中の印象が他の印象と混同し、一歩々々其の眞を失ふに至る。而して其の變化の原因は區々一ならざるを以て、之を測定し若くは之を訂正せんこと難し。

口傳には不斷の變化を受くべきを以て史學に於ても他の科學と等しく、唯た筆傳によるべきも、口傳によりて記したる著者が其の口傳によりたることを明言するは稀なるを以て、唯た間接に筆傳によらざりしことを確むるの外なし。即ち其の時代及ひ其の民族間に於て、此の種類の事實を筆傳するの風習ありしやの問題を記し、其の風習なきを知らば、唯た口傳によりたるものと斷ずべし。

口傳中顯著なるものは、即ち所謂傳說(レヒエンド)にして、野蠻の社會若くは農夫、兵卒等無學社

會に於けるが如く、傳達の方法が單に口頭に限る場合に起る。此の場合に於ては、一切の事實が皆口頭によるものにして、各國共に上古に於て傳說の時代あり。既に文明の時代に及びても、人の想像を逞うせしむべき事件に就ては猶ほ傳說存す。然れども其の範圍は漸次縮少し今日に於ては個人の言行又は事件の枝葉の如く其の性質の秘密なる爲め又は之を記錄するの勞を取る人なき爲め筆錄せられざる事實に限れり。即ち文明社會の傳說と稱する逸事譚（アネクドート）の如き是なり。是れ混合せる種々の追想、誤れる解釋、種々の想像を或る特別の人又は事件に歸するより起るものなり。傳說と逸事譚とは畢竟俗傳に屬すべきものにして、歷史に屬すべきものにあらず。故に傳說中より誤謬を淘汰して、歷史事實を拾取せんとすべからず。固より傳說中にも歷史事實ありと雖も、之を想像架空の說と別つべき手段方法なきを奈何せむ。ニーブールの言に曰く『傳說は見るべからざる物躰が知るべからざる反射の規則によりて生じたる蜃氣樓なり』と。

傳說中より不可能の事、奇蹟的のと不合理矛盾の條を排斥し、合理の事のみを採用するは、最も粗暴の方法と謂ふべし。是れ第十八世紀に於ける新教派の合理派學者（ラショナリスト）が聖書研究の方法にして之に從ふときは、妖怪譚中の人物をも歷史的人物となすに至るべし。種々の傳說を比較して其の中より共通の歷史的基礎を求むるの方法は稍、緻精に似たるも、其の危險なるは前者と異るとなし。如何なる方法を以てするも信ずべき智識を得ることの難きは、クロートの明言する所なり。故に史家は斷然傳說を以て想像の產物となすべし、唯た之れより民族の認識を求むるは可なるも、之れより歷史的事實を求むべからず。故に傳說に基く記事は一切排斥するを規則とすべし。啻に傳說の形を有するものに限らず、傳說を材料とせる記事も亦然り。例へばスーシードの開卷第一章の如き是なり。

肇傳の場合に於ては、唯た著者が其の引用書を變化したるや否を研究すれば足れり。若し其の引用書存するときは、著者に就ての批判的研究の條に述べたる本文比較によりて、此の目的を遂すべきも、引用書佚びたるときは內的批判をなさゝるべからず。先づ第一に、著者は精確なる報告を有せしやを見るべし。若し之を有せざれば著者の陳述は價値なきものとす。次には著者は引用書を變更する習慣の人なりしや、若し然らば如何なる風に變化せしやの概括的疑問を起すべし。受

け次ぎの記事に於ては、其の形によりて、原文其の儘に寫しゝや、又は之れを整頓せしやを見るべし。一篇の中にて文脉の他と異る部分あらば、これ其の古文の斷片たるを推すべし。

七　以上諸種の穿鑿を遂ぐるも、各事實を自ら觀察したるもの、又たは其の觀察を記錄したるものに到達することは稀にして、何人が如何に觀察したるや、又何時如何に筆錄されしや知れ難き事實多し。他の科學に於ては、かゝる曖昧の事實は一切排斥すと雖も歷史に於てはかゝる事實も之を利用することを得。事實といへる概念は畢竟外的實在に關する肯定的判斷に外ならず。而してかゝる判斷に到達する作業は、研究する所の實在の性質と實在を確めんとする精密の度とに從ひ難易の度を異にし、又誤謬に陷るの恐れに多少はあり、然れども歷史は他の科學に比して其の論ずる所の事項疎大なり。例へは或る習慣、或る人、或る團躰若くは民族の存在の如き、其の場處は廣く、其の時は長きに渉れるものなるを以て、他の科學の如く精密の測定を要せず。從て觀察の條件も他の科學の如く嚴密を要せず。故に報告の不完全なる點は、歷史が容易に得らるべき報告を以て滿足すべき自然の性質を以て、之を償ふを得べし。

史籍の記する所は、固より虛妄又は誤謬の恐ある不確實の事實に過ぎざれども、性質上之を詐り、又は誤り難き事實あり。故に批判家は豫め問題を設け置きて變化の危險なく、正當と認むべき事實を甄別する爲めに之を適用すべし。其の問題は次の如し。

(甲)　事實の性質上、虛僞の憂少なきものあり。人の虛僞を記するは、一種の印象を與へて、自ら利する所あらんとするなり。故に虛僞を語るも、何等の利する所なくんば之を爲さゞるべし。記者が此の如き境遇にありしや否を決するには、次の諸點を研究すべし。

(イ)　記者が或る目的を有して作れる記事の中、明に其の目的と背馳せる記事あるか、詳言すれば、記者若くは其の同類の利益、虛榮、情操、文學的趣味又は彼等が勉めて逆らはざらんと欲せし意見と衝突せる記事あるかを見るべし。若し之あれば是れ頗る信を置くに足るべし。然れども此の標準を用ふるに、注意すべき二點あり。(一)實は記者が得意に誇言せることを、誤りて懺悔なりとして、採用すべからず。

例へば佛王シャール九世が、自らサン、バルテレメー虐殺の張本人と誇りしが如し。

(二)同類を譏れる記事なりとも一も二もなく之を採用すべからず。蓋し記者の利益及ひ名譽に關する意見は吾曹の推測する所とは、痛く異れることもあるべけれはなり。即ち同胞にても、己の黨派に屬せざるものは譏ることあるが如し。故に前の標準を適用するは、著者の目的とせし結果及び著者が主として利益を圖りたる團躰の明かに知らるゝ場合に限るべし。

(ロ)事實甚だ明白にして、之を曲げて公衆を欺かんとするも、直に發覺する恐ありしや否を見るべし。檢査され易き事實、近き時又は近き處に起りし事實、廣く且つ久きに渉れる事實等は、之を壓ゆるも發覺され易き故、著者の虛僞を記する憂少し。特に公衆が之を檢査するを欲せし場合に於て然りとす。然れども文明人又は克己力あるものは、虛僞の發覺を恐るゝ念強きも、野蠻人又は感情的の人は、之を恐るゝ切ならざるの差あるを以て、此の標準は、著者冷靜にして、讀者といふものを念頭に置きしことの明なる場合に限り適用すべし。

(ハ)記されたる事實が、記者と無關係にして、之を曲筆すべき筈なきや否を見よ。著者が偶然記する所の普通の事實、習慣、制度、物品、人物等の如きもの即ち是なり。僞書に於ても、記者は全然架空の事を記する能はず、記者は必ず其の事實を包むには事實の骨子を以てせざるべからず。此の骨子たる事實は當時には知れ渡りたる事にて、著者は之を以て人を欺くの意なきものなるか故に、史家は之を信用して可なり。

(乙)事實の種類が、容易に誤謬を來さしめざるものあり。即ち事實の大なる爲め、之を誤ること稀なるものなり。其の然るを確めんには次の諸問を起すべし。

(一)其の事實は長歲月に渉りて屢、觀察せられしや。例へは或る紀念碑、或る人、或る習慣、又は長歲月に渉れる事件の如き是なり。(二)廣き地域に亘りて、數多の人に觀察せられしや。例へは戰爭、戰役、及ひ民族全躰に共通せる習慣の如き是なり。(三)淺薄なる觀察を以て直に發見せらるべき一般のことなるや。例へは或る人、或る都會、或る人民、或る習慣の存在の如き是なり。史的智識の大部分は、此の廣漠たる事實より成れり。

(丙) 眞實に非れば、記さるゝ筈なき事項あり。著者が意外に見たることを明言せる事は、概ね事實なり。是れ著者が之を目擊したるにより、已むを得ず、かくの如く記すればなり。又記者に不似合の事項は、屢、眞實なることあり。之を論むる標準は、其の記事が著者の意見と衝突せるや、彼の知らざる現象なるや、彼に理會し難き行爲、又は習慣なりや、又彼の智力を超越せる名言なるや(福音書に傳はりし基督の言、法廷に於けるジャン、ダークの答辯の如き)を見るに在り。然れども史家は自己の標準によりて、著者の思想を判斷すべからず。古昔は妖怪、奇蹟、魔術等の存在を信じたりしを以て、此等の場合には前の標準は、之を適用すべからず。

八 以上述べ來りし種々の作業を、實地に適用する順序は次の如し。

解釋に異論あるべき本文に於ては、之より智識を得ることを差し措きて、(一)先づ其の意義を確定し(二)次に其の書中にある事實の批判的研究を爲すべし。意味明瞭なる文書に於ては、讀み且つ批判し疑はしき諸節は、個々別々に研究を爲すべし。批判は先づ文書の製作に影響したる事情を發見する目的を以て、文書及ひ其の記者に關する一般の智識を集むるを第一とす。即ち文書製作の時代、場所、目的、事情、記者の社會上の地位、國、黨派、宗派、家族、利害、感情、偏見、慣用語、記述の方法、知得の手段、教育、技倆、心の缺點、事實の性質、其の傳來の模樣等是なり。此等は著者及ひ引用書に關する批判的研究によりて知るを得べし。之に一般批判的問題を適用し、其の結果を結合して、之を記憶に付し置くべし。

此の準備を了れば、次に文書其の物の研究に着手し、讀みながら之を解剖し、著者の結合を盡く分解し、其の一切の文飾を剝離して事實に到達し、之を簡明精確の言語に表出すべし。かくの如くすれば則ち技術的外形に欺かるゝことなく、著者の思想に屈服するの憂なかるべし。かくの如く解剖するときは、文書は事實に關する著者の認識と陳述との二つに分解すべし。

個々の陳述に對しては、之が爲めに設けたる特別の問題を適用して、其の虛僞若くは誤謬らしきや、將た誠實精確の望多きやを見るべし。之に用ふる問題は終始念頭に在るを要す。此の作業は當初甚だ煩勞なるも、文書の各頁に一百回以上も適用せらるべき故、終には無意識に行はるゝに至らん。即ち本文を讀むと同時に、其の信ずべきや否の理由、胸中に浮み結合して一個の印象となるべし。

是に至れば解剖と批判的審査とは、本能(インスチンク)によりて行はるゝに至り、所謂「批判的官能」を生ず。是れ實は批判の無意識習慣に外ならざるなり。

第八章　特別の事實の決定

批判的解剖の結果として、數個の認識と陳述とを得べく、之と共に記述せる事實の精密なるや否やの見當を得べし。次には此等の材料よりして、科學的智識の基礎と爲すべき個々の史的事實を引き出すの法を知るを要す。由來認識と陳述とは、二種の異れる結果なるを以て、之を取扱ふ方法も亦異らざるを得ず。

一　一切の認識は其の文章に彰れたると、繪畫彫刻等に彰れたるとを問はず、認識其の物が既に一個の確定不動の事實なり。其の表彰せられたるものは、一たび或る人の心に現れたるものたること疑なし。他書を其の儘に引用したる著者の心裡には現れざることあるべきも、其の引用せられたる原書の著者の心裡には現れたることと疑なし。故に認識存在は唯た一個の實例によりても之れを知るを得べく、唯た一個の文書を以ても之を證することを得べし。故に技術史、科學史、教理史等の基礎を成すべき一切の事實を引き出さん爲めには、解剖と、解釋とにて足れり。各認識の時代、國、記者等を決定して、此等の事實を適當の位置に置くことは、これ外的批判の任とする所なり。又認識の存在期、其の地理的分布、其の起原、其の系統等を研究するは綜合作業に屬す。內的批判は此等の點とは全く無關係にして唯た史料より事實を取り出せば足れり。

認識なるものは畢竟心理上に於ける事實に外ならず。然れども想像は其の對象を造出するものに非ずして、必ず其の原素を實際に取るものなり。即ち想像的敘述は、記者が實驗觀察したる、實際の事實より構成せるものなり。故に智識の要素即ち想像的敘述の原料は、之を搜索して、分離することを得べし。故に史料の匱少なる時代若くは事實、――例へば太古又は私的生活の習慣――の研究に於ては敘事詩、小說又は戲曲等の文學的著述も之を利用すべし。此の方法は正當なりと雖も或る範圍內に止めて適用すべきものにして世人は往々之を忘却せり。即ち其の制限次の如し。

(イ)　此の法は心理に屬する社會的事實に適用すべからず。即ち或る社會の道

徳上又は技藝上の標準の如き是なり。或る史料に現はるゝ道徳的又は審美的認識は、著作者の個人の標準を示すに過ぎず。故に是によりて、其の時代の道徳又は審美的趣味を判斷すること能はざるなり。之を爲すには、少くとも其の時代に屬する數著者の認識を比較せざるべからざるなり。

(ロ) 有形的事實又は物品の叙述と雖も著者の想像より出づる恐あり。唯た其の原素に至りては實際存在せしを知るべし。即ち吾人が確言し得るは、それ以上に分割すべからざる原素即ち形、材料、色、數等が別々に存在せりといふに留まる。例へば詩人が黄金の扉又は銀の楯などいふとも、吾人は黄金の扉、又は銀の楯が實際に存在せりと推測すること能はず。唯た扉、楯、金、銀等が別々に存在せしことを推測するに過ぎず。故に著者が必然實驗上より取りたること疑なき原素即ち物品、其の目的及ひ普通の作用まで解剖を行はざるべからず。

(ハ) 或る物品又は作用の認識は、其の物品又は作用の存在せしことを證すれども、其の果して普通なりしを證するものにあらず。其の物品又は作用は、或は特別なることもあるべく、又は甚だ狹小の範圍に限りたるやも知れず。殊に詩人、小說家等は稀有の事例を以に其のモデルとなすことを好むものなり。

(二) 此の方法によりて生ずる事實は、其の時と處とを定め難し。何となれば、著者は、外國又は昔時の事實を採りたるやも知れざればなり。

以上の制限を概括すれば次の如し。若し或る文學上の著述より、其の著者の生存せし社會の狀態を推測するに當りては先づ同樣の推測を近世の小說に施し、近世の風俗を推測せば、其の價値如何ならむかとの問を起せ。

認識よりして發見する事實と共に、著者が殆ど何の考慮なく記したる、明白にして簡單なる性質を有する事實あり。固より論理的に言へば、かゝる事實とても、之を確實なりとは斷すべからず。是れ明白簡單なる事實に就ても、誤謬を爲すもの往往之あり、又枝葉の事項に就ても、虚言を吐くものもあればなり。然れどもかゝる場合は甚だ稀なるものにして、此の種類の事實ならば、唯一の史料によりて、其の確實なるを許すも、甚しき危險なし。實際史家が不明なる時代を論ずるに當りては多く此の法に依る。例へばセザール及タシートの唯一の本文によりて、ゴール人及ひ日耳曼人の制度を叙述するか如し。甚だ發見され易き事實は、叙述家之を曲

ぐる能はざるは、猶ほ詩人が實在の事を曲ぐる能はざるが如し。

二　以上認識に就て論ぜり。之に反して陳述は或る文書中客觀的事實に關する陳述あるも、是れ決して其の事實たるを定むるに十分ならず。是れ陳述の虚妄又は誤謬に陷る機會は甚だ多くして、其の陳述の生じたる事情は甚だ明ならず、從て此等の機會が一も其の陳述を動かしたることなきは保證し難ければなり。批判的審査は一も確實なる解決を與ふるものにあらず。批判的審査は誤謬を受くる爲めには闕く可らざるも吾人をして眞實に到達せしむるには不十分なり。批判は一の事實をも證明するの力なし。唯た「蓋し然らむ」といふに過ぎず。其の目的及ひ結果は文書を個々の陳述に分解し、各陳述の價値を推定し、價値なき陳述、疑はしき陳述(疑に强きと弱きとあり)、眞實らしき(若くは甚だ眞實らしき)陳述或は價値不明なる陳述等となすに在り。

批判の結果種々あれども、其の中確定を與ふるもの唯た一あり。即ち其の記する所の事實に就て何等の知る所なかりし著者の陳述は全然無效なること是なり。此等は僞文書と同樣に排斥すべきものなり。然れども批判は此の點に於ては幻影的史料を破壞するのみにして、之に代るべき確實なる史料を供給するものにあらず。故に批判より生ずる確實なる結果は皆消極的のものにして、其の積極的なるものは、多少疑あるを免れず。即ち畢竟『これ〳〵の陳述は眞實たるべき機會あり』とか又『僞虚たるべき機會あり』とかいふに過ぎざるを以て、疑はれたる陳述が眞實となることもあるべく、眞實らしく思はれし陳述が、意外に虚妄となることもあらむ。此の實例は常にあることにて、史家は當初爲されたる觀察が惡しく爲されしや、又は善く爲されしやを知る程、審かに觀察當時の事情に通ずるものにあらず。故に確定せる結果を得るには更に最後の作業を要す。批判の結果陳述は眞らしきものと、僞らしきものとの二となる。但し最も實らしきものにても、其の陳述のみにては實らしといふに留まる。此の『實らし』より進んで科學的形式を有する合式的命題となすは史家の難しとする所なり。科學に於ける命題は爭論の餘地なき斷言たるを要す。史家の有する陳述は此の如きものに非るなり。一切の觀察的科學に於ては決して單一の觀察によりて結論を爲さゝるを原則とす。即ち獨立に爲されたる種々の觀察を綜合して始めて一個の事實を合式的に肯定するを

得べし。史學は其の智識取得の方法不完全なるを以て一層嚴密に此の原則を守らざるべからざるなり。歴史上の陳述は最も好都合の時と雖も不注意に爲されたる觀察に過ぎざるを以て之を確實にすべき他の觀察を要するなり。

科學は觀察を結合して成立するものなり。即ち科學的事實は種々の觀察の輻輳する中心點なり。而して何れの觀察も全く誤謬の機會なきものなしと雖も、若し種々の觀察が符合することあらば即ち寧ろ凡ての觀察者が同一の事實を觀察して之を正當に叙述するものと解せざるべからず。凡ての觀察者が共通の誤謬を爲すこと殆と之れ有る可からざればなり。蓋し誤謬は人に由りて異るを以て、互に符合せず、其の符合するは是れ正當の觀察なる所以なり。

之を歴史に適用すれば、純粋なる解剖的批判と綜合的作業との中間に位せる作業となる。即ち陳述の比較研究是れなり。

比較研究の第一歩は先づ批判的解剖の結果を類別して同一の事實に關する陳述を一處に集むるに在り。此の作業も亦紙片の法を以てすれば器械的勞力を省くを得。即ち各陳述を別々の紙片に記するか、又は各事實を別々の紙片に記し或る事實に關する種々の陳述は史料を讀み行く間に見當り次第、其の事實に充てたる紙片に記入し行くなり。此の如くにして陳述を集合すれば、一事實に關して、史家の有する報告の範圍を知るを得べし。之より生ずる確定的結論は諸陳述間の關係如何によりて定まるものなり。故に今其の關係の種々の場合を別々に研究するを要す。

三　現代史を除けば最も多くの場合に於ては文書は一の事實に對して一の陳述を與ふるのみ。此の如き場合には一切の科學は不易の規則を適用す。即ち單獨なる觀察は之を科學の内に入れず、觀察者の名を附して之を引用するも之に由りて斷案を下すことなし。史家も亦此の規則を守り或る事實が唯た一人により て陳述せらるゝのみならば縱令其の記者は正直の人なりとも其の事實を確言することなく唯だ出處を示し置くべし(例へは「スーシーア曰く」或は「セザー曰く」等の類。是れ以上の事は爲すべき權利なきなり。然るに實際は中世の史家の爲したる如くスーシーア若くはセザールを典據として事實を記するの癖あり。甚きは之を明言するに至る。此の如く自然的輕信に驅られ科學を以て之を防止せざる

の結果は遂に單一の文書に記せる不十分なる事實も他の文書と衝突せざる限りは之を採用するに至る。是れ即ち材料の匱少にして唯だ一人の記者ある如き不明なる時代の歴史が他の千百の文書現存し互に衝突せる時代の歴史よりも却て積極的にして善く確定せるが如き不合理の結果を來しゝ所以なりとす。例へばエロドート一人のみ知りたるメディー人の戰爭、グレゴアアル、ド、ツールの外は、何人も記せざるフレデゴンド(Frédégonde)の冒險の如きは同時代の數百の人によりて記せられたる佛國革命の事件よりも論議せらるゝこと少し。是れ不可思議の現象なれとも史家の心に一革命を來すに非れば、此の現象は變ずること無かるべし。

四　同一の事實に關する種々の陳述ある場合に於ては此等は互に撞着するか、然らざれば一致すべし。其の互に撞着することを確むるには先づ此等の陳述が同一事實に關するものなることを確めざるべからず。一見撞着するが如き二個の陳述も實は相平行するものにて精密に同一の時、同一の處、同一の人、同一の挿話(エピソード)に屬せずして兩者共に正當なることもあるべし。然れども此の場合には兩者互に事實を確むるものにあらず。兩者各孤立せる陳述に過ぎざるなり。

若し實際撞着せる場合に於ては、少くとも其の陳述の一は虚妄ならざるべからず。此の場合には互に讓歩し調和せしむるを自然の傾向とす。然れども此の平和の精神は科學的精神に反するものなり。例へは甲は二と二と合すれば四となるといひ乙は五となるといふとき吾人は二と二と合すれは四半となるとは言ひ難し。故に史家は必ずや之を審査して其の孰れが正しきかを見ざるべからず。此の審査即ち批判の業なり。二個の撞着せる陳述に於ては其の一が疑ふべきものなるを常とす。若し他の一が甚だ眞らしと判斷されたるときは前者を擯斥すべし。若し兩者共に疑はしきものならば何等の結論をも爲すべからず。又疑はしき種種の陳述が互に符合し、疑ひなき一個の陳述が之と異れる場合も亦同じ。

五　縱令種々の陳述符合すとも、之に由て直に事實確定せりと爲すべからず。此の如きは凡ての陳述を互に獨立せるものと見做す所以なり。日常の經驗に據るも一人の談話が數人の口に傳はり一個の通信が數種の新聞紙上に出て數人の報告者が其の中の一人を總代として報告せしむるが如きことあるは我等の熟知せる所ならずや。斯る場合には數多の文書あり數多の陳述ありとも決して之と

同數の觀察あるにはあらざるなり。一の陳述が他の陳述を再現せるものなるときはこれ一の新しき觀察に非ず。假りに一の觀察を再現するもの百人ありとも、觀察の數は畢竟一に過ぎず。之を算して百の觀察と爲すは猶ほ同一の書百部を以て百の異れる書となすが如し。然れども所謂『史的文書』を重んずる者は往々此の自明の理を忘れ別々の記者が別々の書に同一の事を記するを見れば直に多數の根據を有するが如く思惟し、種の書に記する所合すれば之を十種の觀察によりて確定せられたる如く見做すは誤れるの甚きものなり。唯た互に獨立せる觀察に基ける陳述の互に符合する場合に於てのみ始めて陳述の符合せることを斷定すべし。故に陳述の符合によりて結論を爲さんと欲する者は先づ其の符合は果して互に獨立せる觀察の符合なるや否やを審査せんことを要す。之が爲めに次の三個の作業を要す。

(甲) 先づ諸陳述は互に獨立せるか、又は同一の觀察を再現したるものなりやを研究すべし。此の研究の一部は外的批判中、引用書の研究に於て爲さるゝ所なり。然れども引用書の研究に於ては唯た文字に現はれたる上の關係を論ずるのみにて或る書の何れの部分が他書より轉寫されたるものなるかを探るに留まる。他より轉寫したる部分は固より之を排斥すべしと雖も此の他に猶ほ文字に現れざる陳述に關しても同一の研究を爲さゝるべからず。即ち同一の事實に關する諸種の陳述を比較して其の果して別々の觀察者より出てたるものなるか然らざるも少くとも別々の觀察より出てたるものなるかを見出さゝるべからず。

此の研究の原則も亦引用書研究の場合に用ひたるものと類似せり。即ち社會的事實の細目に至りては甚だ複雜にして同じ事實も其の觀察の方法種々なるを以て二人の互に關係なき觀察者が全く同一の報告を與ふることは有り得べからざることなり。故に二個の陳述が同一の順序に同一の詳細を語らば此等は必ず其の共有せる一個の觀察に基けることを斷ずべし。別々の觀察ならば必ず何處にか相違の點あるべき筈なり。故に史家は往々次の先天的原則を適用するを得べし。即ち若し或る事實が其の性質上唯た一人の觀察者によりてのみ觀察せられ報告せらるべきものならば之に關する一切の報告は皆單一なる觀察に基けるものなると是れなり。此の原則を適用して史家は觀察の別々に爲されたる場合を

認め得べく、又然らずして一の觀察を再現したる場合の更に多きを見るべし。別々の陳述の一致することを確定するには先づ其の相互の關係の如何を見ざるべからず。此の點に關しても亦人間自然の傾向を制するを要す。即ち二個の陳述が完全に一致するときは之を陳述の一致せるものと斷定することなく唯だ其の或る部分が處々符合せる場合を以て眞に一致せるものと爲すべし。自然の傾向は陳述の一致の精密なれば精密なる程其の確定力は大なりと思惟すれども、史家は之に反して一見奇なるが如き次の規則を採用すべし。即ち少數の點に於て陳述の一致せるとき其の一致の效力は大なるものとす。相違せる陳述中に此の如き一致の點あれば史家は此の點に於て科學的の史的事實を求むべし。

(乙) 結論を爲すの前に更に一の爲すべきことあり。即ち別々の觀察は全然獨立に爲されしものなるや否を見ざるべからざると是れなり。何となれば別々の觀察にても一が他に影響したる結果、兩者相一致するも是れにより結論を爲す能はざることあるべければなり。之が爲めに次に擧くる如き種々の場合を考究すべし。

(イ) 別々の觀察も同一の記者によりて爲され其の數度の觀察を同一の書又は別の書に記錄せる場合には記者は實際記錄の度毎に改めて觀察を爲さず最初の一觀察を反覆するを以て滿足する恐あり。故に此の事なきを推定するには特別の理由なかるべからず。

(ロ) 數人の觀察者あるも其の中の一人に委任して文書を作らしめたる場合には其の文書は委任を受けたる一人の陳述に過ぎざるや又は他の觀察者も其の文書の製作に關係したるやを見ざるべからず。

(ハ) 數人の觀察者が各自其の觀察せる所を別々の文書に記錄せしも其の事情同一なる場合に於ては凡ての觀察者が同一の影響を受けて同一の虛妄又は誤認に陷りたることなきやを見ざるべからず。例へば彼等に共有の利害、共有の虛榮心、共有の偏見等なかりしやを見るの類なり。

確に獨立なる觀察といふべきは別々の團體に屬する別々の記者が別々の事情の下の觀察し別々の書に記錄せるものゝみに限る。故に完全に決定を與ふべき觀察の一致は近世に屬するものゝ外、甚だ稀なりとす。

歴史事實は之に關する獨立なる數個の文書の存在を待ちて始めて之を證明することを得。而して文書の今日に傳はれるは偶然のことなるを以て(偶然の機會が歴史科學の成立に關することの大なるを見るべし。

歴史事實の確定すべきは主として廣き場處又は長き歳月に渉れるもの(時に一般事實と稱す)風俗、教理、制度、大事件等とす。此等は他の事實に比して觀察し易きものにして今日より之を證明することも亦容易なり。然れども歴史の研究方法は暫時の事實又は小區域の事實(所謂特別の事實)例へは人の言ひし詞、又は一刹那の行爲と雖も本來之を確定する力なきものにあらず。其の事件の起りたる場處に數名の人ありて之を記錄し置き其の記錄が傳りて史家の手に入れば之を確定するに十分なり。例へばルーターがヲルムスの國會にて吐きたる言語は史家之を知悉し他の口碑の傳ふるか如きものとは自ら異れるを知るが如し。右の如き好都合の事情は新聞紙、速記術、文書保存所の設立と共に益〻多くなるべし。

古代及ひ中世の場合に於ては文書の匱少なる爲めに史的智識は一般事實に限れり。現世史に至たるに從ひ益〻特別事實を包括せしむることを得べし。然るに一般公衆は之と反對の想像を爲せり。即ち現代の事實に就ては相撞着せる諸說流布せるを以て之を疑ひ古代の事實には反對說なきを以て之を信ぜり。即ち知り得べき方便なき歴史は之を信用し其の方便の豐富なる時代に達するや則ち疑念を增す、豈奇ならずや。

六　文書の一致によりて結論に達すべしと雖も其の結論は必ずしも盡く確定するものにあらず。其の結論を完全にし之を改正する爲め史家は更に諸事實の調和を研究するを要す。

個々別々に見れば證據不十分なる諸事實も綜合して之を見れば互に相確めて全體の確實なるを知るべき場合あり。數個の文書の個々別々に與ふる事實が實際之を連絡するに足る程、近接せること往々之あり。例へば同人又は同團體の順次に爲したる行爲、又は短き時期を隔てたる同團體の習慣、或は同時期に於ける類似の團體の習慣の如き是れなり。固より類似の諸事實にても其の中の一は眞實にして他は虛妄なることもあるべければ第一が確實なりとて第二も然りとは確言し難し。然れども證據不十分なる此の種の諸事實の相調和せるは一種の確實を

示せるものにして此等の事實は嚴密なる意味に於て證明せらるゝものにあらざるも互に輩固にするものなり。即ち各事實に關する疑は消滅し諸事實の聯絡上より一種の確實を得べし。故に個々に於ては疑はしき結論も之を比較すれば全體に於て可なり確實なるを見るべし。例へば君主の旅行に關する諸文書の日附及び場處が互に接續して羅れる一體を成すが如き、或は種々の時代及び場處に關する說の相調和して一の制度又は民俗を見るに足るものあるが如し。

此の研究方法は適用に困難なるものなり。調和の概念は一致の概念に比すれば漠然たるを免れず。故に吾人は一體を成形するに足るべき連絡ある事實を區別する爲めに一般の規則を示すこと能はず、又如何なる時期間のこと、如何なる地域內の事ならば、一體を成すを得べきかを豫め決定し置くこと能はず。半世紀を隔てゝ數百里を隔てたることにても民俗を確定するに用あることあり。(例へは古日耳曼人の風俗の如き)。然れども又急激の變化ある複雜なる社會に關することならば此の如く隔離せることは最早や何の用をも爲さず。(例へば千七百五十年と千八百年とに於ける佛國の社會、又はアルサスとプロヴンスとの兩地に關するとの如き是れなり)。此の點に至れば吾人は事實間の關係を研究する外なし。此の研究は即ち歷史綜合の第一步に入るものにして、之を解剖的作業と綜合的作業との過渡となす。

七　次には文書によりて確定せる事實と他の研究方法によりて確定せる事實と衝突する場合を研究せざるべからず。時としては歷史的結論として得られたる事實が、(一)他の從來既に知られたる歷史的事實と撞着することあり。(二)直接の觀察より得たる人類に關する吾人の智識の總和と矛盾することあり。(三)或は確立せる科學の正規の研究方法により確定せる科學上の規則と衝突することあり。第一第二の場合に於ては事實は歷史、心理學、社會學等凡て未だ十分に確立せざる科學と衝突するものなり。かゝる事實は之を『實らしからざる』事實(Improbable)と稱す。第三の場合即ち眞正の科學と衝突する事實は之を『奇蹟』(Miracle)と稱す。然らば此の實らしからざる事實又は奇蹟は如何に取扱ふべきか。

『實らしからず』といふ概念は元來科學的のものにあらず。此の概念は人によりて異るべし。何人も己れの見慣れざることは實らしからずと爲すべし。無智の農

夫は幽靈を信ずるも電話を信せざることあらむ。暹羅の王は氷の存在を信ずる能はざりき。故に或る事實の實らしからざるは如何なる人に實らしからざるかを精密に知るを要す。若し其の人にして科學的修養なくんば其の說は取るに足らず。之に反し科學的修養ある人にして實らしからずとなさば是れ其の事實は科學上の結果と矛盾するもの換言すれば科學者の爲したる直接の觀察と文書の與ふる間接の口供と一致せざるものなり。

此の衝突を如何に解くべきかの問題は實際上大關係なし。何となれば奇蹟的事實に關する文書は概ね皆他の理由によりて既に疑ふべきものにして健全なる批判の爲めに排斥せらるゝものなればなり。然れども奇蹟の問題は從來歷史家を動かしたること少からず。

奇蹟を信ずる一般の傾向の爲めに各民族の有する文書は概ね奇蹟を以て充滿せり。歷史的に言へば惡魔の存在はピシストラート(Pisistrate)の存在よりも遙に確實なり。ピシストラートと同時代の人の彼を見たりといへる語は一も今日に傳はらざるも惡魔を見たりといへる『目擊者』は幾千人あり。歷史事實中惡魔の存在の如く數多の獨立なる口供によりて確立せるは少かるべし。然れども吾人は惡魔を棄てゝピシストラートを取る所以は惡魔の存在が凡ての確立せる科學の規則と相悖れるに由る。

歷史家に向ては此の問題の決解は明白のことゝす。歷史の間接的研究法は常に科學の直接的研究方法に劣るものなるが故に歷史研究の結果が科學の規則と調和せざるときは歷史は科學に讓歩せざるべからず。不完全なる知識取得手段によれる歷史科學は他の科學の結果を匡正し又は之に反對する權利なし。却て之を利用して自家の結果を正さゝるべからず。直接的科學の進歩は往々歷史解釋の結果を變更することあり。直接の觀察によりて確立せる事實は文書の批判及び理會の助を爲すものなり。然れども歷史は直接科學の進歩を助くること能はず。歷史は其の智識を取得する間接手段の爲め常に實在より或る距離を隔つるを以て實在に直接して得たる科學上の規則は、之を承認せざるべからず。此の規則を排斥する爲めには更に新しき觀察の必要あり。此の事たる有り得べきことなれども是れは科學部內に於て爲さるべきことにして歷史の能くする所にはあ

ちず。

新研究の結果が從來の史的智識又は今猶ほ啓發の時代にある、人に關する他の科學の智識と衝突するに方りては其の決解容易ならず。此の問題は史家が此等の智識を重んずる程度の如何によりて決すべし。然れども實際上、史學、心理學及ひ社會學の規則に反對するには甚だ有力なる史料を要す。而して此の如きは實際殆んど無きことと立り。

第三編　綜合的作業

第一章　歴史組成の一般條件

一　劈頭第一所謂史料なるものゝ形式、性質が他の科學の材料と如何なる點に於て相違あるかを説明せんとす。凡そ歴史事實は史料の批判的解拆より生ずるものにして此の點は歴史事實全躰に共通する特質なれとも其の中に付て亦多少異る所あり。今順次に之を説明せん。

(甲)歴史事實は其の見解の如何に由り全く異れる性質を有する現象を指示するものなり。吾人は同一の文書より或は手蹟、或は國語、或は文躰、或は輿論、或は習慣、或は事件等に關する事實を識ることを得。例へはメシヤ(Mesha)の碑銘は、或はモアビト人(Moabites)の手蹟及ひ國語を示し或はカモー(Khamos)の神の信仰及び其の禮拜方法を説明し或はモアビト人イスレール人間の戰爭を今日より回憶せしむ。斯の如く種々の事實は其の性質の如何に拘はらず紛雜錯綜種々の方面より吾人

の胸を衝くものにして此の點は他の科學と其の趣きを異にする特質なり。抑々直觀的科學は豫め研究すべき事實を擇擇し只た系統的に事實の觀察の範圍を限るに反して文書的科學は文書記者に由り亂雜に綴られたる事實の斷簡零墨を研究するに止まるのみ。此の亂雜なる狀態を秩序正しき狀態に整頓するには須らく事實を適當に類聚せざる可からす。

(乙)歷史事實は其の範圍の程度に付て廣狹の懸隔あり。或は全民族に通じ數世紀に亘り適用せらるべき事實あり(制度、文物、風俗、宗教)。或は唯た一人一時の行動に關するものあり(言語、擧動)。是に於て更に歷史は秩序的に或る特種の事實より研究を始め而して之を一般の事實に縮寫する。夫の直觀的科學と大に異る所あり。

(丙)歷史事實は區劃的なり。換言すれは只或る國又は或る時代にのみ適用するものなり。此の性質は一般の科學と大に其の趣きを異にする所にして特に地理的分配と人事現象の進化を論ずる史學に限らるゝものなり。

(丁)批判的解拆により文書より拔萃せられたる事實にして或は然らんと思はるゝか如き唱か不確實なる場合には其の疑問を全く氷解せさる間は之に加ふるに率

強附會の想像を以てする能はず。

要之歷史の組成は納鑒相容れさる極細の事實を可成的綜合し種々なる方面より題目、場處、範圍及ひ確實の點に於て相違ある史料を利用せざるべからず。

二　何れの科學を問はず先づ事實を觀察して次に來る段階は秩序的系統に準じ試問の一列を一定の公式に短縮するに在り。凡そ總ての科學は此の所謂試問に對する解答より構成せらるゝに外ならず。抑々直觀的科學に於て觀察せらるべき事實は此の試問を解釋し精細に之を公式に發表することを要すれとも之に反して歷史家は其の文書を基礎とし單純なる個人的理性により自己を感動せし部分を探り其の言語を變じ自己の心に浮びし種々雜多の所感を附加して觀察するに在り。

抑々直觀的科學は完全なる狀躰に於て取られたる實體(Réels)を研究す。故に其の綜合も實躰的綜合なり。之に反して由來歷史は過去の事件の幻像(Vision)と云ふを適當とす。歷史の研究に付て吾人は史料となるべき書籍、碑銘、美術工業品を除くの外、他に實在せる物躰を眼中に置く能はず。實に抽象的手段なり。純粹に

知能的作業なり。是れ即ち實躰に由れる主觀的方法に非ずして只我輩の印象を組織する抽象的分子の發揮を目的とする主觀的方法なり。其の材料の性質より言ふも歴史は正に主觀的科學なり。此の主觀的印象の知能的解拆に向て實躰に對する解拆を支配する法則を其の儘適用するは極めて其の當を失するものなり。

三　歴史事實唯一の淵源としての史料は左の三種の事に付て知識を與ふ。

(甲)生物及ひ有形物　凡そ史料は吾人に人間有形的物躰、技術工藝の產物を知らしむ。凡そ有形的事實なるものは實際史料記者の見聞せし所なれとも吾人は知能的現象(記者の想像を透して觀察せられたる事實)最も直截に言へは記者の印象の想像的發現に過きさる物を觀るのみ。例へばシュルサレムの殿宇は史料記者の實見せしものなりしも今や吾人は現實に之を見る能はず。實際之を見、之を記載せし人の胸中に銘せし印象を後世より追憶するに外ならず。

(乙)人間の行爲　史料は昔時に於ける人間の行爲に關係するとあり。而して記者の經驗せし印象を追憶するに過きず。例へは夫のセザールか刺客の毒刃に斃れし時に當ては定めし劒にて貫かれし有樣見られしならん、暗殺者の言語聞かれしならん、吾人は此等の事實に付て單に回想を逞ふするのみ。

(丙)動機(Motifs)及ひ概念(Conceptions)。人間の行爲は故なくして起るものに非ず。必ず其の行爲の起るに至るべき動機あり。吾人は其の結果に現はれたる行爲より溯り、其の因而起るべき原因を洞察せざるべからず。

要之(一)有形事實(二)人間の行爲(個人的及び集合的)(三)精神上の事實の三者は史的知識の目的を構成するものにして直接に觀察せられたるものに非らず、全く想像されたるものなり。歴史家は單に過去の事實に付て想像を逞ふするに過ぎず。

四　然らば全く空想に馳せずして能く事實を推想するとを得るの方法如何。

歴史家の心中に存する事實は必ずや主觀的なりと雖も主觀的と云ふとは即ち不眞實なりと斷定するとを得ず。追憶は單に想像なりと雖もされはとて空想に非らず。既に消滅したる眞實の發表なり。只文書に據る史家は實體に付て直接に心理作用を働かすに非らずして古文書を基礎とし之に推想を加ふるものなり。即ち既に消滅に歸せし實躰は少くとも多少今日の實躰に類似する點あるを以て警喩の法則に由り、これを推して彼を察し、過去の事件を研究するなり。若し全た

く絶對的に古今類似の點なくんば古昔の文書は今日決して了解する能はざるべし。

夫れ然り、然りと雖も此の作用を無意識に行ふ時は往々史學上に重大なる錯誤を來たすとあり。即ち第一に想像を以て描寫すべき過去の事實は吾人の現在見つつある事實に全く齊しからざるとあり。吾人は決してセザール、クロピスの如き人を見ざるのみならず彼等と同じ心狀を經驗せざりき。次に又史學は他の科學と大に其の趣きを異にし其の知識の一部か殆と心中に潜みて見るべからざる事實と相關聯するを以て其の觀念は錯綜し其用語は精確を缺くを免れず。抑々人生普通一般の事實、社會の事情、行爲、動機、感情の如きは唯た漠然たる用語(例へは國王、勇者、戰爭、撰擧)を以て表示するのみ。若し夫れ、これより尙ほ複雜なる現象に會しては其の用語益々茫漠に流れ其の極、現象の要素と全く一致せざるか如き弊に陷るとあり(例へは種族、軍隊、工業市場、革命)。是に於て史學は心理學、社會學の如き人生に關する諸科學に共通せる曖昧漠然たる缺點を免れず。況や其の間接なる心理的推想の發表法は益々此の缺點を膨大する傾向あるに於てをや。要するに吾人の心中に於ける歴史的想像は少くとも過去事實の直接觀察者の心に浮びし想像の要素を追憶するに在りと雖も惜ひ哉、彼等の既に表示せし用語は此の要素に付て精確なる話法を用ゐざるを如何せん。故に史家は其の想像力を用ゐて恰も身自から其の場に臨みしか如く精確に事實を描寫すべく此の目的を遂ずる爲めに文書以外の要素(例へは碑銘)を參考する必要もあらん。

五　以上論じたる所を通觀し來れは歴史研究法の問題は左の如く歸着す。即ち吾人が史料より發見したる種々の要素に付て心理的想像を構成し其の全く有形的物躰に關するものは碑銘、遺物に付き觀察したる結果を發展し其の精神的事實に關するものは古代に於て表示せられたる模型若くは我々自身經驗したる事實を推して過去の事實を推想す。而して過去の事實は多少現在の事實に齊しく此の異同の點を精敘するは歴史學上極めて興味ある業なりとす。

爰に實際起り易き弊は即ち直接に文書中の文章を讀むに臨み推想餘り誇大に失し針小棒大殆んと測り得べからざるとなり。蓋し此の推想は畢竟皮相的比喩に基くものにして、精確を缺くの甚しきものなり。此等の推想を全然訂正するは歴

史家の急務に屬す。

蓋し人性の活動は社會の全躰及び其の進行の道筋を構成するものなるが故に單に孤立せる人物躰、及び活動を描寫するのみに止まらず尚ほ進で別個の人間及び別個の行爲の關係(國民、政府、法律、戰爭)を敘せざるべからず。然かも此の關係を觀察せんと欲せば須らく集合躰即ち全躰の概念を有するとを要す。夫の文書は單に孤立的分子を與ふるに過ぎざるを以て歷史家は再び主觀的方法を用ゐ先づ社會又は社會進化の道筋を概想せざるべからず。

六、歷史組成の順序を擧ぐれば先づ第一に文書に批判的解析を施し而して史料を供給し了れりと雖も歷史事實は未だ分散混沌の狀態に在るを以て吾人は現在の事實の連絡を基本とし過去の事實を推想し恰も過去の事實を直觀せしか如く之れに種々の方面より採拾せる實躰の要素を結合し可成的實躰に似たる心理的推想を施すべし。是れ文書參照と相離るゝべからざる第一作業なり。事實は斯の如く推想せられたりとして、次に來る問題は其の事實を類聚するに在り。是れ即ち第二作業に屬す(第二章參照)。吾人は此の方式に準じ文書より採拾したる事實を整理し了るも尚ほ往々範圍頗る大なる罅隙を歷史上に殘すとあり。此の罅隙は殊に參考文書の極めて稀少なる歷史の部分(上古史)に甚だ多しとす。吾人は既知の事實を基礎とせる理性の力により此等の罅隙を補塡せざるべからず。是れ即ち第三作業なり(第三章參照)。終りに臨み吾人は右の方式に依り類聚したる一塊の事實を公式(Formules)に短縮し其の一般の性質及び相互の關係を演繹せざるべからず。これ歷史組成が科學的に終りを告げしものにして即ち第四作業に屬す(第四章參照)。然かも由來史的知識は複雜にして且つ御し難きものなるが故に之を適當に傳達すると頗る困難なり。故に吾人は尚ほ適當なる形式に準じ右に擧げたる作業を以て組成せられたる結果を適當に表彰する方法を研究せざるべからず。(第五章參照)

第二章　事實の類聚

一、夫れ史家の混沌たる歷史事實に對するや第一に其の研究の範圍を一定し次に此等の事實を各々別個の群(Group)に區別し更に之を細別し終りに此等の細

別中に於て一々事實を整理せさるべからさるか故に先づ事實の撰擇類聚及ひ整理に關する規則を一定せさるべからず。而して此の規則は事實か外的事情(Les Conditions extérieures)に基くか若しくは其の內的性質(La nature intérieure)に基くかに由て區別あり。

最も簡單にして且つ容易なる類別法は外的事情を基礎としたるものなり。即ち一定の時期又は一定の國民又は一定の場處若しくは一定の個人に關するものを基礎としたるものなり。此の年代的、地理若しくは一定の人衆に關して整理せらるべき方式に付き古來未だ嘗て一定せる原則なし。夫のリーピー、タシタスの如きは洪水、疫病及ひ怪物の生產を戰爭及ひ革命の記事と混同して敘せり。

內的性質に由り事實を類別する方法は晩近に到り始めて着手されたるものにして其の進歩も亦極めて不完全にして且つ遲々たり。蓋し此の方法は歷史の範圍外、例へは言語、文學、技術、法律、經濟、宗教の諸學科の研究に澄觸するものにして初は獨斷的のもの轉じて史的性質を具ふるに至りしなり。此の類別法の規則は主として同種の活動に關係せる事實を撰擇類聚するに在れとも概ね時代及ひ場處に基き類聚する法式と相結合すると多し。例へは言語、繪畫、政府の歷史は更に時代、國家及ひ國民の歷史に區別して論するを例とするか如し。要之事實排列の順序は即ち(一)年代順序(二)地理的順序(三)論理的順序(活動の性質に基ける順序)の三種に分る。苟も史家は右の三種中只一種の方法のみを固守專用する必要なしと雖も然かも主として何れの方法を採るかを先づ一定せさるべからず。

二 歷史事實は二個の異れる方面より觀察するとを得。即ち一は主として個人的、特種的、一時的の要素を觀察し一は主として集合的、一般的及ひ永續的の要素を觀察す。第一の概念に從へは歷史は古人の間に起りし物語にして第二の概念に從へは人性の繼續的風俗(Habitudes Successives)の描寫なり。此の觀察の差異よりして獨逸の學林に於て文明史家(Culturgeschichte)と昔時の傳說を固守する歷史家との間に議論紛々として絕えず。又佛國に於ても制度風俗、思想の歷史家は所謂政治史を罵倒して戰爭史(L'histoire batoille)と稱せり。蓋し此の爭議の原因は歷史家か取扱ふべき文書の差別より來るものにして政治史家は重もに統治者の個人的又は一時的の事業を讀み之に反して文明史家は主として一般事實、語形、宗教、

禮式、法律、規則に關する文書を參考するを常とす。吾人を以てすれば兩說孰れも其の一を極端に主張するは當らずと信ず。並し歷史組成の完全を告ぐるには須らく右の兩見解を併せて事實に適用すべきなり。言ふまでも無く人間の思想、生活及ひ行爲の習慣は明かに歷史上必要なる部分なるに相違なく、而して彼等人民に共通せるものを抄出する目的を以て凡て個人の行爲を結合したりと假定するも仍ほ吾人の排斥すべき權利を有せさる殘物あり。是れ明かに史的要素たるを失はさるなり。若し極端に史筆が政治的生活の一般事實以外に出でさる方法を取る時はブ(ル)ザ(ル)ル(Pharsale)の戰、ベスティーユ(Bastille)の陷落は決して歷史事實となさるか如き奇觀を呈す。若し之を敍すると無くんは羅馬及ひ佛國の制度史は到底要領を得さるなり。要之歷史は一般事實と特別事實との研究を調和結合せさるべからず。

三　前述の方法を或る特種の習慣、國語、宗教、風習若しくは政治的制度の研究に適用する前に先決問題として劈頭第一、何人の風俗に付て敍するかを一定せさるべからず。抑々風俗は個人の多數に共通するものにして同一の風俗を有する個人の集合を稱して群(Groupe)と謂ふ。吾人は風俗研究の第一條件として此の風俗を實行せし群を決定するとを要す。蓋し一般自然の傾向に依れは人間の群を動物學的に其の體形の相似する點より觀察して區別するもの多し。其の他或は著しく共有せる特質の下に結合せるものを一群として採るものあり。或は共通の政府の下に結合せる國民(例へは羅馬人、英人、佛人)を採るあり。或は同國語を操る人民(希臘人、昔の獨逸人)を一群として採るあり。此等の群か總ての點に付て相似し同一の風習を有するか如く推定す。然れとも實際の事實より言へは假令夫集權の社會と雖も此等の群、必すしも各々同性質の集合体に非らず。何となれは人間活動の大部分、例へは國語、技術、科學、宗教、經濟上の利害に付き群は常に動搖しつゝあるを以て何ぞ總ての點に於て全く同一の風俗を有する群あらんや。同一の人は同時に別個の群の一員にして各群中にて亦各員各々異れる所あり。例へは加拿陀在住の佛人は大英國の國籍に屬し加特利教を奉じ佛語を操る人民なり。要之斯の如く總ての人間を極めて鋭く明截なる社會に分立對峙せしめんとするは到底至難の業に屬す。

凡そ精確に群の性質及ひ範圍を決定せんと欲せは(一)其の群は如何なる人より成立するや(二)如何なる情緣の下に結合するや(三)如何なる習慣を共有するや(四)如何なる活動に關して相異る所ありやの問に對して滿足なる解答を下さゝるべからず。斯の如き批判を下すに至らさる間は其の群の風俗を叙するとを得さるなり。若し夫れ知識的風俗(國語、宗教、技術、科學)を研究せんと欲せは政治的分子又は國民の異同を度外視し只該風俗に與りし人より成立する群を撰ぶべく若し經濟的事實を研究せんと欲せは共通の經濟的利害關係の下に結合せる群を撰ぶべく若し又社會及ひ政治上の事實を研究せんと欲せは主として政治上の群に注目し人種の異同の如きは全く度外視するも可なり。

群は亦副群(Sous-groupes)に分る。例へは一國語は數多の方言に分れ宗教は數多の宗派に岐ち一國民は數州の人民に分るゝか如し。

(一)社會的及ひ經濟的制度の研究に付ては職業的分業及ひ階級的分業の原則、職業及ひ階級の性質其の補缺法、別個の職業階級間の關係を研究せざるべからず。(二)法規及ひ主權に據り制裁を受けたる政治的制度に關しては(イ)權力を委任せられたる者、若し政權分る〻時は職務權限の配分を研究し其の各部に於ける政府の公務に服從する人を解拆し之を區別せさるべからず。政府に關する人の各階級に關しては之を補充する方法、彼等の職權及ひ實權如何を研究するを要す。(ロ)法規、其の形式(習慣、命令、法律、先例)其の內容(法律、規定)其の適用法(手續法)殊に法規の明文と其の實際の適用執行との間に徑庭ありや否や(權力の濫用、行政官の間の爭議)を研究せさるべからず。(三)國際的制度(例へは外交及ひ戰爭、慣習法規)に關しては第二の政治制度に適用すべき方法に準じて可なり。

四　前述の如く歷史は只靜止の狀態に在る事實のみならず(Statique)又異れる時に於ける社會の狀態と其の狀態間の差異を研究せさるべからず(繼續事實の研究)。此等の變化中最も面白きは共通の方向へ嚮ふ變化、詳しく言へは急激なる變動なく漸次自然に水の流るゝ如く社會の變遷する狀態にして殊に之を進化(Evolution)と稱す。此の進化の研究には種々の作業を含蓄す。即ち(一)進化したる事實を決定すると(二)進化の起りたる間の時期を決定すると(三)進化の段階を決定すると(四)進化の手段の研究是れなり。

五　繼續事實を研究するに當り中止點を句切り、始終を一定すると必要なり。此等の分括を句點と稱す。凡そ此の句點は事件の性質により之を句切るものなるを以て或る時は餘り長きに失するあり。是れ此の間に絶大なる變化なきが故なり。或る時は短きに失するあり。是れ其の間に急激なる變化ありしが故なり。一概に論ずる能はず。サン、シモン(Saint Simon)は此の變化を基礎とし Périodes organiques (緩變化) Périodes critiques (急變化)とに分けたり。

第三章　組成的推理

一　文書より供給せられたる歴史事實は前に述べし類別整理の方法を以てするも往々尚ほ總ての空位を補充すると能はざる場合多きを以て吾人は此の缺隙を塡補せざるべからず。夫れ直觀的科學に在ては或る試驗を爲し事實の缺隙ある場合には更に他の試驗を以て之を補ふことを得ると雖も史學は只理性の力を假りて自己の知識を擴張するより外に方法なきが故に若し此の理性が正鵠を得たる時には此の知識を得るの方法は的に正當なり。然かも實驗上此の方法は正當に適用せらるゝと頗る稀にして往々至大なる誤謬に陷るを免れず。今爰に注意を列擧すれば(一)理性は決して文書の解拆と結合すべからず。(二)直接に文書を吟味して得たる事實は決して理性に因り得たる事實と混同すべからず。(三)無意識に出てたる推理は決して許すべからず。往々此の誤謬に陷ること多し。(四)理性にして少しく疑あらば之れより直ちに明白なる結論を抽出すべからず。而して其の論點は暫らく推測の狀態に存せしめ明かに確定せる結果とは區別するを要す。(五)推測を轉じて確定に移すことは決して許すべからず。蓋し最初の印象は大概正當なり。推測に止まる事實を沈思熟考するの結果、不知不識の間に之を既に成立せる事實と認むるの弊あるは往々免るべからず。愼まざるべけんや。

理性を用ゆる方法に二あり。曰く消極的方法、曰く積極的方法是れなり。

二　消極的方法は事實に關する表示なき場合に起る方法なり。蓋し既にあらゆる文書の中に或る事實を發見せざる時は其の事實は全く成立せざりしものと推論することを得。然れとも此の推論の要件として總て成立せし事實は必ず文書に記載せられしことを必要とす。併かし事實上既に起りし事件の大部分は記載さ

れず假令記載せられしも其の文書は往々湮滅に歸すると多きが故に此の方法には左の如き制限を附せさるべからず。(一)曾に其の事實を記載せる文書の現存せさるのみならす過去に於て必ず斯の如き文書なかりしことを要す。乃ち湮滅した る文書多きに比例して此の方法の適用益〻少くなるを以て十八世紀史に比して上古史に此の方法を適用すると極めて危險なり。或は斯の如く紛失せしは貯藏する價値なき事實を記載せしなるべしと曰ふものあらんも天災事變は斯の如き判斷力を有するものに非ず。(二)其の事實は必ず觀察せられ而して記載せられ得べき種類のものならさるべからず。事實の記載せられさりしとて必すしも觀察せられさりしと斷言する克はず。例へは地震、恐水病、鯨の海岸に漂ひし事實の如きは通常人の觀察せしに相違なきも之を文書に記載すると稀れなり。又同時代の人民か其の主權の下に制限束縛を受け言論出版の自由を得さるともあり。故に政府の機密又は民間の不平等の如きは毫も文書の表面に記載せられず。是れ即ち堯舜禹湯の世か後世に於て聖代と稱せらるゝ所以なり。從て古文書には往々有司權力の濫用を說かず農夫の哀訴を敘せず、世事秩然として具はり、時津風枝を

嘶らさず、萬民擧て鼓腹擊壤、天下太平に安んずる風のみ見ゆ。

要之消極的論理法は左の二個の場合に制限せさるべからず。(一)該事實の記載せられさる文書の記者は總て同種類の事實を記載せさるを得さる意思を有し且つ其の事實は總て知り居りしものならさるべからず。(二)其の事實か成立せしものとすれは必ずや强く記者の想像を刺激し之を其の概念の內に入れしと思はさるを得さる事實ならさるべからず。

三　積極的論理法は文書の上にて確定せる事實より文書に記載せさる或る他の事實を推論するに在りて之を爲すには現在の人性と過去の人性との間の譬喩(アナロジー)を應用するに在り。凡そ現在に於て吾人は人生の事實か相互に關聯するとを認む。一定の事實か與へられたる時は必ず他の一定の事實之に從ふ(社會生活の經驗法)。此の理論を推して過去に於て現今と齊しき事實ありし時は必す或る一定の事實ありしならんと推論するなり。此の命題は二個の命題に歸着す。第一は一般的にして人性の經驗より導くものなり。第二は特別的にして文書より導くものなり。例へは「サラミン(Salamine)はフェニシア語の名稱を具す」と云ふ特別命題

(歴史事實)より始むるとせよ。乃ち『市府の名稱を表はす言語は之を建設せし人民の國語なり』と云ふ一般命題に由り『フェニシア』語の名稱を有するサラミンはフェニシア人の建設に係りしものなり』と結論するとを得。此の結論の正確を期する爲めには二箇の條件を必要とす。即ち(一)此の一般命題は正確に眞實ならさるべからず。其の相互に關連すると稱する二箇の事實は甲の事實か乙の事實を除きては到底生すると能はさるか如き密接必須の關係に在らさるべからず。而して此の一般命題は經驗的法則(Une loi empirique)を基礎とすれとも此の法則必すしも一概に眞實ならさるとあり。例へはペテルブルグは獨逸語、シラキューズは希臘語なるに前例の如き經驗的法則を之に適用する能はさるとは人の能く識る所ならん。(二)一般命題を用ゆる前に其の特種の事實の關係に付て精密なる調査を遂けさるべからず。例へは前例の一般命題を用ゆる前に先づサラミンの位置、希臘人及ひフェニシア人の習慣を研究する必要あり。然らずんは往々速斷に陷り易し。要之精確なる一般命題及ひ過去の事實に付き精密なる知識を具ふると肝要なり。

終りに臨み第一に注意すべきは止むを得さる自然の傾向として殆んど吾人の社會的生活の智識の全躰を構成する常識的眞理を推理の基礎とし易きと是れなり。抑々斯の如き眞理は社會生活の學問が尚ほ不完全なる爲め往々正鵠を缺くを以て之を無意識的に用ゆる結果危險益々膨大するの觀あり。第二に注意すべきは單獨なる事實より短兵急に結論を引き易き弊なり。此の缺點は文學史に於て殊に甚しとす。恰も醫師か單一なる徴候より直ちに診斷を下すの危險なるか如く史家か單純なる事實より概括的判斷を下すは往々誤解に陷るを免れず。

第四章　一般公式の構成

一　前章に於て事實の類聚及ひ理性の方法を以て確定したる歴史事實は汎て順序好く整へられたりとせよ。本章は歴史全躰の系統的目錄を論せんと欲す。如何なる學者と雖も完全正確なる客觀的事實を第一の要素とせさるはなし。各々其の研究題目の如何により一の事實か他の事實より必要不必要なりと云ふとはあれとも歴史は其の不必要なる事實を無視する能はさるや亦明かなり。而して歴史を科學に構成するには事實の粗生物を改良したる結果を公式(Formule)に

縮めて取扱ひ易からしむ。

二　人生の事實は複雜にして變化し易きものなるを以て之を化學的事實の如く僅に簡單なる公式に縮寫すると難し。故に歴史は他の人生に關する諸科學と同じく志紀的公式 (Formules descriptives) を用ゐて其の目的を全ふす。夫れ公式は簡單にして明瞭なるを常とすれとも又精確にあらずんは漠然として其の要領を得さるなり。故に此の二者を折衷して不必要と認むる事實を除却し且つ其の事實の眞相を隱蔽せさる限度に於て止まるを原則とす。又文書は事實の性質に從ひ或ものは詳きに過き(ウオーテルローの戰の如き)、或ものは簡に失するあり(テストリーに於ける埃太利人の勝利の如き)。故に此の公式を組成するに臨み能く此の權衡を失せさるは亦歴史家の任とする所なり。

社會の事實は複雜にして往々筆端より逸れ易き性質を有す。該事實を能く捕捉し之を發表せんと欲せは須らく一定精確なる用語を以て缺くべからさる利器となす。若し史家にして用語を善くせずんは能く其の堂に入るを得ず。例へは具躰的名辭を用ゆべき場合に漠然たる抽象的名辭を用ゆるが如きは最も慨まさるへからず。

三　歴史事實に一般事實と單一事實との二種あり。一般事實とは屢〻反覆せらるゝ行爲より成立し一定の人衆に共通せるものなり。若し一般事實の性質を公式に表せんと欲せは凡て事實を組成する躰樣(習慣、制度)を結合し其の事實を他の事實より區別すべし。即ち吾人は暫らく一個々々の差異を顧みずして同一の公式の下に互に相似する一個々々の場合を結合するに在り。此の結合は殊に國語、手蹟の如き文化上の習慣に付ては既に前人の公式に表せるものを踏襲するを以て極めて容易なれとも此等の公式は單に皮相的形式に止まり當代に於ける人の行爲及ひ思想の眞相に到達せさると多し。例へは國語に於ては單に其の文意を論じ眞の發音に及はす、宗教に於ては形式的獨斷及ひ禮式に拘泥し眞正なる人衆の信仰に及はす、道德に於ては嚴はれたる教戒なれとも有效なる理想にあらす、制度に於ては形式的法規なれとも實際の運用に非るなり。故に便宜的形式の知識は又眞實なる習慣の研究と相俟て其の用を爲すものなり。

若し風俗に付き精確なる範圍を定めんと欲せは其の習慣の行はるゝ所の最も隔

れる點と其の習慣の最も共通せる地域とを索むべし。其の風俗に與りし人衆の群を指示し且つ殊に甚しく行はれたる副群を指示するとも亦必要なり。公式は又風俗の期間を定むることを要す。即ち吾人は其の始終の極端を觀察すべしと雖も二個の單獨なる最古最近の場合を指示するのみにては十分ならず。其の句點を定めさるべからず。

風俗の進化を公式に縮寫するに當り一般公式は何時及ひ何處に進化が始まり又終りを告けしやを指示し且つ其の變化の性質を究む。凡そ進化は之を數個の段落を分つことを得。詳言すれは各人の習慣は一人之を行ひ他の人之に倣ひて風俗となる。これと同理に依り社會的職業は當初自然に之を試みる人によりて行はれ斯の如き人か他に認められたる時に職業上の資格を得。是れ個人の創業か一般人の模倣及ひ認識を促せる第一段階なり。此の風俗か遺傳的のものとなり強制的風俗若くは規定に變化し、人は是に於て世襲的資格を得。從て實利的若しくは道德的制裁力を授けらるゝに至る。是れ世襲的權勢的段階にして社會の破壞せらるゝ曉まで繼續す。風習は慣ひ法規は遵奉せられず主權者其の權を失ふに至るは是れ叛亂及ひ分裂の段階なり。終りに臨み或る文明社會に於ては其の法規か往々人民の批評を受け主權者は屢、彈劾を受け臣下の一部分憤起して急激なる變化起り政府の分子を改造することあり。是れ改革又は革命の段階なり。

四　單一事實を更に分つて一個人の事實(即ち傳記)と單獨なる事件とす。兩者は何れも歷史上の進化に影響せし人間及ひ事件に限らざるべからず。偖て歷史的人物の志紀的公式を組成せんと欲せは其の傳記及ひ習慣より特種の事實を採拾すべきは勿論、其の他彼の生理的狀態(健康)、教育上の感化、當時の社會事情を參照すべし。即ち其の傳記よりは彼の經歷を決定し社會に影響を與へし事業を採り其の習慣に付ては就中其の事業に對する彼自身の概念、生活の概念、知識、嗜味、習慣等を決定すること極めて必要なり。然かも斯の如き人物の性格を發揮するに當ては二個の危險を犯さゝるべからず。即ち一は該人物か彼自身に對して下せし斷言によりて公式を組成し易きことにして一は戲曲小說の如き想像的人物を研究したる結果として人物の行爲と思想との連絡を悟るが爲め現實眞正の人物に斯の如き批判を其の儘利用し易き弊に陷ることなり。愼むべし。

歴史上の事件を敍せんと欲せは其の性質、其の範圍を精密に確定するとを要す。夫れ一事件の性質と云へるは即ち他の事件と區別すべき特色にして單に時、處に關する外界の事情のみならず其の起るに至りし有樣、其の直接原因を言ふものなり。抑々行爲の起るに至りし動機を決定するは其の行爲を比較するに在り。即ち第一に之を行ひし人の宣言と第二に此の執行を見し人の解釋に因らざるべからずと雖も之れに黨派的感情を狹むとは慎むべきとなり。次に事件の範圍とは其の場處(其の起りし場處及ひ其の直接なる影響の波及せし場處)及ひ時期(其の事件の始りし時と其の結果を告けし時)を指示するとなり。

五　歴史事實の志紀的公式は單に性質的(Qualitatives)なれは只これか抽象的觀念を與ふれは可なりと雖も實際事實か占有せし場處を實現するには分量(Quantité)も亦極めて必要なり。例へは或る風習か一百人の間に行はれし乎將た百万人の間に行はれし乎の問題は輕々に看過すべきものに非ず。偖て分量を公式に導く爲め史家か普通用ゆる方法は(一)La Mesure (二)Le dénombrement (三)L'évoluation (四)L'échantillonnage (五)La généralisation の五種なり。

六　抑々志紀的公式のみにては未だ歴史の完成を告くるに至らず。尚ほ其の事實を類聚し其の總躰の内容を發現せざるべからず。次に事實相互の關係を研究せさるべからず。而して歴史は其の知識を獲得する方法の極めて不完全なるを以て之より得たる知識の躰度を決定すべき準備的作業を必要とす。吾人の知識の範圍に就て言へは文書により補充せられさる空處と他の完全なる知識とを公式中に於て明かに區別せざるべからず。

七　志紀的公式は各事實の群を排列するものにして概括的結論を得るには此等の微細なる結果を一般公式に結合せざるべからず。吾人は國語、宗教、技術、政府を比較し互に相似せる事實を類別するとを得。是れ抽象的類別法と稱するものなり。又吾人は實在の個人の實躰的の群を比較し又歴史上著名なる社會を取り其の異同の點に從て之を類別することを得。是れ具躰的類別法と稱するものなり。

八　吾人常に惟へらく抽象的に分たれ而して異れる種類の下に分たれたる種々の風俗(技術、宗教、政治、制度)は事實上孤立したるものに非ず、各々共通の特質を有

し其の一の變化か他の變化を來すほど互に相關聯したるものなりと。是れモンテスキユーか法の精神(l'Esprit des Lois)中に於て説明せる基本觀念なり。此の關係は所謂符合(Consensus)と稱するものにして獨逸學派よりは聯絡(Zusammenhang)の名を享けたり。夫の民の精神(Volks geist)と云ふ理論は此の概念に胚胎せしものにして此の思想は誤て佛國に輸入し國民の精神(Âmenationale)の名を博しぬ。又此の概念は史家ランプレヒトか説明せる社會の精神に關する理論の基礎を成せるものなり。

九 前節に述べし符合(Consensus)を説明せんと欲せは須らく種々の風俗習慣に共通せる原因を究むると必要にして深く此の原因の蘊奥を尋ぬるには歴史哲學に稱すべき範圍に入らさるべからず。此の理由に因り所謂歴史哲學歴史の法則及ひ原因を發見する必要起る。

歴史の法則及ひ原因を説明する最も自然の方法は所謂超絶的原因即ち「攝理は事件の全方針を神に知られたる結果に導くものなり」と云ふ法則を認むるに在り。蓋し科學は現象の實效的原因(les causes déterminantes)を研究するものにして究極の原因(Les causes finales)を研究する義務を有せす。故に今日は斯の如く神學の原則を史學の上に適用するもの極めて稀なり。

次に歴史の合理的性質(Caractere rationnel)を主張する所論に依れは畢竟眞正なる歴史事實は同時に合理的なり、換言すれは汎て社會の事實は其の成立の理由(raison d'être)を有す、即ち歸する所、社會の利益に轉化する傾向を有すと説けり。是れヘーゲル派の基本觀念にしてランケ、モムセン、ドロイゼン(以上獨逸人)クーザン、テーヌ及ひミツシユレー(以上佛國人)の祖導する所なり。蓋し此の説は明かに攝理の存在を基本觀念とする超絶派の説に聊か修飾を加へたる議論なるとを示す。是れ正に安慰的の議論なれとも科學上より觀たる演繹的設題にあらす。否吾人の認むる所に依れは歴史事實は必しも最も合理的なる方法、即ち人性に利益ある方法に於て起れりと限らず。又凡そ社會の制度は之を建設せし人の利益の外、他に何等の原因をも有せさるものと斷定すること能はず。却て實際の事實は寧ろ反對の結論を示すが如し。

前説と同じ哲學上の系統よりしてヘーゲル派の史家クーザン、ミツシユレか主張

する觀念論(la théorie des idées)の學說起りしと雖も前同樣の非難を免れず。又人生の繼續的必要的進步說は實驗哲學者の唱導する所なれとも是れ單に形而上的設題に過きず。單に進步(Progrès)と稱するも吾人の撰擇を基とする主觀的表示に過きさるなり。

次に風習及ひ制度發達說(Entwickelung)あり。此の說に據れは學者か自然の直喩(Métaphore)の影響を受け其の繼續關係の餘り秩序的なるに感じ風習言語、宗教儀式、獨斷法律)の進化を以て恰も植物の成長と等しき有機的發達ありし如く信すると雖も然かも正確に働作を爲し思想を費す個人以外に歷史事實の原因を求むる能はさるは自明の理なり。

次に同一の社會に成立せる事實の進化を互に比較し歷史派の學者は聯絡(Solidarité)即ちZüsammenhangを發見せりと稱する說あり。然れとも此の議論の前提には既に社會夫れ自身に歸する永久的又一般的原因の成立を認めさるべからず。此の前提は正に獨斷なり。其の他比較研究法(Méthode comparative)を用ゐて此の目的を達せんと欲する學者あれとも(例へは比較言語學、比較神學、比較法學、此の方法は事實の起りし事情全躰の智識を研究すべき場合(例へは史學)に適用すべきものにあらず。

抑々歷史家は或は事實を觀察せし文書記者に依り或は吾人か凡て今日に於て以察する處の原因の譬喩(アナロジー)に依りて其の原因を知る。而して歷史の全躰は明かに相關連したる事實にして其の一は必ず他の一を決定すべき原因たり。例へはモンゴメリー(Montgomery)の劍戟を玉躰に貫きしとは顯理二世崩御の原因にして此の崩御は政權ギース家に遷移せし原因なり。而してギース家の隆盛は新教徒勃興の原因なり。

抑々同一社會の異れる風俗の聯絡(Solidarité)の原因を確認せんと欲せは須らく言語上に表はれたる抽象的便宜的形式(例へは獨斷宗教禮式制度)に拘泥せす、常に思量働作を爲す人間の性格に深く注目するとを要す。又活動の種類に準じ聯絡の程度に深淺の差あり。例へは經濟的、社會的、政治的生活の如く個人の相集合關連して働くべき活動の種類に付ては聯絡の程度深く之に反して技術科學の如く個人か各々自由に行動する場合に於ては其の程度甚だ淺し。故に吾人は此の差異

に深く注意するとを要す。次に進化の原因を確認せんと欲せは進化するとを得る唯一物、即ち人間を研究すると必要なり。凡て進化の原因は或る人の有形的狀態又は風俗に對する變化に基き而して此の變化は更に之を二種に分つとを得。即ち曰く人間は同じ人間なれど他を摸倣し、若しくは他より强制を受けて行爲思想の方法を變する場合、曰く國風俗に依りし人散失して新風俗に依る他の人民之に代りし場合是なり。斯の如き時代の革新は今日に於て最も有效なる進化の原因にして過去に於ても亦又然りしなり。

第五章　表彰

一　元來歴史は記憶すべき事件の物語として考へられ、偉大なる事業若しくは一人、一家族、一人民に緊要なる事件の記憶を藏し遺き後世に傳ふるとは、スーシディッド又はティット、リーブの時代に於ける歴史の主眼なりき。加之歴史は昔より先例を蒐集したるもの、又歴史の知識は生活殊に政治的生活(文武)に對する實際的準備として考へられたり。現にポリーブ及ひプルタルクは敎訓的に歴史を叙し自から處世法を與ふるものと號せり。又歴史上の著作は概ね一人の生活若しくは一人民又は特別時代の生活に止まり未だ嘗て今日の如き概括的の歴史なるものなかりき。此の時代に於ける史家の目的は人を樂ましめ又は之を敎訓するに在るか故に文學の一分科たる地位を占め從て立證上微細なる點まで叙するを要せず、又古文書に基き起稿せし史家は該文書の本文と自己の艸せし本文とを區別せず、美文的に其の作を修飾しぬ。例へは希臘のエフホール、羅馬のライット、リーブの作の如し。

降てルネイサンス時代の記者は概ね直接に古人の作に模擬し歴史の趣旨は基督敎を辯護し且つ敎訓の爲めに設けられたるものと信じぬ。此の思想は伊太利に於て大に行はれ降て十七世紀の頃に至るも尙ほメゼレーの如き古代の典型に據れる史家を見たり。夫れ然り、然りと雖も文藝復興時代の歴史學には前時代と異れる二個の特質を見る。即ち一は前時代の如く單に一人、一家族、一人民の歴史のみならず萬國歴史をも包含せしめしとなり。此の方法は加特利の史家ユーセーブ及ひオロースの創めしものにして中世の頃盛んに行はれぬ。他の一特點は註釋

を本文の中に挿入せしとなり。

第二の時代即ち十八世紀以後の哲學者は歴史を以て人間の處世上に利益ある研究に充つるのみならず尚ほ進んで人の風俗の研究に充てたり。從て彼等は啻に政治上の事實のみならず、更に技術、科學、工業及ひ風俗の進化に注目せり。夫のモンテスキュー及びボルテイルは卒先して此の主義を傳へ l'Essai sur les maeurs は斯の如き歴史を代表せる第一の作なり。此の主義に據れは詳細なる政治上及ひ軍事上の物語は從前の如く史學上に重きを爲せとも尚ほ人生の進歩(Progrès)をも文明史の名の下に併せ敘せり。之と同時に獨逸の大學殊にゲッチンゲン大學の教授は其の教授上の用に供する爲め Manull (正確なる事實を秩序的に集聚したるもの)を編纂し尚ほ一歩を進めて從來曖昧茫漠の裡に葬られし文明の觀念を發揮し國語史、文學史、技術史、宗教史、法律史、經濟史等の研究にまで推及せり。是に於てか史學の範圍は非常に擴張し其の研究は益々科學的となり之に加味するに古代の修辞學的、愛國的、哲學的の表彰を以てしたり。

十九世紀の始めより歴史家に明かにローマンチック派の影響を受け其の表彰の

法も之か爲めに一生面を開き主として讀者の想像力を呼醒し感情に訴ふるか如き筆法を以て消滅せし實躰の詩的幻像を表彰したり。此の主義は直接に批判を無視し其の結果、文學上價値なきものは歴史の材料に非るが如く想ひぬ。故にローマンチック派の歴史家は題目、趣向、證據、文躰を撰ぶに臨み主として讀者の感動を惹起すに足るものを發見するに苦心したりしを以て其の極、直截に言へは所謂歴史小説の範圍を侵せしか如き觀を呈せり。此の派を代表する史家は先づアッペ、ベル、セレミー、シャトーブリアンの輩にして、デゾブリー氏の Rome au siècle d'Auguste 及びオーガスタン、シエリー氏の Récits mérovingiens の如きは此の種の著名なる作なり。

要之殆んと紀元千八百五十年以前の歴史は歴史家及び讀者に對して單に文學の一分科と見做されぬ。此の斷定に對する確證は即ち當代の史家か其の著作を後日に至り毫も改竄するとなくして版を新にし又公衆か之を常例として毫も怪まさりしに看るも明白なり。苟も科學者たるものは續々其の舊作を改め訂正すべき義務あるは勿論、其の著作か千古不磨の形式として存するを望まず、又永久に後

世の讀者に愛讀せらるゝを目的とせず。若し其の研究の結果か更に後世の學者の注意を惹き尙ほ深邃なる研究の端緒に供せらるゝはそれにて十分科學的著作の目的は遂けられたるなり。即ち人生の科學上の知識に多少寄與する處あれはたれり。何人も今日ニユートン若くはラボアシエーの作を讀ますと雖も以て彼等か科學上の大家たる地位に寸毫も關係せす。反之テーガスタン、シエリー、マコーレー、カーライル、ミッシエレー等の原作か毫も改竄訂正せらるゝことなくして今日に至るまて尙ほ戸毎に誦讀せらるゝは何ぞや。是れ歴史の實質より其の形式を重んじ史籍を以て一の歴史小說と同視する通俗の見解に陷りしものなり。

二　抑々歴史の眞の趣旨は人を樂ましむるにあらず又人間行爲の處世法を說明するに非ず、將た人の惰情を鼓吹するものにも非ずして單純に知識なりと云ふ原則に從ひ歴史的表彰の科學的形式か漸次に發達し略ほ一定するに至りしは過去五十年の事に屬す。

(甲)若し特別なる一點、單純なる一事件、事實の一躰を敍せんとせは一事記(Monographie)を書くべし。例へば個人生活の全躰又は一部、二時代間の一事件の如し。凡そ一事記の模範は其の題目の各々千差萬別なるか故に一定せされとも由來一事記は史的著作として餘り價値なきものなり。只注意すべきは一事記を敍するに當り其の表彰の穩當を期するは無論にして何等の理由もなくして誇張、虛飾に失する敍事法を用ゆるは最も愼むべきとなり。假令其の敍事か陳腐なるも正當なる結論なれは毫も恥づるに及はさるなり。

(乙)一般的性質の歴史は其の學生に對するものと通俗の讀者に對するものとに分けて論せんとす。

(一)主として學生及專門家の爲めに作られたる著作は目錄(Répertoires)梗要(Manuels)及ひ科學的歴史の形式に存す。目錄とは或る種類に屬する正確の事實を蒐集し之を引照するに便利ならしめむか爲め整列せるものなり。若し斯くして蒐集したる事實か精確なる年代に起りしとすれは年代順序を採用すべし。例へはJahrbücher der deutschen Geschichte(獨逸歴史年鑑)の如く科學上の批判及ひ證據に價するものゝみを含蓄し他の評隲に關するか如き部分は凡て淘汰せるものの是れなり。若し之に反し時を以て事實を排列すると難き時は字母順に據るべし(字書)。例へ

ば制度字彙、傳記字彙、歴史字彙例へはベウリウィンツ著 Reale Enoyklopaedie) の如き是れなり。科學的梗要 (Manuels scientifiques) は要するに目錄の一種にして其の目的は容易に且つ駿速に批判の結果を集拾せしむると同時に新なる研究の段階に具ふるに在り。此の種の著作は極めて簡潔なるを尚ぶ。夫のシエーマン、マルクルト、モムゼン、ギルベルト、クルムベヘル、ハルナッグ、ミューレル等の梗要は就中有名なるものなり。昔時の目錄及ひ史料梗要は一個人の手によりて全く構成せられしと雖も唯た一人にて浩瀚なる事實を適當に排列すると頗る難きを以て今日に於ては分業の手段を用ゆると多し。即ち國籍又は言語の差異により數多の分擔者各、其の部署を定めて之を排列す。例へはミユレル、グレーベルの如き大家の史料梗要は各部各々受持專門家の手に成りたるものなるが如き是れなり。此の事業を分擔するに際し注意すべきは(一)其の受持範圍は他より成るべく獨立したる性質を有すると(二)各分擔者に任かせたる部分は一定の範圍を有すると等なりとす。若し其の分擔者の數非常に多く其の受持部分か餘り狹く限定せらるゝ時は各分擔者の自由及ひ責任は消滅する恐れあり。

科學的歴史は只一度起りし事件の物語を與ふると同時に社會進化の方針を支配する一般事實を叙するとを其の目的とし文學上の修飾及ひ證據なき斷定を全く排除したるものなり。例へばグロートの著作を初として獨逸のシユロッセル、ヴ

ユーベル伊太利のカンツの作の如き皆然り。

(二)蓋し通俗の讀者に對する歴史と專門家及ひ學生に對する歴史とを故らに分つの理由なきも而も簡潔にして通俗に讀まれ易き科學的著作も亦歡迎せさるべからず。由來佛人は斯の如き著作に巧妙にして其の讀書社會には頻々として此の種の著作出つるを見る。然れとも此の通俗と云ふとは一歩を誤れは頗る危險に陥るとを注意せさるべからす。實際上坊間に喧傳せらるゝ作には殆ど近世の歴史表彰の理想と一致せさるのみならす往々古代ルネサンス時代の歴史及ひローマンチック派の舊套を脱せさるもの多し。

近世の學者にして歴史の科學的研究に對し攻擊の矢を放つものなきに非ず。由來獨逸人は辯難家の性癖を有し夫のモムゼン、ドロイゼン、クルチュース、ランプレヒトか其の讀者に對するや相手方を感動せしめ、不知不識の間に我説の當れるを知

らしむる爲め頻りに鼓吹的筆法を用ゆるを以て其の極嚴峻なる科學的態度を失し古代に於ける史文學（ヒストリオグラフィー）の缺點に復歸するか如き觀を呈するとあり。然かも考一考せよ。形式は措ひて問はずと云ふも、されはとて純粹硬直簡潔富贍なる文体を排するものにはあらざるなり。フェステルドクーランジは正に此の資格を具へたる史家なりき。要之史家は必しも修辭的に敍すべからずと云ふの義務なしと雖も苟も強ひて外形を修飾し恰も羊頭を懸けて狗肉を賣るが如き筆法を使用することあるべからず。

結論

一、歴史は單に史料の利用なり。史料は漸々其の量を減し行くものにして歴史は此の有限の史料を唯一の根據とするを以て此の事情は勢ひ史學の進歩を限定せざるを得ず。古代歴史は其の參考史料の極めて缺乏せるの故を以て史學の研究が漸次新時代に移らんとする傾向あるは之が爲めなり。抑々歴史家は他の科學者と異り彼自身の直接觀察に基きて歴史に必要なる材料を蒐集するものに非す。即ち唯た昔時の觀察者に依て今日まで傳へられたる知識を利用するに過きず。歴史に在ては他の科學の如く直接の方法に由り知識を得るに非すして其の方法は間接なり。從て歴史は觀察の學問に非すして理性の學問なり。自己か實際知らさる事情の下に觀察せられし事實を用ゆるが故に之れに批判を施すことを要し而して此の批判は譬喩（アナロジー）の論理を基礎とす。批判の下に生じたる事實は孤立分散せるを以て之を建設的に組織するには現在及ひ過去の事實の相似を基本とせる譬喩の作業を適用せさるべからず。

文書を審査し過去の事實及ひ進化を知らんか爲め必ず行はさるを得さる作業は甚た多し。是に於てか則ち歴史事業の分業起る。從て一方に於ては文書を研究する學者は其の批判を可及的正確にし且つ其の勞力を儉約する爲め之を合併すると必要なり。又他の一方に於ては廣き綜合に供する爲めの部分的綜合（一事記）の記者は共通の方法に據らさるべからず。次に經驗ある著者にして史的組織の概括的著作を科學的に結合せんと欲せは須らく個人的研究を排して部分的綜合の研究に總ての時を費すべし。而して若し此の勞作の結果として社會進化の性